

竹林寺跡

県立牧野植物園南園再整備事業及び温室建替えに伴う
埋蔵文化財試掘・発掘調査報告書



2010.12

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

竹 林 寺 跡

県立牧野植物園南園再整備事業及び温室建替えに伴う
埋蔵文化財試掘・発掘調査報告書

2010.12

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター



調査前風景(温室南より竹林寺を望む)



1区試掘状況(西より)



皆山集第二卷 宗教(2)・歴史(1)編
高知県立図書館1975より転載

序

現在四国霊場第三十一番札所に数えられる竹林寺は、その山名も大唐の聖地にちなんだといわれる高知市五台山にあって、幾多の伝承と平安時代以来の仏像を蔵する古刹です。本来の寺域は現在の範囲を超えて県立牧野植物園南園一帯を含むと考えられますが、これまで考古学的なメスが入れられたことはありませんでした。

このたび、開園五十周年を迎えた植物園の整備事業計画を受けて高知県教育委員会文化財課が試掘確認調査を実施した結果、中世～近世の遺構や遺物が出土し、遺跡が南園一帯に良好に残っていることが判明しました。同園では、このような竹林寺の遺跡を貴重な文化遺産と捉え、工法を検討して埋蔵文化財を保護することとしましたが、温室の建替え工事については文化財課との協議の結果、やむを得ず遺跡を記録保存するための発掘調査を実施することとなりました。

一連の調査の結果、平安時代末～室町時代後半に及ぶ時期の中国産貿易陶磁器や、近畿方面、常滑、備前産の焼きものが出土し、当寺が海上交通を介してこのような製品を入手する財力と手段をもっていたことが明らかになりました。高知市内における発掘調査は、埋立て地が多いことや市街化により従前は進んでおらず、近年になって成果が蓄積されてきたところですが、それによると地理・歴史の両面で土佐の中核部を占める浦戸湾周辺的重要性が垣間見えており、今回の調査成果もその一端を示す成果といえます。

古絵図などが伝えられる江戸時代のものについては、今回多数の陶磁器とともに瓦と礫や石を使用した遺構が検出され、文献で知られていた当寺の繁栄がうかがえます。純信とお馬の物語に思いを馳せることもできるでしょう。

今回の調査規模は大きなものとはいえませんが、上記のような成果は、五山文学に名をはせた吸江庵を含む当山と浦戸湾の歴史を、東アジア的視野で位置付けることのできる資料であり、現在の経済・交通上の地勢からは発想し難い地域の歴史を発信できるものといえるでしょう。埋蔵文化財は、このように埋もれていた新たな資料を我々に提供してくれるかけがえのない歴史資料です。今後ともその保護と調査に対するご理解とご協力をお願い申し上げます。

末尾になりましたが、全面的な協力を頂いた牧野記念財団、高知県環境共生課、葉山造園、発掘・整理作業に携わって下さった作業員の皆さまに厚く御礼申し上げます。

平成22年12月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 小笠原孝夫

例 言

1. 本書は、高知県教育委員会が平成18年度から21年度に実施した、県立牧野植物園南園再整備事業及び温室建替えに伴う竹林寺(旧境内地)の試掘調査及び発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会が高知県文化環境部環境共生課及び財団法人牧野植物園の依頼を受け実施し、整理作業及び報告書刊行については、重点分野雇用創出事業として高知県(環境共生課)から委託を受け財団法人高知県文化財団(埋蔵文化財センター)が、実施した。
3. 竹林寺跡は、高知市五台山3584-Iに所在する。
4. 調査面積
 - (1)試掘調査:112㎡
 - (2)本調査 :449㎡
5. 調査期間
 - (1)試掘調査:平成19年1月23日～3月18日、同7月10～18日(1～4区)、平成21年3月4～7日(5～8区)
 - (2)本調査:平成19年度:7月18～31日(4区)、平成21年度:6月9日～7月13日(5～8区)
6. 調査体制
 - (1)平成18～19年度

総括	高知県教育委員会文化財課長	竹内一雅
総務	同チーフ	松田直則
調査担当	同主任社会教育主事	池澤俊幸
 - (2)平成21年度

総括	高知県教育委員会文化財課長	片岡博彦
総務	同チーフ	松田直則
調査担当	同 主任	弘田和司
 - (3)平成22年度

総括	高知県埋蔵文化財センター所長	小笠原孝夫	同調査課長	廣田佳久
総務	同総務課長	里見敦典	同主任	弘末節子
担当	同調査課第三班長	池澤俊幸		
7. 本書は第1章Ⅰ・第3章・第4章Ⅰ・第5章・附編を池澤、第1章Ⅱ・第2章・第4章Ⅱを弘田が執筆し、図表作成や撮影は各々の担当が行った。編集は池澤が行った。
8. 発掘調査に際しては、財団法人高知県牧野記念財団、高知県環境共生課、葉山造園の協力を得た。また、現地の石垣や景観に関して、石川県金沢城調査研究所長 北垣聰一郎、名護屋城博物館 高瀬哲郎、文化庁記念物課主任調査官 本中眞、出土遺物について九州陶磁文化館 大橋康二、高知市教育委員会 浜田恵子の指導を得た(敬称略)。
整理・報告書作成作業の整理作業は竹村加奈子であり、また入野三千子、岡林真史、竹村延子、藤原ゆみの協力を得た。報告書作成等に関して埋蔵文化財センター諸兄から教示を受けた。

9. 図や文中の方位は磁方位である。遺物実測図は食器等を原則的に縮尺1/3とし、貯蔵・調理具・瓦等で1/4としたものはスケールや注記を添えた。
10. 出土遺物は、H18,19年度分を「竹林寺」・「07-17 K T」、21年度分を「12KT」と注記して高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
I. 平成18, 19年度	1
II. 平成20, 21年度	3
第2章 地理・歴史的環境	5
第3章 1～3区の試掘調査	
I. 対象地の地形と調査区の概要	9
II. 1区	9
III. 2区	15
IV. 3区	15
第4章 温室付近の試掘及び発掘調査 — 4区, 5～8区 —	
I. 4区	
1. 試掘調査	19
2. 本調査	22
II. 5～8区	
1. 5区	31
2. 6区	33
3. 7区	38
4. 8区	51
5. 9区	53
6. 包含層等の遺物	53
第5章 まとめ	55
遺物観察表	60
付編 石垣等専門家視察時の覚え書き	67

挿図目次

Fig.1 竹林寺跡位置図	1
Fig.2 工事前地形図と調査区配置図	4
Fig.3 五台山現況図	7
Fig.4 周辺の遺跡分布図	8
Fig.5 TP1平面・土層・出土遺物実測図	10
Fig.6 TP2平面・土層・出土遺物実測図	11
Fig.7 TP3平面・土層・出土遺物実測図	13
Fig.8 TP4平面・土層・出土遺物実測図	14
Fig.9 TP6・7土層・出土遺物実測図	16
Fig.10 TP8平面・土層・出土遺物実測図	17
Fig.11 TP5・9・10土層・平面図, 1・2区出土遺物実測図	18

Fig.12 牧野植物園温室付近地形測量図及び調査区位置図	20
Fig.13 4区本調査区遺構配置図	21
Fig.14 4区本調査区壁面土層断面図	23
Fig.15 4区TP13西壁セクション図	24
Fig.16 SK2・4・5, SX6, P1・3・4・5平面・エレベーション図	25
Fig.17 SX8, SD2, SX7セクション図	25
Fig.18 SK8・9, SX9, P8, SX8平面・土層・エレベーション図	27
Fig.19 4区出土遺物実測図	27
Fig.20 5区全体図・北壁土層断面図	30
Fig.21 SK10平・断面図	31
Fig.22 SK11平・断面図	31
Fig.23 SK12平・断面図	32
Fig.24 SK13平・断面図, 出土遺物	32
Fig.25 SK14出土遺物	33
Fig.26 SD3平・断面図, 出土遺物	33
Fig.27 6区全体図	34
Fig.28 SK15平・断面図, 出土遺物	34
Fig.29 SK16・19平・断面図	35
Fig.30 SK17平・断面図	36
Fig.31 SK18平・断面図	36
Fig.32 SK19出土遺物	37
Fig.33 7区全体図, 西壁土層断面図	38
Fig.34 SK20平・断面図, 出土遺物	39
Fig.35 SK21平・断面図	39
Fig.36 SK21出土遺物	40
Fig.37 SK22平・断面図	40
Fig.38 SK22出土遺物1	41
Fig.39 SK22出土遺物2	42
Fig.40 SK23平・断面図, 出土遺物	43
Fig.41 SK24平・断面図	44
Fig.42 SK25平・断面図, 出土遺物	44
Fig.43 SK26平・断面図	44
Fig.44 SK27平・断面図, 出土遺物	45
Fig.45 SK28平・断面図, 出土遺物	45
Fig.46 SK29平・断面図	45
Fig.47 SK30平・断面図	46
Fig.48 SK30, SX5出土遺物	47
Fig.49 SK30出土遺物	48

Fig.50 SK31平・断面図	48
Fig.51 SK31出土遺物	49
Fig.52 SK32平・断面図	49
Fig.53 SK32出土遺物	50
Fig.54 SK33平・断面図, 出土遺物	51
Fig.55 SD4平・断面図	51
Fig.56 SK34・35平・断面図	52
Fig.57 6区包含層の遺物	53
Fig.58 7区包含層の遺物	54
Fig.59 「五臺山圖」『四国徧札霊場記』	59

表目次

Tab.1 各調査区の面積・期間等	2
Tab.2 周辺遺跡一覧	8
Tab.3 TP4遺構一覧	12
Tab.4 4区遺構一覧	22
Tab.5 4区各遺構・種類別出土遺物計数表	28
Tab.6 4区グリッドー公共座標対応表	28
Tab.7 1～4区各TP・種類別出土遺物計数表	29
Tab.8 搬入品が出土した主な遺跡	56
Tab.9 今次成果の編年の概要と文献資料等	57

写真図版目次

PL1 五台山山頂より, 北～北東国府方面を望む
PL2 TP1サブトレンチ・TP1試掘終了状態
PL3 TP1試掘終了状態・TP1南壁
PL4 TP1南壁サブトレンチ・TP2試掘終了状態
PL5 TP2東壁・TP2西壁
PL6 TP3試掘終了状態・TP3サブトレンチセクション
PL7 TP3南壁・TP4東～南壁
PL8 TP4ピット検出状況等・TP4試掘終了状態
PL9 TP4 SK1・TP5
PL10 TP5 石垣背面・TP6
PL11 TP7・TP8試掘終了状態
PL12 TP9 石垣背面・4区 TP11 SK30, SX4, SX5

PL13 TP4土師質土器・TP1サブトレンチ
TP8白磁玉縁碗・TP7瓦50出土状況・記者発表・SX8 緊急調査状況

PL14 4区本調査完了状態

PL15 4区本調査完了状態

PL16 4区本調査遺構検出状況・4区本調査区南壁

PL17 4区SD2及びセクション・4区SD2南端染付皿出土状態

PL18 4区SK4セクション・4区SK7, SK6

PL19 4区SX7南北セクション・4区 SX8岩石出土状況

PL20 4区SX8セクション・4区北端部遺構検出状態

PL21 4区北端部遺構完掘状態・P8石, 遺物出土状態

PL22 遠景・5区

PL23 5区・6区

PL24 6区・7区

PL25 7区

PL26 7区・8区

PL27 8区・9区

PL28 1, 4区出土陶磁器

PL29 同前(外面)

PL30 4区SK4出土陶器(刻字拡大)・TP6出土瓦

PL31 1区出土遺物(70のみ4区)

PL32 同前(外面)

PL33 1, 2, 4区出土播鉢, 土鍋, 甕, 瓦

PL34 同前(外面)

PL35 貿易陶磁器, 瓦器, 弥生土器(1～4区)

PL36 同前(外面)

PL37 常滑焼, 備前焼, 須恵器, 土師質土器(1～3区)

PL38 同前(内面)

PL39 1, 2区出土瓦

PL40 5, 6区出土遺物

PL41 6, 7区出土遺物

PL42 7区出土遺物

PL43 7区出土遺物

PL44 7区出土遺物

PL45 2A,2B,2C,3C区, 試掘 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

I. 平成18, 19年度

財団法人高知県牧野記念財団は、2008年3月より開始を計画している「花・人・土佐であい博」及び植物園開園五十周年関連事業に合わせて同南園の整備工事を計画し、文化財の所在状況について2006年7月より県教委文化財課への確認を始めた。対象区は竹林寺跡等に関連する遺跡であり、現在「遍路道」と呼ばれる道や、野面の石垣が存在することから、文化財課が石垣等専門家を現地に招聘した結果、別記のごとくの所見を得た。

同12月末、同財団及び高知県自然共生課(当時)は文化財課への具体的な計画の連絡を始め、工事は2008年4月までに完了したい旨を申し入れた。これを受けて両部局は埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な協議に入り、別表のごとく試掘調査に着手した。調査の結果、後記のごとく対象区域のほぼ全域に中世～近世の遺構・遺物が埋蔵されていることが判明し、工事計画や今後の対象地区内での掘削作業については両部局が緊密に連絡・協議を行うこととなった。また、文化財課では石垣や古道を含めた取扱いの参考となる所見を得るため、機会を捉えて石垣等の専門家や文化庁調査官を招聘した(付編参照)。

2007年6月29日には温室南側にボイラー施設を建設する届出があり、7月10日より下記のごとく追加の試掘調査に続いて本調査を実施し、遺跡を記録保存することとした。当工事は、温室東側にあった施設を上記整備計画に伴って移転するものである。

以上の調査は文化財課が行い、必要な作業員や重機は植物園より適宜提供を受けた。



Fig.1 竹林寺跡位置図

なお、調査1～3区について、竹林寺との連携を重視している植物園では、試掘調査で確認された竹林寺跡に関わる埋蔵文化財を貴重な文化遺産と捉え、開発計画を検討した結果、工事計画区域の大半では掘削を行わない盛土工法を採用することとし、遺構・遺物を保存することとした。

試掘調査

2007年

1月23日(火)調査開始(1区 TP1 ～ 3表土等掘削)。

1月26日(金) 2区着手。

2月1日(木) TP3終了状況撮影。

2月14日(水)強雨。排水。実測継続中。

2月15日(木)記者発表。調査は3区等。

2月19日(月)前日強雨のため排水。埋戻し。2月20日をもって1～3区終了。

3月12日(月)温室南側でTP11,12設定、掘削開始。

3月18日(日)一旦終了。

7月10日(火)温室南斜面裾部分開始(4区.ボイラー施設新築に伴う)。TP13,14。同18日まで。

発掘調査(4区)

7月18日(水)温室南地点(ボイラー施設工事範囲)本調査開始。

7月23日(月)発掘作業員2名雇用。遺構掘削中。熱中症報道が相次ぎ、注意して作業を進める。

7月26日(木)夕刻、調査完了状態撮影。

7月27～31日 測量、撤収。

調査区		対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	期 間	備 考
1区	TP1	1,400	65	2007年1月23日～2月20日	※ 移植や工事に伴う 立会は随時
	TP2				
	TP3				
	TP4				
	TP10				
2区	TP5	360	15	2007年3月12～18日(TP11,12), 同7月10～18日(TP13,14)	
	TP6				
	TP7				
3区	TP8				
	TP9				
4区	試掘	360	15	2007年3月12～18日(TP11,12), 同7月10～18日(TP13,14)	
	本調査	—	63	2007年7月18～31日	
5～8区	試掘	900	32	2009年3月4～6日	
	本調査	—	274	2009年6月9日～同7月13日	

Tab.1 各調査区の面積・期間等

Ⅱ. 平成20, 21年度

平成20年7月22日、環境共生課より牧野植物園温室(埋蔵文化財包蔵地：竹林寺)の建て替え工事計画について文化財課に連絡があった。平成22年早々には工事を完成させる必要があり、工事工程が明らかとなった段階で再度、打ち合わせを行うこととした。

平成21年2月2日には環境共生課より発掘調査実施を想定したうえで早急な試掘調査実施の依頼があり、3月4～6日の3日間で温室内外3ヵ所の試掘調査を実施し、遺構・遺物を確認した。

これを受けて、平成21年4月27日付、21高環共第72号により高知県知事(環境共生課)より埋蔵文化財発掘の通知が提出され、平成21年5月1日付、高文財第110号により発掘調査が必要である旨を通知した。

5月26日に、環境共生課・牧野植物園との発掘調査に関する打ち合わせを行った。工程が確定し、7月からの温室解体工事に先立ち発掘調査を開始する必要があることから、従前のうち合わせによる調査期間を前倒しして、温室内植物の移植作業と並行して実施することとなった。

掘削に使用する機械は植物を移植する造園業者より提供を受け、発掘作業員3名を雇用することで、6月9日からの調査開始が決定した。

発掘調査は、工期及び予算上の問題もあり、発掘作業員3名で1ヵ月という短期間なものとならざるを得なかった。また、地質調査や植物移植作業と並行して行い、それらを優先して行う必要があったこと。排土を調査地内で処理する必要があったことから調査区を8区画に細分して行わざるを得なかった。

また、調査開始後も、温室周辺が来館者の見学ルートになっていたため、植物園側からは調査区周辺を含む清掃作業などを求められた。工事工程の都合ではあるが、発掘調査の期間・体制とも不十分であったことは否めない。

6月9日(火)発掘作業開始。

6月16日(火)1A区調査終了。

6月17日(水)2A・B区調査開始。

6月19日(金)1B区調査開始・終了。

6月24日(水)2A・B区調査終了。

6月25日(木)1C区調査開始。

6月26日(金)1C区調査終了。

6月29日(月)2C区調査開始。

7月7日(火)2C区全体写真撮影。2C区終了。

7月8日(水)3区調査開始。

7月10日(金)3区調査終了。埋め戻し終了。

7月13日(月)資材撤収。発掘調査完了。



第2章 地理・歴史的環境

1. 地理的環境

県立牧野植物園は、高知市の南東部にあり土佐湾につながる内湾の浦戸湾北東岸にあたる五台山の山頂に位置する。五台山は、大小五つの峰からなる標高138.8 mの独立峰で、谷は浅く広い。山頂付近は高知市内を眺望する絶好の場所として牧野植物園のほか四国八十八カ所第三十一番札所竹林寺やテレビ局の鉄塔が所在する。

五台山の北を浦戸湾に流入する国分川や舟入川流域の低地や南の十市山地との境を西に流走して浦戸湾に流れる下田川流域の低地は、沖積作用や干拓によって形成されており、明治初期ごろに高知市内と陸続きになるまで、五台山は大島と呼ばれ浦戸湾内に浮かぶ島であった。

地質的には、古生代に形成された砂岩と泥岩の互層とチャート層からなり、表層は風化物を母材とした赤色土壌となる。

2. 歴史的環境

五台山とその周辺における先人の足跡は、古くは古墳時代に遡るもののその数はきわめて少ない。その中において古代に創建された竹林寺は、五台山山頂を広範囲に占め堂塔伽藍を備え、中近世を経て現代においてもあつい信仰を集めている。牧野植物園の園地の多くも、かつては竹林寺境内に含まれており、今回の発掘調査地点である南園には、古絵図によると「中の坊」、「南坊」、「寺」などの脇坊が点在していた。しかしながら、竹林寺以外の古代以降の遺跡について、明らかになっているものは少ない。

竹林寺のある主峰とその東の峰の間を南に開ける谷の裾部にある鳴谷貝塚は、標高20 mの丘陵上に立地し、3カ所の小貝塚からなる。古墳時代中期の土器片や土錘がみつまっている。

竹林寺は、平安時代初期に編纂された『続日本記』神亀元(724)年三月二十四日の項によると聖武天皇の命を受けた行基聖人がこの地を訪れ、中国の唐の聖地である五台山に似ていることから、神亀元年に文殊菩薩を納め当寺を創建したと伝えられている。その後、平安時代の大同年間にこの地を訪れた空海により真言密教の霊場として再興されたと伝わり、後に四国霊場第三十一番札所として定められることとなった。ただ、平安期後期作の諸仏が現存するものの、創建期を明らかにする資料は今のところない。

中世に入ると、度々武士の乱入に苦しめられており、貞和二(1346)年に足利直義、応仁二(1468)年には室町幕府の管領細川勝元によって禁制が出されている。文明年間には兵火にかかり焼失したがその後再建され、天正十六(1588)年の地検帳には、本堂、仁王堂、塔堂、本坊などのほかに中の坊、北室坊、中院、上坊、妙光寺、下の坊といった脇坊の存在も記されている。関ヶ原の戦い後、土佐国に入国した山内家の二代藩主忠義によって、寺領100石が寄進されるなどあつく庇護された。

寛永二十(1643)年には多くの堂塔が焼失したものの、翌正保元(1644)年には忠義により本堂の大改修や大師堂が再建され、祈願所に定められている。さらに文化五(1808)年にも、竹林寺は文殊堂を除き罹災している。

その後、明治の廃仏毀釈によって大きな打撃を受けるものの、明治三十年代に再興された。が、旧寺域の半分は県有地となり、昭和33年に県立牧野植物園が開園した。

また、純信(じゅんしん)とお馬の恋物語を唄った土佐の民謡「よさこい節」のなかでかんざしを買ったとされる僧・純信も竹林寺の脇坊の一つ、南の坊に住む修行僧であったことが知られている。

五台山西側斜面部には、鎌倉時代の学僧夢窓疎石が文保二(1318)年に開山した県指定文化財吸江庵跡がある。室町幕府のあつい庇護を受け、その後、義堂周信や絶海中津が訪れるなど土佐禅宗文化の中心となった。戦国時代には荒廃するものの、山内一豊の土佐入国後、義子である湘南和尚によって吸江寺として再興された。

五台山の南麓、大島岬の護国神社から竹林寺への旧参道の7～8合目に、貞享元(1684)年銘の石塔がある。幡多郡大月町柏島の法蓮寺の住持日教により建てられたものである。高さ2.98mで、塔身の正面中央には、「南無妙法蓮華経」という題目を刻していることから、「貞享元年銘法華経塔」として県指定文化財となっており、同様のものが安芸郡甲浦(東洋町)と幡多郡宿毛(宿毛市)市山にもある。法華経を地下に埋納しており、経塚ともいえる。

江戸時代には山麓に多くの墓地が形成されており、仙台藩「伊達騒動」で土佐山内家預かりとなった伊達兵部宗勝の墓もこの山中にある。

参考文献

『竹林寺 庭園及び客殿報告書』高知市教育委員会 平成14年

大野康雄『五代山史』 昭和62年

「竹林寺と文化財」『高知市の文化財』高知市教育委員会 平成4年

『高知市遺跡地図台帳(二訂版)』2001年

『土地基本分類調査 地形・表層地質・土じょう 高知』経済企画庁 1966年



Fig3 五台山現況図 「高知市文化財調査報告書第22集 竹林寺の庭園及び客殿調査報告書」高知市教委2002より転載



施工状況(1区北西より)



Fig4 周辺の遺跡分布図

名称	種別	時代	名称	種別	時代
1 竹林寺	社寺	古代～	19 高知城跡	城館跡	中世～近世
2 鳴谷貝塚	貝塚	古墳	20 尾戸窯跡	窯跡	近世
3 吸江庵跡	寺院跡	中世～近世	21 伝下屋敷跡	屋敷跡	近世
4 法華経塔	石塔	近世	22 西弘小路遺跡	屋敷跡	近世
5 伊達兵部墓	墳墓	近世	23 金子橋遺跡	屋敷跡	近世
6 小倉小介・三省父子の墓	墳墓	近世	24 南屋敷跡	屋敷跡	近世
7 池長崎遺跡	散布地	弥生	25 山内家墓所	墳墓	近世
8 池城跡	城館跡	中世	26 潮江城跡	城館跡	中世
9 三里中学校遺跡	散布地	弥生	27 野中兼山墓	墳墓	近世
10 武市半平太旧宅・墓	邸宅・墳墓	近世	28 小石木山古墳	古墳	古墳
11 介良白水遺跡	散布地	古代～中世	29 小石木山遺跡	散布地	弥生
12 介良下組遺跡	散布地	古代～中世	30 鷺尾城跡	城館跡	中世
13 介良遺跡	散布地	弥生～中世	31 簗ノ内遺跡	散布地	古代
14 鹿兒遺跡	散布地		32 横浜城跡	城館跡	中世
15 桜井跡	井戸跡	近世	33 谷時中墓	墳墓	近世
16 国沢城跡	城館跡	中世	34 長浜城跡	城館跡	中世
17 福井遺跡	散布地	縄文～中世	35 雪溪寺	社寺	古代～
18 弘人屋敷跡	屋敷跡	近世			

Tab.2 周辺遺跡一覧

第3章 1～3区の試掘調査

I. 対象地の地形と調査区の概要

対象となった「南園」は東へ下る緩やかな谷地形に展開しており、底部には竹林寺方面から流下する谷川とそれに沿う小径がある。小径は東麓や南麓まで続いており、「遍路道」と呼ばれている。一帯に存在する石垣等について後の附編に記載する。調査対象区はこの道や石垣によって分け、Fig.2のごとく呼称した。1、2区には今次の開発前より池があり、芝が育成されていた。

以下、試掘坑の規模は開口部で測る。図化し得なかった出土遺物を含む計数はTab.7に記す。図中の土質について粘土質シルトを「粘シ」等略記した。

II. 1区

各試掘坑は2.5～2.6m四方を目安として設定した。

TP1のⅥ層やTP2、4のⅣ層、TP3のⅣ・Ⅴ・Ⅶ層には数mm～1.3cm大のチャート等の美しい円礫を含み、近世段階の当区の状況の一端を示す。また、TP2、3、4の各々Ⅳ層は粘土質シルトの土質及び角礫・炭・木・板片等を含む点等に共通性がみられ、近世或いはそれ以降における当地区の埋積状況が推測できる。さらに各TPのⅢ層など上位層は現代の客土で一定の厚みがあり、開園前の一帯の状況を示す。

1. TP1

「遍路道」寄りで、当初は他の試掘坑と同規模で設定したが、直線的に並ぶ石が検出されたため、北壁の土層図を作成後、北側へ拡大し、南北長は4.5mを測る。

検出した石群に関連して次の順に2または3時期を想定できる。1) サブトレンチ底の最下層の群：上面は谷側へ緩く湾曲し、還元色土層に覆われる。直上より土師質土器(10)が出土。2) 直線的に結べる一回り大きな石1～4：南壁際の石4は礎石状。右記の礫敷状遺構よりも下位にある。3) 礫敷状遺構：直上から青磁菊皿(5)が出土。当遺構を被覆するⅥ層には近世とみられる僅かな陶磁器片とともに、数mm～1cm大の円礫を含む。この円礫は黒色の他、白や紫があり、粒揃いで美しいものである。

上記石群と土層との関係は、1)の下層石群はⅧ層中、2)石列と3)礫敷はⅧの上、Ⅶ層中である。土層図から、Ⅶ層は2)または3)の設置に伴う可能性が考えられる。

なお、石1、2、4を結ぶ方位はW-11.4°-Nで、TP2-SD1やTP3の石列の方位又はその直交方位と数度の差である。また北側拡大区のサブトレンチで確認した下層石群も上記の方位で並ぶようにみえるが、関連性には言及できない。北半部では2ヶ所に杭を検出し、東側の杭は竹製である。

2. TP2

SD1は幅60cm、深さ58cmで検出長は2.34m、方位はE-18.2°-Nを測る。SD1内部以外では10数～30数cm大の石が多く検出された。これら遺構や石および堆積土層の観察結果から、次の時間的順序で3段階を想定できる。1) Ⅶ層に含まれる石群。面的に検出された石群は主としてこれに該当。2) ⅥやⅦ層を掘り込み、一部では石を並べたり据えたりしているとみられる。Ⅴ層が該当。当TPの

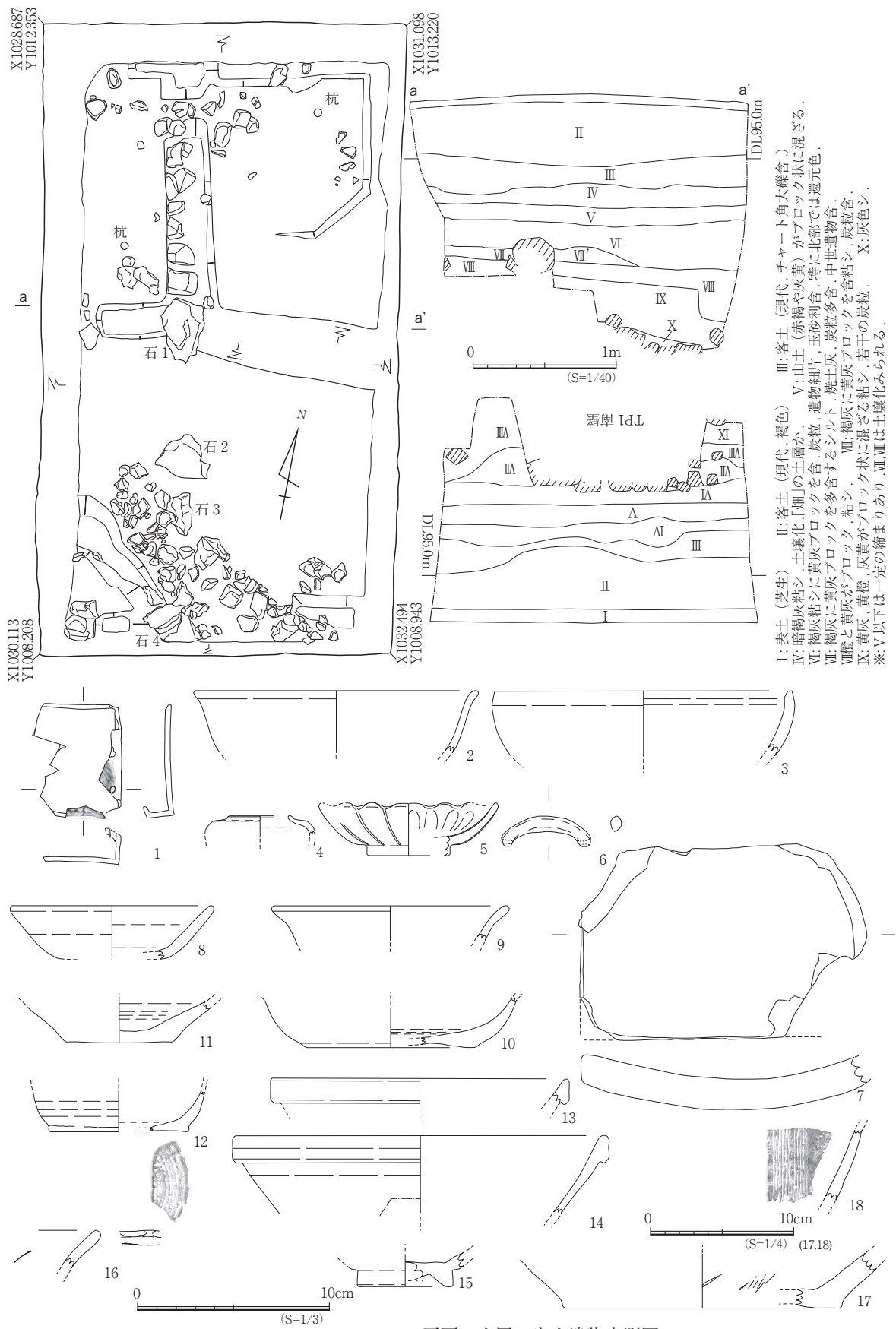
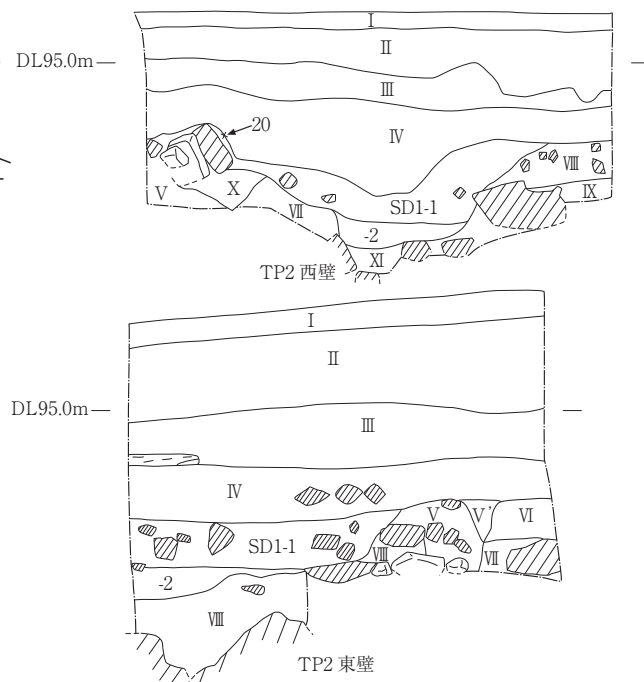
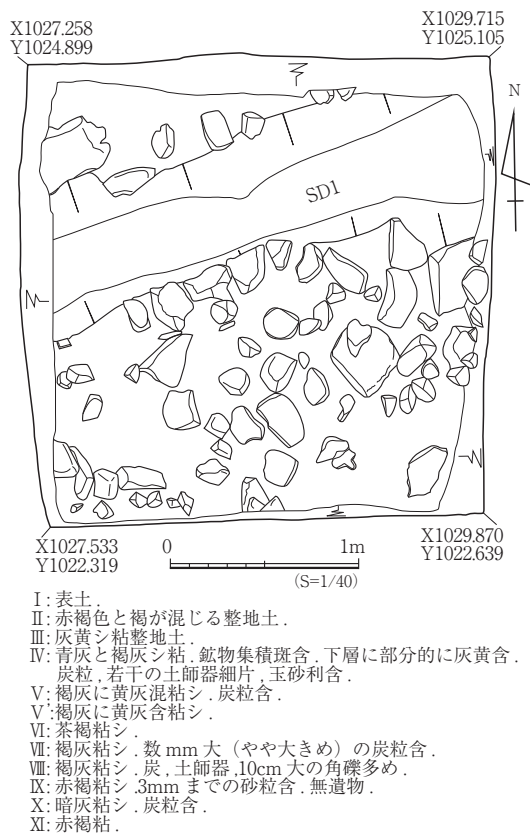


Fig.5 TP1 平面・土層・出土遺物実測図



SD1-1: VIII層と似. 下位はシ. 炭粒と若干の焼土粒, 土師器片.
SD1-2: 灰と暗灰混シ. 砂混. 鉱物斑あり.

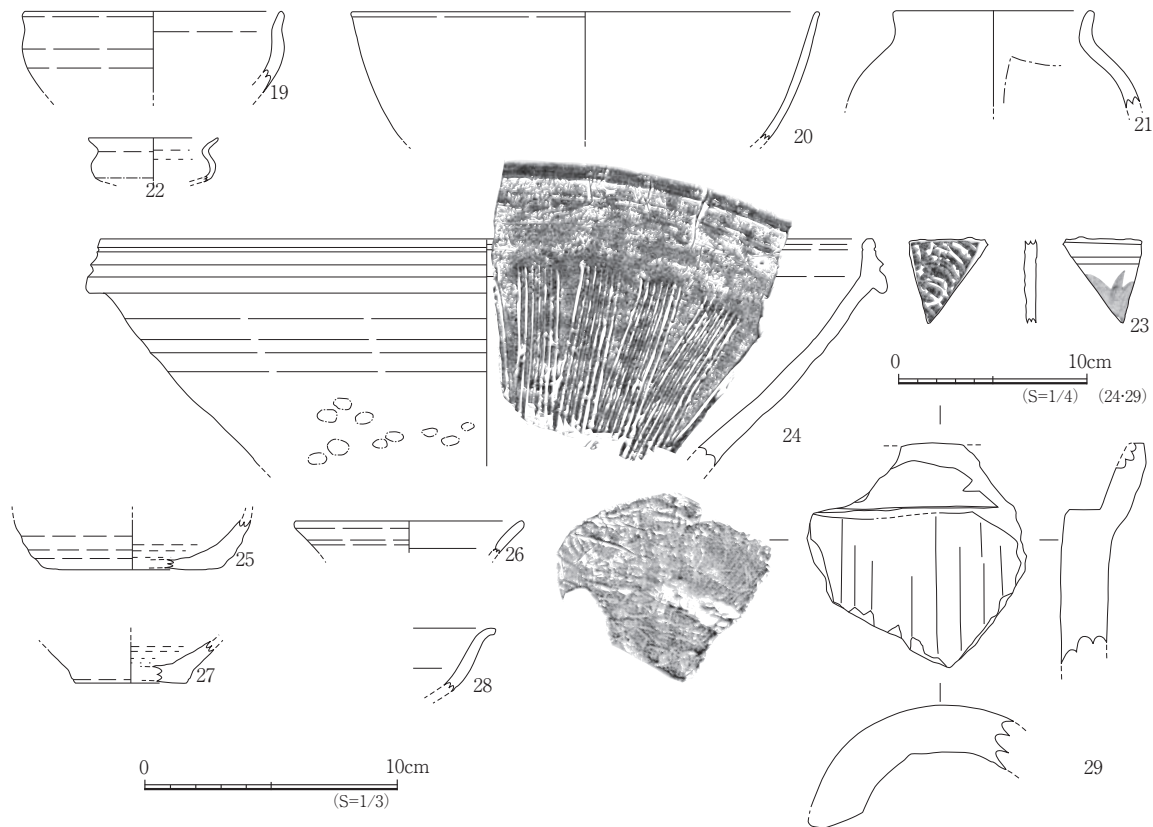


Fig6 TP2 平面・土層・出土遺物実測図

西南隅部の比較的高位の石はいずれも立方体を呈し、4石ほどが配されている。SD1の肩部付近の石はSD1-1層内で数cm浮いているものが多く、若干崩れた可能性がある。3)東壁土層図のⅣ層でも石が並んでいるが、このような状態はこのSD1肩上位付近のみでみられ、人為性を伴う可能性がある。なお、SD1の方位をTP3やTP1で検出した石列の方位と比べれば、直交に近い関係にある。

V層の深さやⅦ層の分布・堆積状態、Ⅶ層以下の石の人為性等については、上記礫面の破壊を避けたために確認できなかった。また、SD1底のさらに下層は、東壁断面図のごとく岩盤かとみられる層もみられた。

Ⅳ層では現代遺物は出土しておらず、Ⅲ層と併せて土質や遺物の状況にTP3、4との共通性がある。Ⅳ層とSD1埋土上面の境界より、20、24が出土している。

3. TP3

検出した下層の配石遺構は、層位的にはV～Ⅶ層に属するとみられる。石列の部分は東に明確な面をつくり、東側が一段下がる。石列の軸線方位はW-5.1°-Nである。遺物26、31、32はV～Ⅶ層に属し、ほぼこれら配石遺構の上面の高さで検出した。また、土層図のごとく上位で検出した石群も上記の石列にほぼ平行して分布することから、時期差はあるものの関連をもっている可能性が高い。これらの軸線方位については、既述したTP1やTP2の遺構との関連も考えられる。

Ⅳ、V、Ⅶ層には1.3cm大までの美しい円礫(玉砂利)を含み、TP1と関連する。また、Ⅳ層の状態や角礫・炭・木・板片等の含有物、Ⅲ層までの現代客土はTP4やTP2と同様で、その後の埋没の経緯を示す。

4. TP4

当区中央部に設定した。小片であるが瓦器が出土し、中世に属するとみられるピット群や性格不明遺構が検出された。北壁際の下層確認トレンチでは、下層に石の多いことが確認された。

SX1

当TPの東壁にかかる形で一部が検出された。P9など、複数の遺構が重複している可能性がある。

遺構内の南詰めにある3つの石は上方に面を持ち、礎石状である。検出状況は、はめ込まれたように看取することもできる。

ピット群

様々な規模のピット群を検出した。遺構埋土はTab.3のごとく大きく2群に分類できる。規模、形状、位置関係と併せて掘立柱建物を想定できる。

5. TP10 (Fig.11)

北西部の斜面裾部に設定した。遺構は確認されず、出土遺物も破片である。62は瓦質土器鍋の口縁部で、磨耗している。Ⅳ層では湧水があった。

遺構名	形状		規模 (cm)		埋土等
	平面	断面	平面	深さ	
SK1	-	-	192×30	24	上層は1類(下層は2類似)・石多数・遺構重複か
P1	不整円	台形	36×29	37	1類。土師質土器片
P2	円形	方形	36×28	41	1類。土師質土器片
P3	不整円	台形	41×31	19	1類的
P4	円形	台形	35×29	18	2類。瓦器細片1
P5	楕円	長U字	32×26	48	2類
P6	-	逆台形	22+×20+	43	2類。土師質土器細片2
P7	-	U字	40+×20+	76	2類。炭、焼土
P8	楕円	V字	32+×26	54	2類
P9	円形か	台形	32+×22+	30	SK1と共通の埋土に灰黄粒多含
P10	楕円	台形	20×14	18	2類的
P11	楕円	方形	26×20	20	2類的
P12	楕円	-	17×14	46	2類的
P14	楕円	-	33×22	27	2類
P16	-	U字	17×8+	11	2類

+は「以上」。全容が不明な場合等。
埋土
1類:暗褐色灰色シル質粘土。炭粒含
2類:褐色に黄灰含シル質粘土。炭粒含

Tab.3 TP4遺構一覧

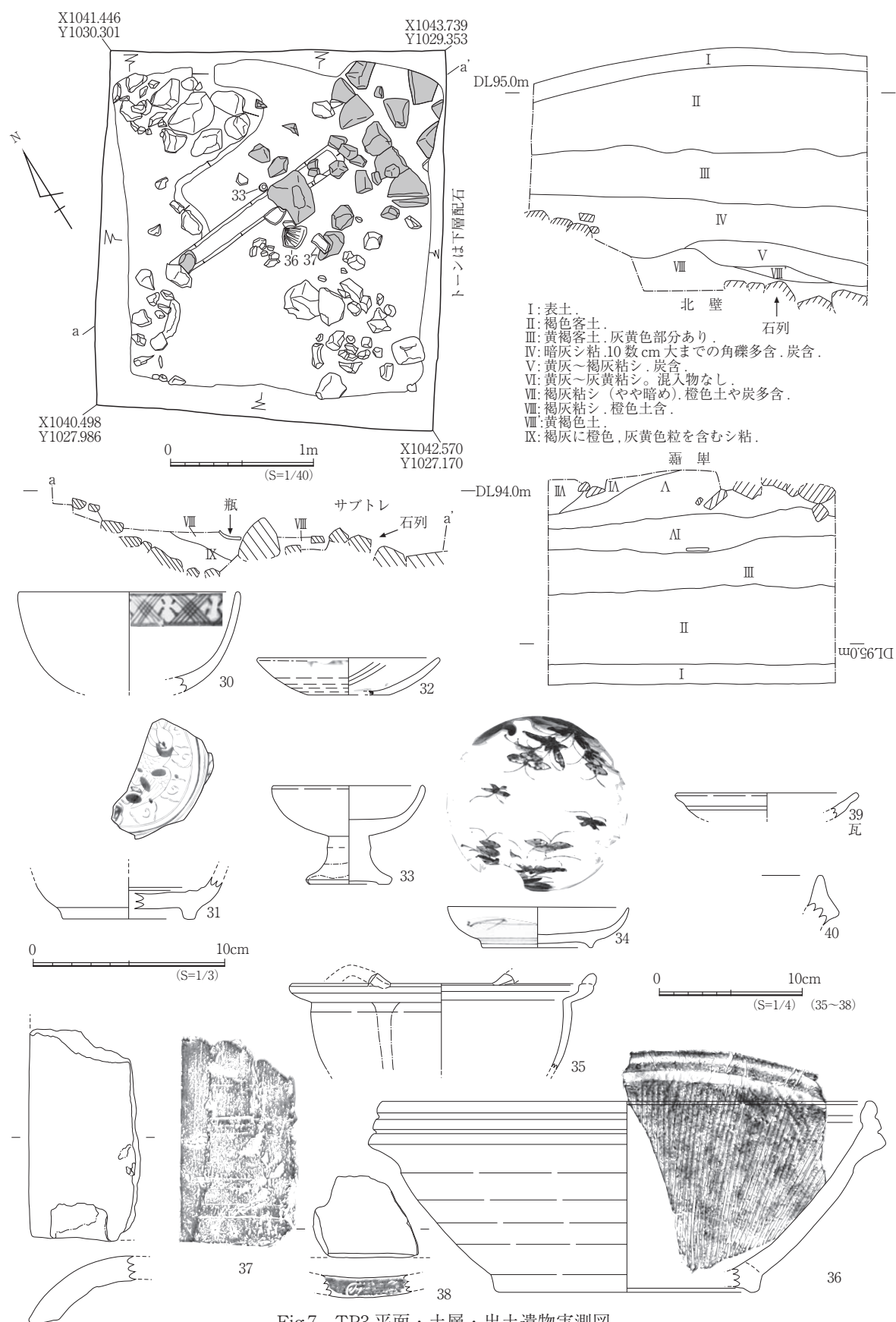


Fig.7 TP3 平面・土層・出土遺物実測図

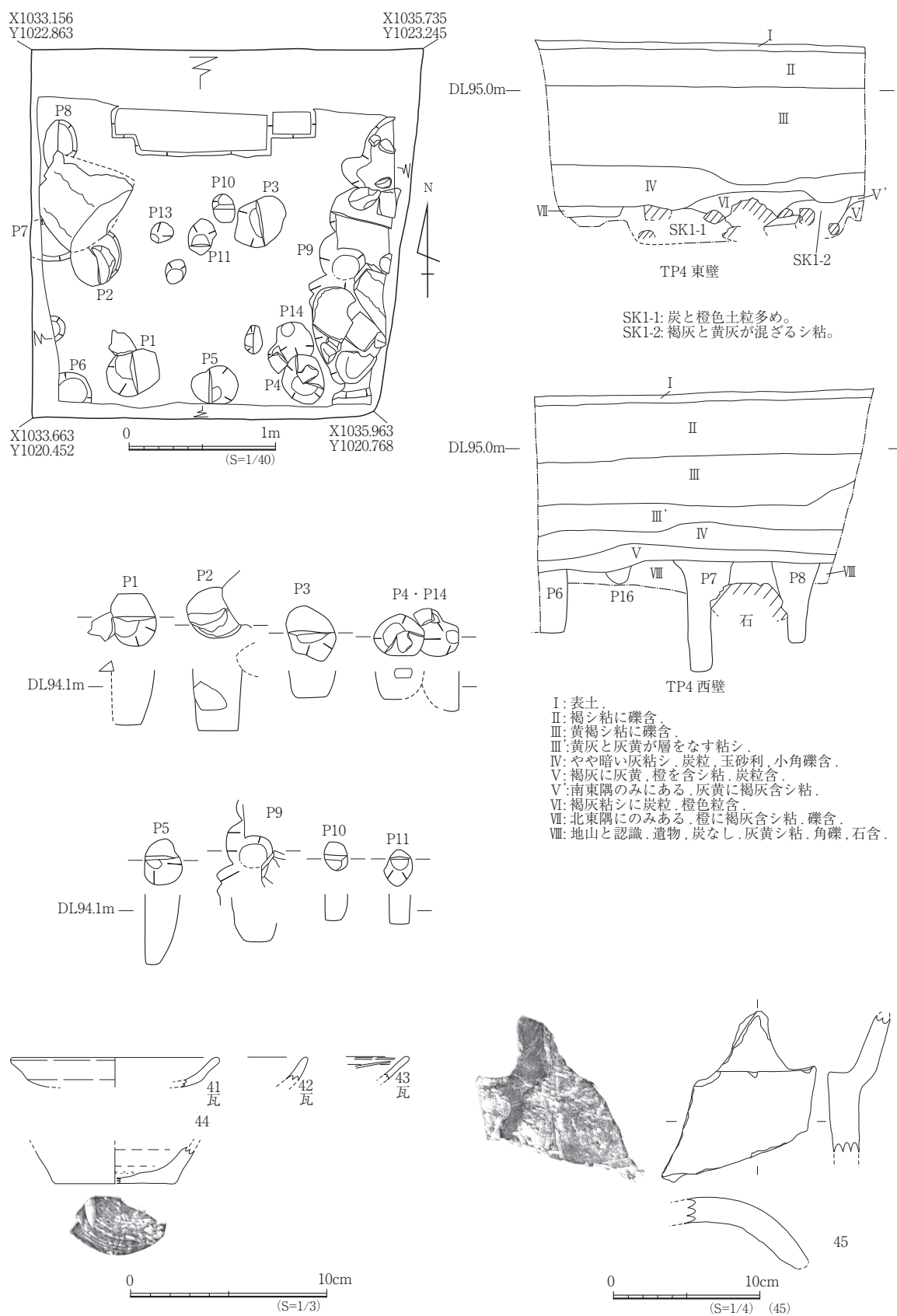


Fig.8 TP4 平面・土層・出土遺物実測図

Ⅲ. 2区

調査前の当区は山側に沿って池があり、中央部はマウンド状に高まって石灰岩が配されていた。園によれば、一帯に配されたこれら石灰岩群は開園後に搬入したものという。

TP5

2区の東端は石垣によって段となっている。その石垣天端から背部にかけて設定したトレンチである。築石の背後は幅30cm強の「裏込め」が存在する。陶器鍋や瓦片がTab.7のごとく出土した。Ⅱ層等は盛土(整地土)の可能性がある。

TP6

3.5×2.5mを測る。Ⅶ層は薄い但当TPに広がっており、さらにTP5でもⅢ層に該当するとみられる。原地形は東南方向へ傾斜しており、その等高線は弧を描く。Ⅴ層にある20～30cm大の石はその傾斜の裾部ともみられるところに並んでおり、何らかの人為性を含む可能性もある。

TP7

2.45m四方を測る。Ⅳ層以下には角礫を含み、特に無遺物で基盤層と捉えたⅧ層には1m強までの岩石を含む。各層について、TP6との明確な対応関係には言及できないが、土色や土質は類似する。出土遺物は陶磁器は少なく、瓦が主体である。49、50は厚手で、内面に布圧痕がある。49の外面には縄状痕があり、須恵質である。

Ⅳ. 3区

2区の東下段に該当する。配置された石灰岩を避けて、中央部にTP8、石垣の調査のためTP9を設定した。

TP8

2.1×4.0mを測る。堆積土層のうちⅤ～Ⅸ層は締まりがなく、2区との共通性を指摘できる。遺構はⅥ層の下、Ⅹ層上面で検出した。

SX1は長さ154cmを測るが、3基程度の矩形の遺構が重複している可能性が高く、土層断面にもそれが反映されているとみられる。その場合、各遺構の長軸は約60～104cm、深さ18～30cmと推測できる。P1は径26cmで深さ14cm、埋土は基盤のⅩ層に褐灰色のシルト質粘土を含み、土師質土器細片を含む。

当TPからはTab.7のごとく貿易陶磁器や常滑焼甕片がⅥ層から出土している。土師質土器片はⅥ～Ⅷ層に多い。弥生土器はⅥ、Ⅷ層より計3片出土しており、県西～西南部の中期末に多いタイプに比定できるものがある。一方、当TPでは近世以降に属する遺物は少なく、Ⅴ層より染付、白磁、棧瓦が各1点出土したのみである。

TP9

築石裏には約30cm幅の裏込めがある。遺物は、Tab.7のごとく近世以降の土器・陶磁器、瓦、布目瓦等がⅡ、Ⅲ層から出土している。Ⅱ層出土遺物の中には七輪かとみられる破片もあった。

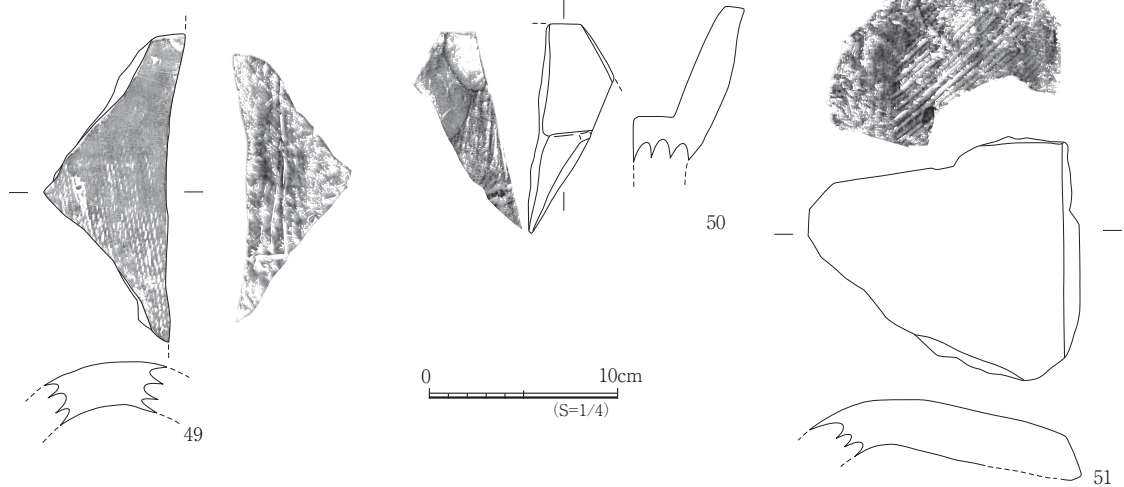
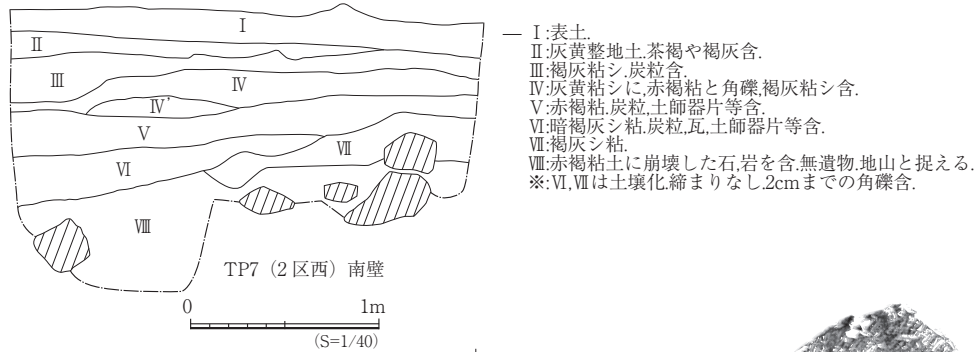
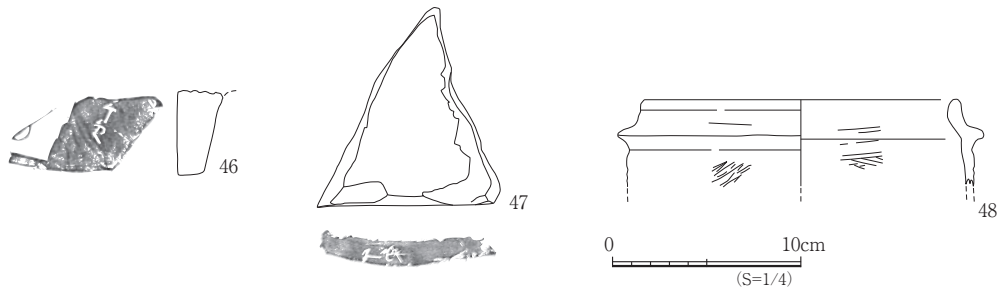
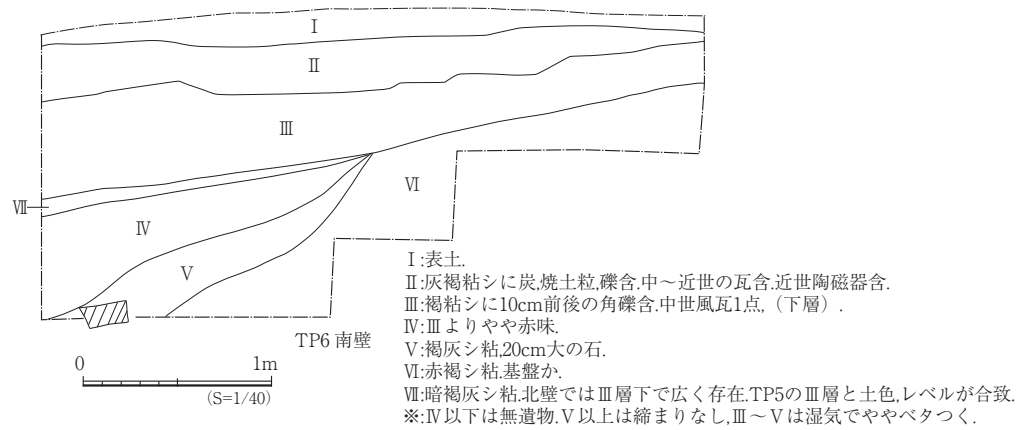
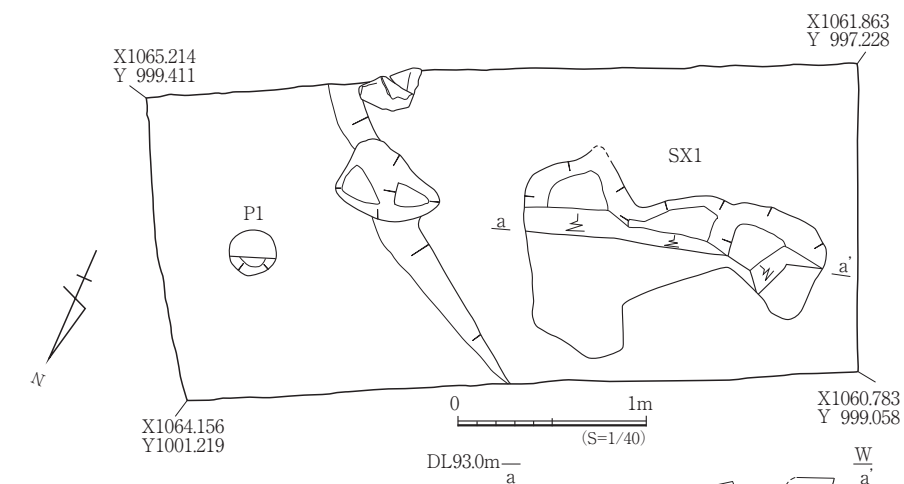
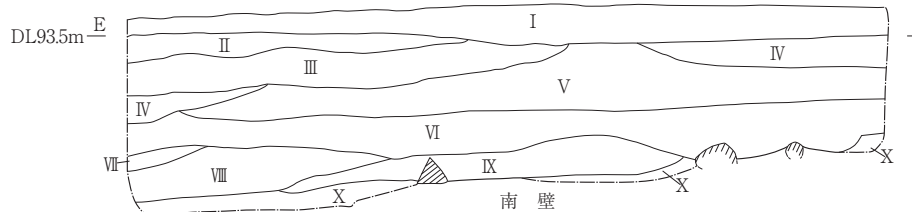
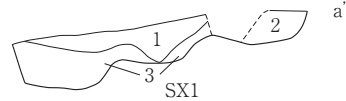


Fig.9 TP6・7 土層・出土遺物実測図



- 1: 褐灰シ粘に焼土, 2cm 大までの炭多含.
 2: 褐灰シ粘に焼土, 炭粒含.
 3: 褐色シ粘に焼土, 炭粒含. ※: いずれも全く締まりなし.



- I: 表土.
 II: 黄橙客土, 一部焼土塊含.
 III: 灰色シ粘.
 IV: 灰色と灰黄混シ粘.
 V: 褐色シ粘, 25cm 大までの石含.
 VI: 暗褐灰シ粘, 炭粒, 中世遺物含. ※: 全層角礫含.
 VII: 赤褐シ粘に角礫多含.
 VIII: 褐灰シ粘.
 IX: 黒褐粘シ, 偏在.
 X: 赤褐シ粘, 28cm 大までの石含, 無遺物, 基盤層か.

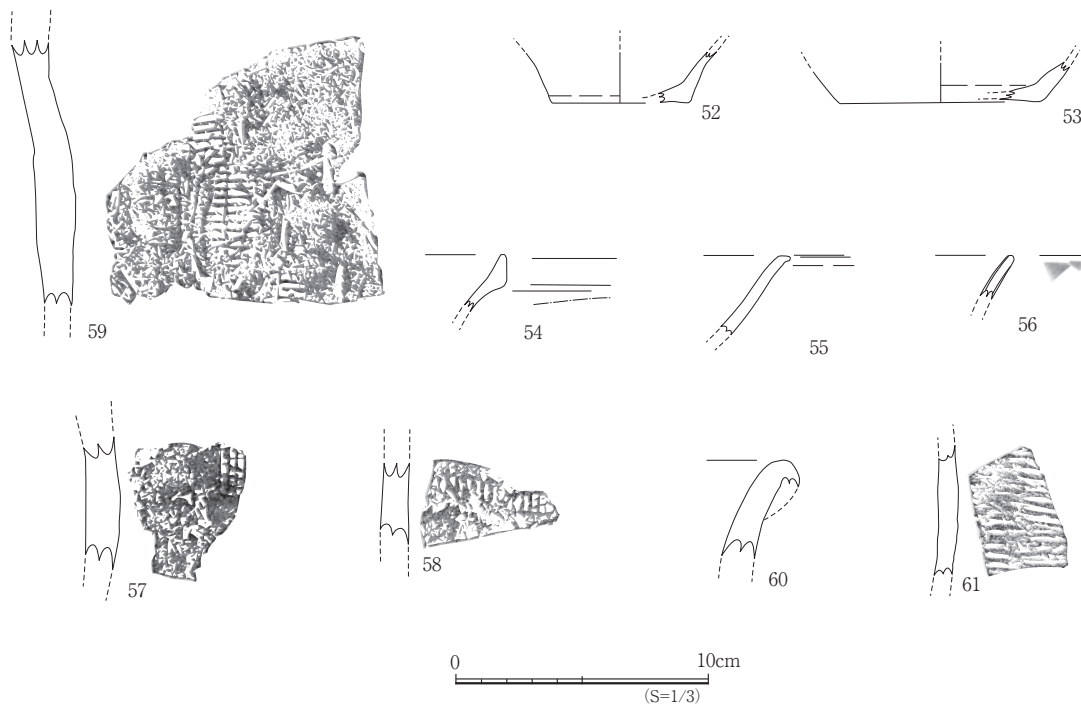


Fig.10 TP8 平面・土層・出土遺物実測図

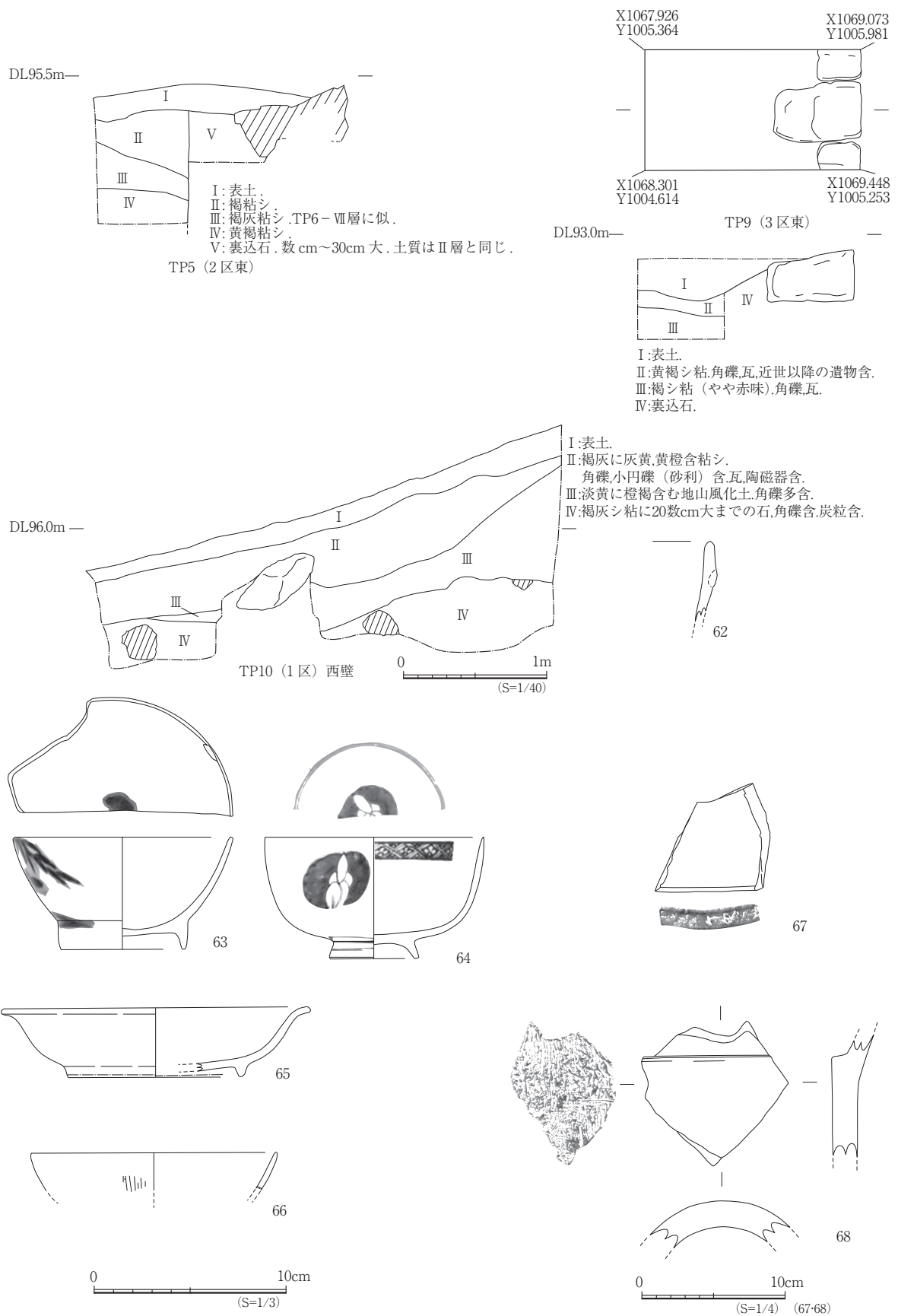


Fig.11 TP5・9・10 土層・平面図, 1・2区出土遺物実測図

第4章 温室付近の試掘及び発掘調査 — 4区, 5～8区 —

温室は「遍路道」から見上げる位置にある。2006年度後半より第1章のごとく試掘調査に着手した後、2007年7月にはボイラー施設設置工事計画に伴う試掘及び発掘調査を実施した。2009年度には温室建替えに伴う試掘及び発掘調査を実施した。

I. 4区

上記のボイラー施設の工事に伴う調査区で温室の南側にあり、着手時は芝生が育成され石碑や植物が所在した。

1. 試掘調査

2006～2007年度にTP11～14を設定し、ボイラー工事計画に際してTP11は本調査7区、TP12は同4区にその後包摂されたので、その主な成果は両区に含めて後述する。以下、それ以外の遺構・遺物やTPについて要述する。

TP11

後の本調査7区の一隅に該当する。中心を占める同区SK30の成果は後記に含めるが、その他の遺構について記す。いずれも地表下45cmで検出した(PL12下)。

SX4はSK30北西脇で検出した。長さ1.08m、幅0.38m、深さ0.33mを測り、括れのある長楕円状を呈する。埋土は灰黄、橙、褐灰色が混ざるシルト質粘土に18cm大までの石灰岩主体礫を含む単層で、土器細片、若干の炭を含むのみであった。SX5を切るが、埋土等から近世に属するとみられる。形状自体は具同中山遺跡群^(註)で検出した近世の「炉跡」に類似している。

SX5は北西隅で一部が検出されたにとどまる。出土した薄い褐釉の甕(150)には肥前系の特徴が看取される。

TP13

南斜面裾に設定した。0.85×5.2mを測る。当TPに斜交して検出した落込み1からは近世後期陶磁器と瓦片が多数出土した。Ⅵ層も落込み1の一部である可能性があり、落込み1上層或いはⅥ層からコバルト使用かとみられる染付が出土した。Ⅴ層は小円礫を多含する点が留意される。

TP14

2.4×3.9mで、東壁沿いのみ60数cmまで掘り下げた結果、地表下15～30cmで無遺物の橙色風化土である第4層に到達した。しかし、北部では炭を含む土層が入りこむ。斜面裾際では岩盤に到達した。出土遺物は少なく、上層で転写手法かとみられる絵付等があった。

註

「具同中山遺跡群Ⅳ」(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 2001年

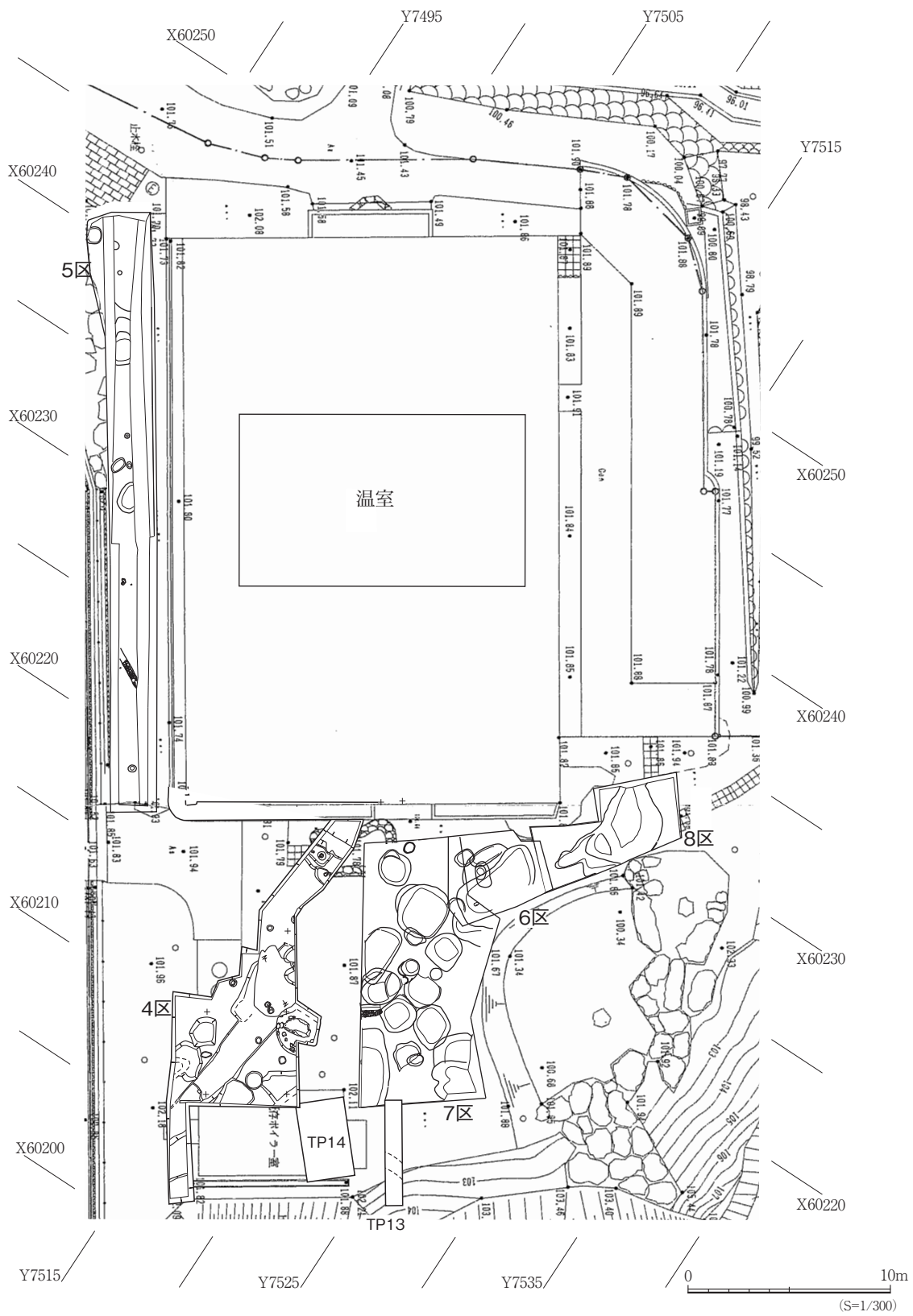


Fig.12 牧野植物園温室付近地形測量図及び調査区位置図

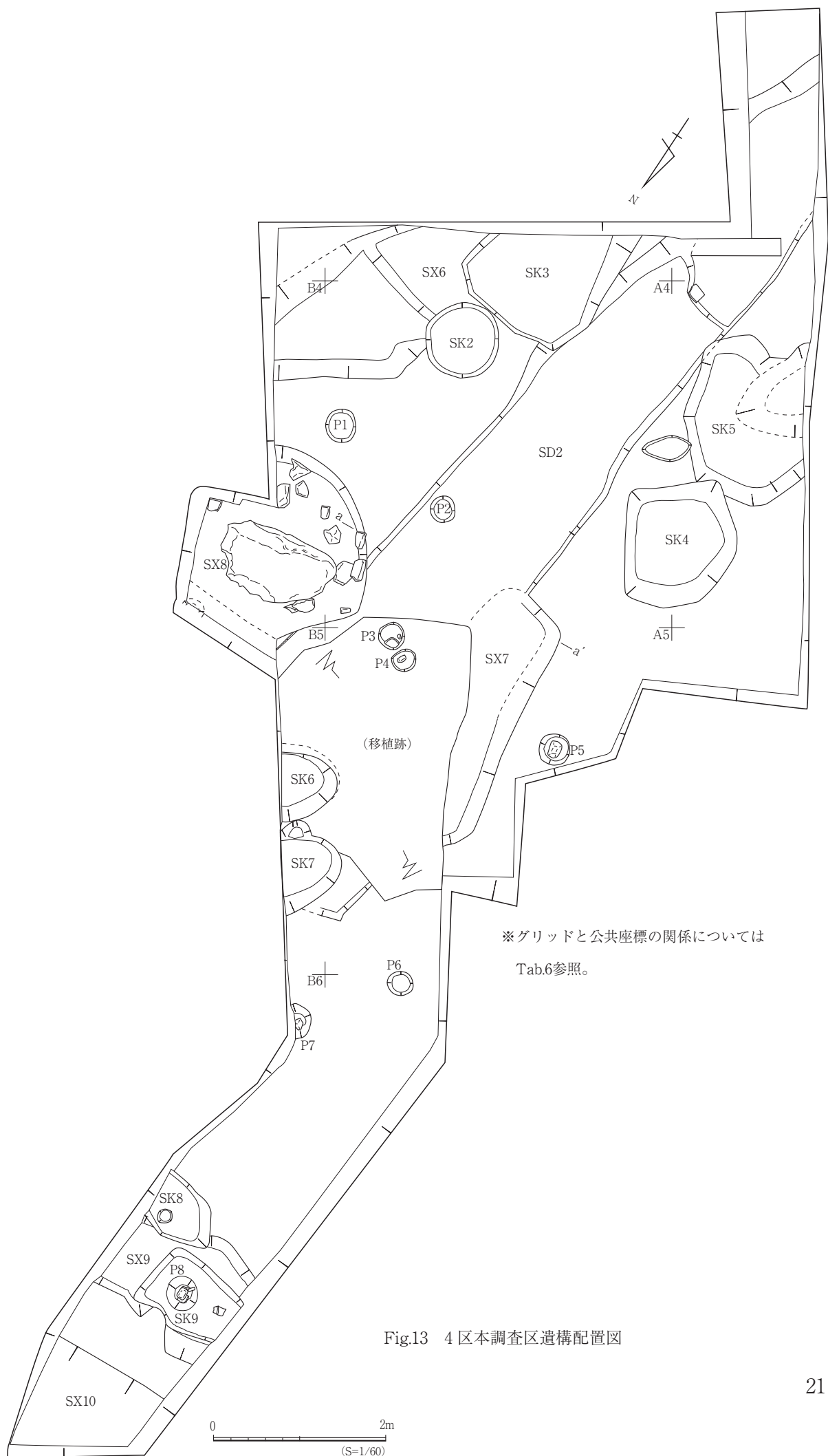


Fig.13 4区本調査区遺構配置図

2. 本調査

基本層準はFig.14のとおりであるが、各層が比較的薄く、水平でないことから出土遺物を完全に分別できず、各層の堆積時期を明確にし得ない。若干の近代陶磁器を含む層もあるが、下記の検出諸遺構の多くは出土遺物等から近世に帰属するとみられる。出土遺物の詳細はTab.5に記した。

調査区中央部の攪乱坑は鬼面角の移植によるもので、SD2やSX7、P3・4、SK6・7の上部を破壊している。

遺構埋土をa～eの5群に分類した。但し、例えばP5や7をd類とする根拠となった遺構内の上層土は基本層準Ⅵ層と同質で、各々の遺構内の下層土とは異なっていた。狭長な調査区のため、各遺構の土層断面についてはFig.14を併用されたい。

SD2

調査区を斜行する幅1.08mの溝跡で、床面は調査区南壁付近が中央部攪乱脇部分に比べて約7cm高く、傾斜率にして約1.46%である。同南壁付近より南側が約13cm低くなっている。断面は、南壁セクション等でみれば深さ約40cmの箱形を呈する。しかし、調査区中央部での検出面からの残存深さは18cm前後であった。SX7や8に切られるとみられるが、埋土は互いに類似している。北部は植物(鬼面角)移植により破壊されていた。

遺構規模に比して出土遺物は少ない。トレンチ状になっている調査区南端の当遺構南肩部分で染付皿69が出土した。

SK2

調査区南部に位置する。内側に厚さ3cmの橙色粘土を貼る。埋土はa類に属する。

遺構名	形状		規模(cm)		埋土等
	平面	断面	平面	深さ	
SK2	円形	皿状	168×186	4	aに若干の地山(黄褐色)粒,内壁粘土貼り,遺物なし
SK3	-	舟底形	328×304+	25	典型的a。内壁粘土貼り,底に墨膜
SK4	不整五角形	逆台形	170×158	44	b。50cm大までの礫多含
SK5	不整多角形	逆台形	192×170+	52	上層は典型的a類だが下層は異なる
SK6	楕円か	逆台形	64+×60	44	c。2層
SK7	楕円か	逆台形	68+×104	52	c。2層目以下黄ブロック含4層
SK8	-	逆台形	84+×64	20	b単層
SX6	-	逆台形	268+×164	36	c。40cm大の石含。遺物なし
SX7	-	皿状	310+×102+	42	d。やや橙色。2層
SX8	円形又は多角形か	-	224+×104+	52	d。やや橙色。岩や石
SX9	溝状	逆台形	144×156+	26	2層。遺構重複の可能性
P1	円形	逆台形	36×34	24	e
P2	円形	-	30×28	44	e。SD2内
P3	円形	逆台形	30×30	30	d
P4	楕円	-	28×24	8	d。底に石
P5	円形	長方形	36×36	19	d。底に石
P6	円形	-	30×24	30	d
P7	円形か	逆台形か	58×20+	38	d。橙褐色風化土礫僅少含,遺物なし
P8	円形	逆台形	40×36	28+	SX9内。底に石複数と土師質土器

+は「以上」。全容が不明な場合等。

埋土

a: 褐灰色シルト質粘土 b: 灰褐色。土壌化

c: 暗褐灰色シルト質粘土。やや土壌化か

d: 褐色に黄・橙粒を含むシルト質粘土。地山風化土。炭粒含

e: 純粋な地山風化土・礫。遺物無又は僅少

Tab.4 4区遺構一覧表

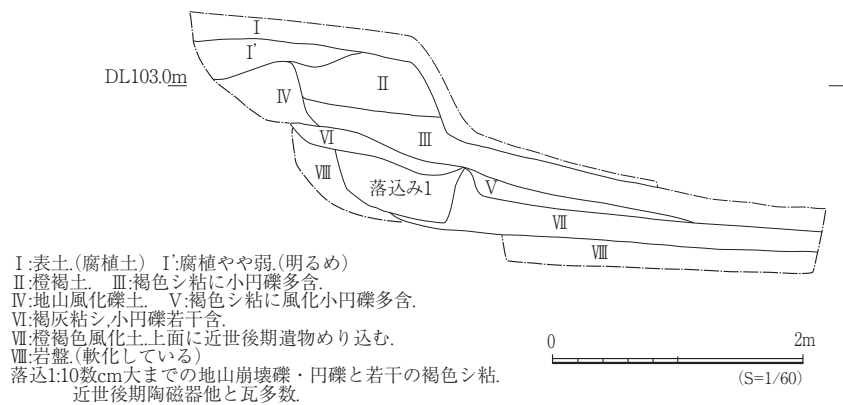


Fig.15 4区 TP13 西壁セクション図

SK3

調査区南壁に断面をあらわす。内側に厚さ 3 cmの橙色粘土を貼る。埋土はa類に属する。

SK4

埋土b類に属するが、50cm大までの礫を多数含む。SK5 をわずかに切るとみられる。一定数の遺物が出土した。71は高台内に刻字がある。

SK5

調査区西壁に接する。内側に厚さ 3 cmの橙色粘土を貼る。埋土上層は典型的a類。西側で別遺構と切り合うとみられるが、判然としなかった。一定数の遺物が出土した。

SK6

調査区東壁沿いで楕円形の一部を検出した。上部は移植の攪乱で破壊されている。埋土c類。2層より鉄片が出土した。

SK7

形状、埋土とも SK6に類似する。

SK8

北部の配管工事部分で検出した。ピットとの関係は不明である。

SX7

調査区中央部で検出したが、移植跡やSD2 との重複により全容を把握し難い。SX7 がSD2 を切るとみえたが(Fig.17)、埋土は互いに似る。北部では埋土 1 層下面に炭化物薄層が存在した。

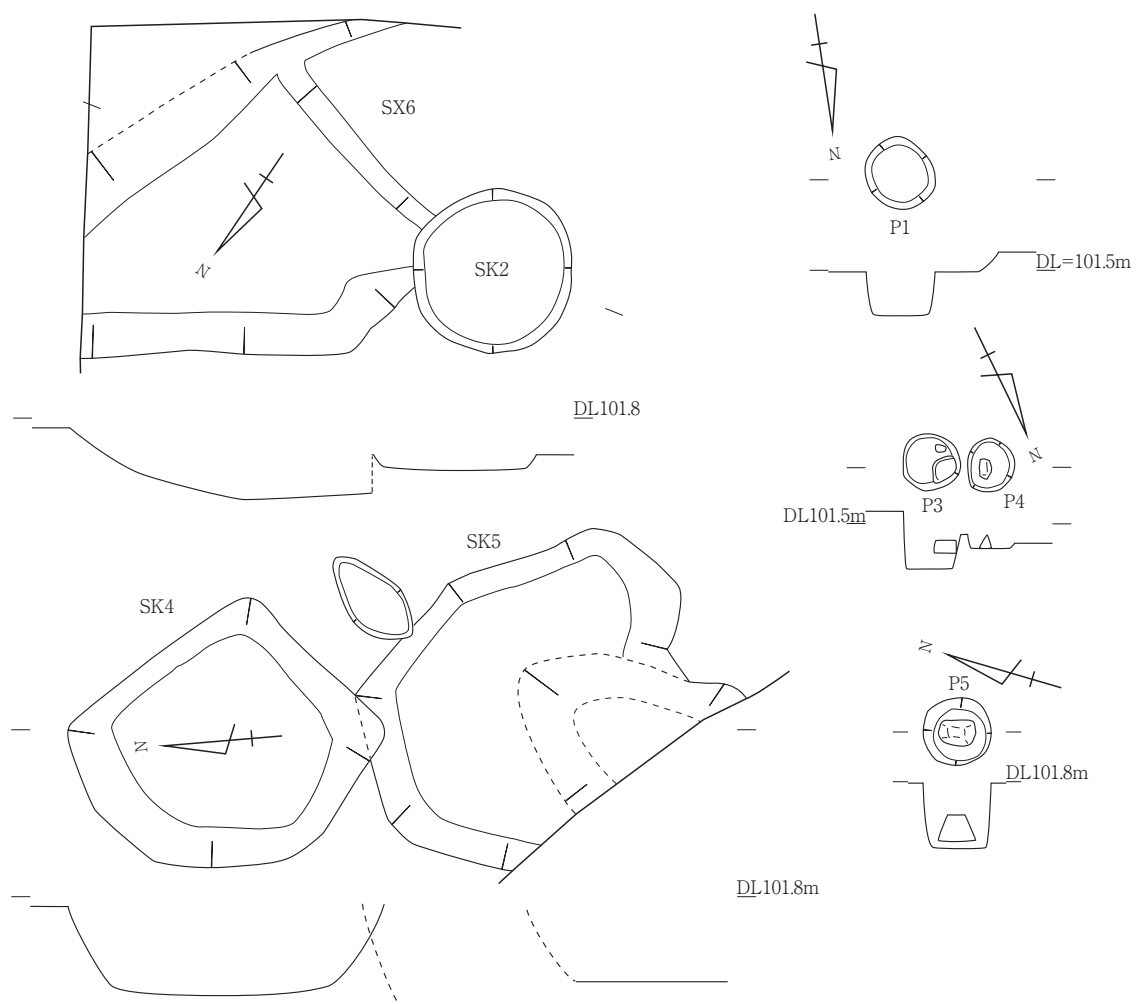


Fig.16 SK2・4・5, SX6, P1・3・4・5 平面・エレベーション図

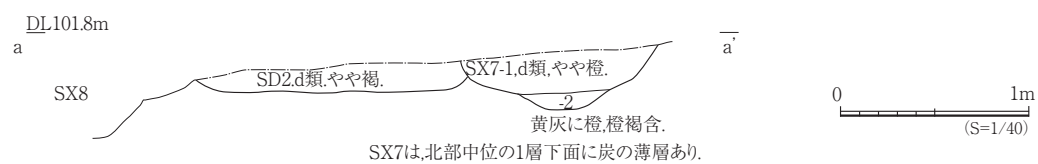


Fig.17 SX8, SD2, SX7 セクション図

SX8

岩石が検出されたことから、工事計画を踏まえた協議によって、当初西半のみを調査し、岩石を含めて保存することとしていた。しかし、発掘調査終了後の施工時に遺構に影響を及ぼす状況があったため、緊急に東半部の調査を実施した。

岩石は $1.36 \times 0.86 \times 0.58$ mを測り、加工痕等はみられない。当遺構内には他にも礫が多く、Fig.18ではそのうち底面に近いものを図示した。上記の岩石も含めて、当遺構内の石は全てチャートか蛇紋岩系とみられ、地山岩盤と同質である。遺物は、土師質土器小皿や銅製の小金具が出土している。

当遺構はSD2を切るとみられる。周辺には図のごとくピットが存在するが、関連は不明である。なお、Fig.18の北東隅でもピットの一部を検出した。

SX9

北部の配管工事部分が当遺構を横切る形で検出した。幅1.44 mを測り、SK8に切られる。形状等からみてさらに遺構が重複している可能性もある。布目丸瓦、焼土塊、雨降紋仏飯具、瀬戸美濃系陶器碗、陶器鍋蓋等が出土している。

SX10

調査区北端で北へ落ち込む。全容は不明だが、土質等からみて近世等に属する可能性が高い。検出した落込み肩部のラインは他の諸遺構と平行或いは直交関係にある。出土遺物は土師質土器の破片と青磁稜花皿のみである。

P8

SX9内で検出したが、埋土は重複する遺構と異なる。下層で石が重なっており、比較的残存率のよい土師質土器小皿も出土した。

落込み5, 落込み6

Fig.14参照。SX8の上位や南側にある。埋土はいずれもd類でやや橙色がかり、落込み5はSX7とも類似する。落込み6は橙色がやや強く大礫を含み、地山に近い。落込み5はSX8とは違う平面プランを持っていた。落込み6は壁面で確認したのみである。いずれも帰属の確実な遺物が存在しない。

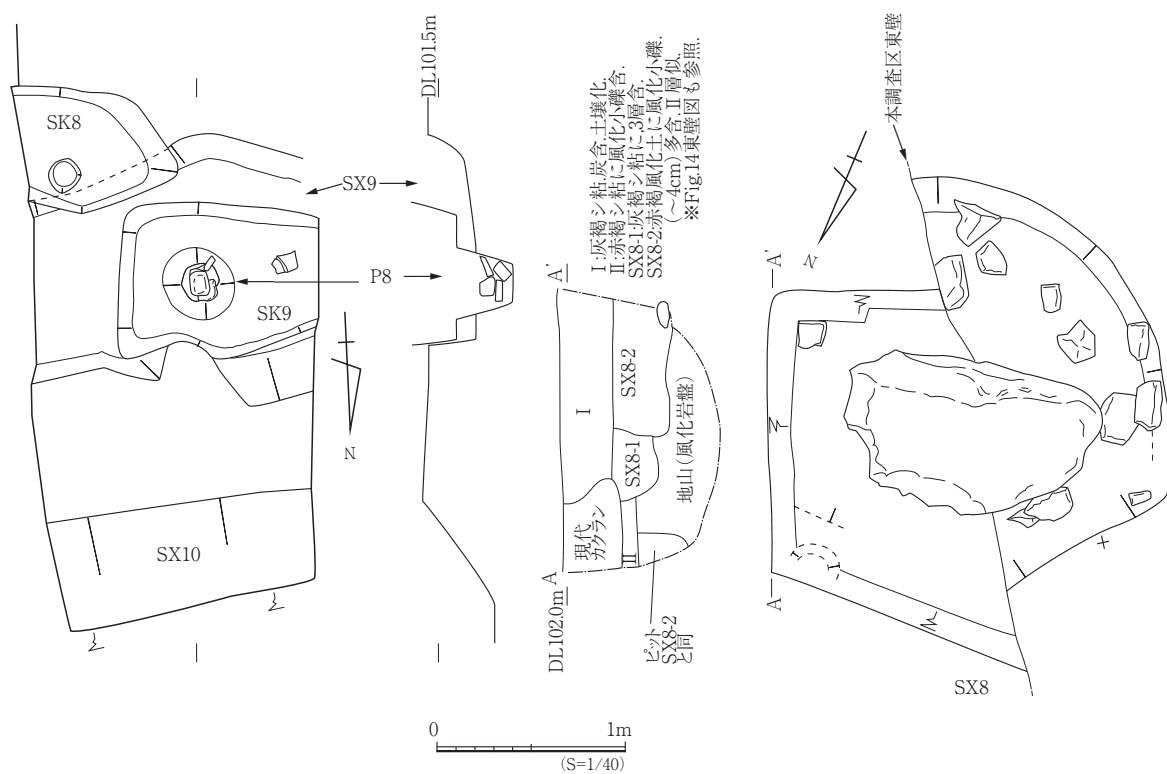


Fig.18 SK8・9, SX9, P8, SX8 平面・土層・エレベーション図

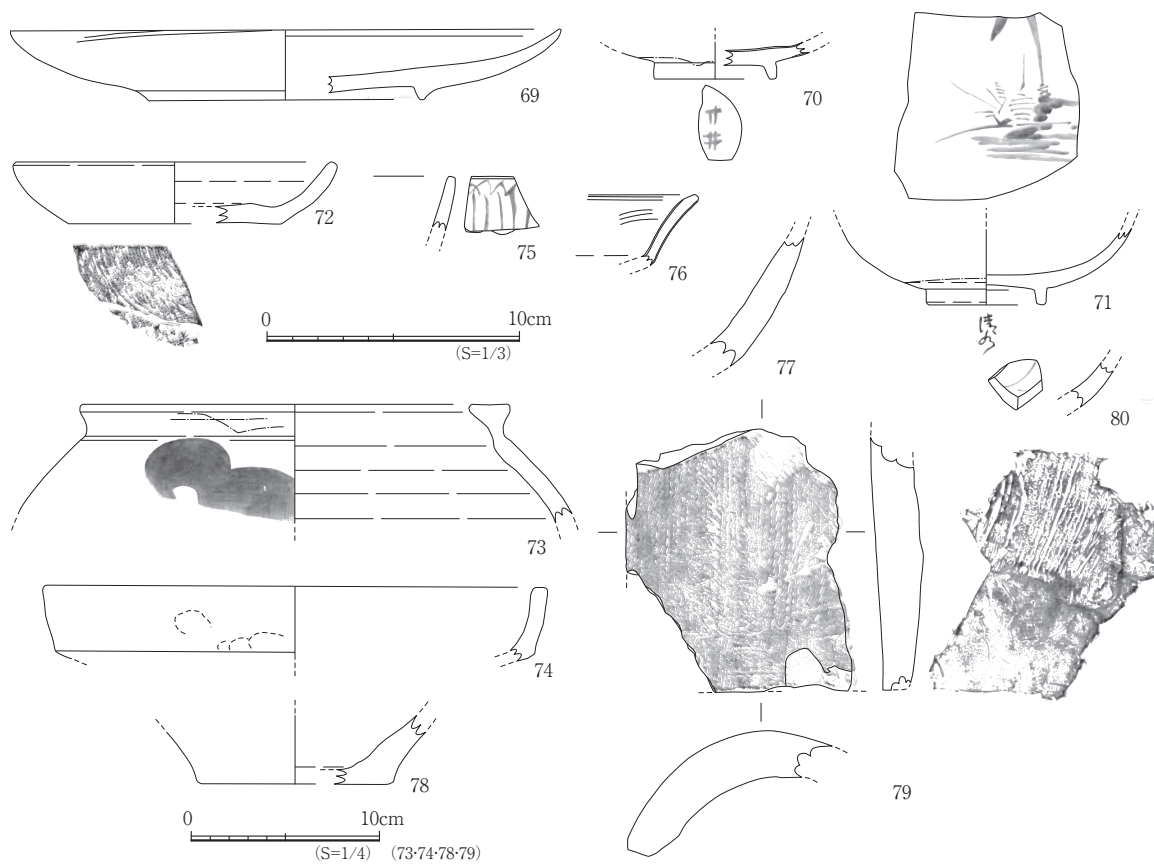


Fig.19 4区出土遺物実測図

種類	染付				その他磁器		陶器・炱器							土師質土器等				瓦			その他	中世(以前含)				
	碗	皿	他	不	碗	皿	土瓶	鍋	瓶	壺	甕	挿鉢	灯明皿	火鉢・焔炉	その他	小皿等	その他	布	棧	不・他		貿易陶磁	国内搬入	土師質杯皿	その他	
遺構等	SK3	1				白碗1	1				3				水甕1		炮烙1			平3						
	SK4	1	1	瓶1 蓋1 仏飯1		4			1					1	鉢1		火鉢1	丸1		45						
	SK5					3	白土刷毛1	1	1				1	1						平15						
	SK6			仏飯1									1					不1		6						
	SK7			仏飯1		1	1						1					不1		4						
	SK8					1	1											不2				1				
	SK9	3					1						1				1	不2		1						
	SX7						2						1					不3		2						
	SX8							1		1				4			1	不4	1	4						
	SX9			仏飯1		1	1	1	2								「白土器」1	不40	丸1	3						
SX10									1								不5		2		1					
P5																11	不2									
P8																1										
包含層	2		仏飯3		5		1				白土刷毛1 陶1	3							3	1						
遺構	5	1	瓶3 蓋1 仏飯4	0	10 白碗2	11 白土刷毛1	3	1	3	1	1	3	0	9	2	水甕1 鉢1	14 「白土器」1	1 火鉢1 不60	1 丸3	0	87 平53		2	0	0	瓦鍋1
	TP13 落込み1	1	1	瓶2		白碗1			1	1				1					丸1	平35					瓦鍋1	
TP14																										

※略記等要領はTab.7に準ず

Tab.5 4区各遺構・種類別出土遺物計数表

グリッド	X	Y
A4	61207.5	5715.9
A5	61210.9	5713.7
B4	61209.6	5719.2
B5	60213.0	5717.2
B6	60216.4	5714.8

Tab.6 4区グリッドー公共座標対応表

区域	種類 位置	染付			その他 磁器	陶器・炬器										土師質土器等			瓦		その他	中世(以前含)			
		碗	皿	他		不	碗	皿	土瓶	鍋	瓶	壺	甕	描鉢	灯	火入・ 焼炉	その他	小皿等	その他	布目		棧瓦	不・他	貿易 陶磁	国内搬入
1区	TP1	3	5	水滴1 瓶1	1	白碗1 青碗1	5		1	5	2	3	2			鉢1 香炉1	31		2	1	32 (焼1)	5	9	33	古代須臾2・弥生1 瓦鍋3・不10 瓦鍋1
	TP2	2		陶胎1		白碗2 仏飯1	5 天1	2									13		1		6 丸1	3	瓦1 常1	7	瓦鍋1
	TP2 SD1										1								1						
	TP3	2	1	小碗1 仏飯1		2 仏飯2 色絵1	3	1	1	6		2	3	4		不2	11	瓦火鉢1 火鉢1 炮烙1 不6	1	丸1	98		瓦皿1・備鉢1 播釜2・瓦碗1 常1	1	
	TP4		1	蓋1		白瓶1 仏飯1	天1	1	1								9	不1	2	1	12		硯1 瓦碗3	6	
2区	TP4 ピット 土坑																79						瓦2 瓦碗2	11	
	TP10	2	2			仏飯2										鉢1			1	23 (焼1)					瓦鍋1
	西擁壁下 立会等	2	1	蓋1 瓶1 仏飯1		青染蓋 1 白碗1 白瓶1	蓋1						3						1	不5		1			備鉢1
	TP5					白瓶1			1										1	5					
	TP6	1	1		1				1										2	23 丸2				播釜1	
3区	TP7	1																	3	1	14				
	TP8			瓶1		白・不 1											63	不1	1	4		5	常1 備鉢1	10	甕1 瓦鍋1
	TP9	1			1	白碗1	1												2 丸1	11					
	包含層	2		仏飯3		5	1												3	1					
	遺構計	6	2	瓶3 蓋1 仏飯4	0	白碗2 白土刷毛1	11	3	1	4	2	1	3	0	10	2	水甕1 鉢1	14 「白土器」1	1 火鉢1 不60	1 丸3	87 平53	2	0	0	

※「不」は不明、「白」は白磁、「青」は青磁、「青染」は青磁染付、「天」は天目、「瓦」は瓦、「土器」は瓦質、「国内搬入」の「瓦」は瓦器。
「常」は常滑焼大甕、「備」は備前焼、「播」は東播磨系、「須」は須恵器、「焼」は2次被熱、「弥」は弥生土器片。
例えば1欄に「5 天1」とある場合、「5」に「天1」は含まない。

Tab.7 1～4区各TP・種類別出土遺物計数表

II. 5～8区

牧野植物園南園の旧温室は、1969年にドーム型の展示室として建設されて以来今日まで約40年が経過し、老朽化から建て替えが計画された。また、それに伴いその南側にあった池を取り囲むように新温室建設が計画された。

この南園温室の位置は、旧竹林寺の寺域内にあたり、現在の竹林寺仁王門のすぐ東にあたる。また、寺の門前より東に開ける谷は、麓のむらから竹林寺へと向かう道になっており（通称「お馬道」と呼ばれる）、南坊や中の坊といった僧坊が点在するその谷の最奥部といった位置関係にある。江戸時代に描かれた古絵図「五臺山惣山之図抄寫 文殊閣并竹林寺之図」（『竹林寺の仏像』 前田和男 五台山竹林寺刊 2003年）によると、温室に相当する箇所は、「大威徳」・「妙高寺」と記された柵ないしは塀に囲われた小堂2棟が描かれており、竹林寺の別院であったことがうかがわれることから、調査ではそれに係わる遺構の検出が想定された。

本調査では、温室北側と東側のウッドデッキ部分は、調査段階では見学者が通路として利用すること、温室の北東部は谷を埋立て造成されたこと、温室内は植物の育成に適した土壌に入れ替えるための掘削が1.5m程度行われたことが聞き取りにより明らかとなっていたことから、建設工事により遺構が破壊される部分を建物解体前に、1A～1C区、2A・B区、2C区、3区、4区に分けて発掘調査を行なうこととし（Fig.12）、調査が行えない箇所については、温室解体後に立会調査で補足することとした。

本報告では、記述の都合上調査区名称を5～8区に再整理して記述することとする。

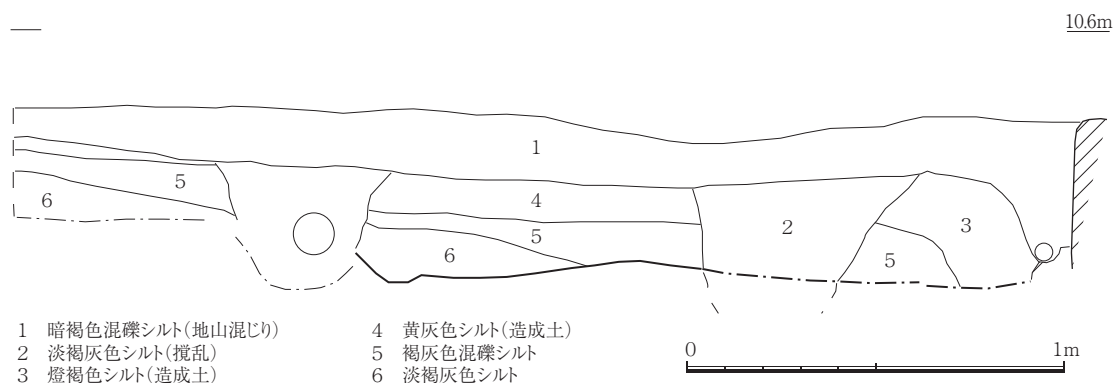
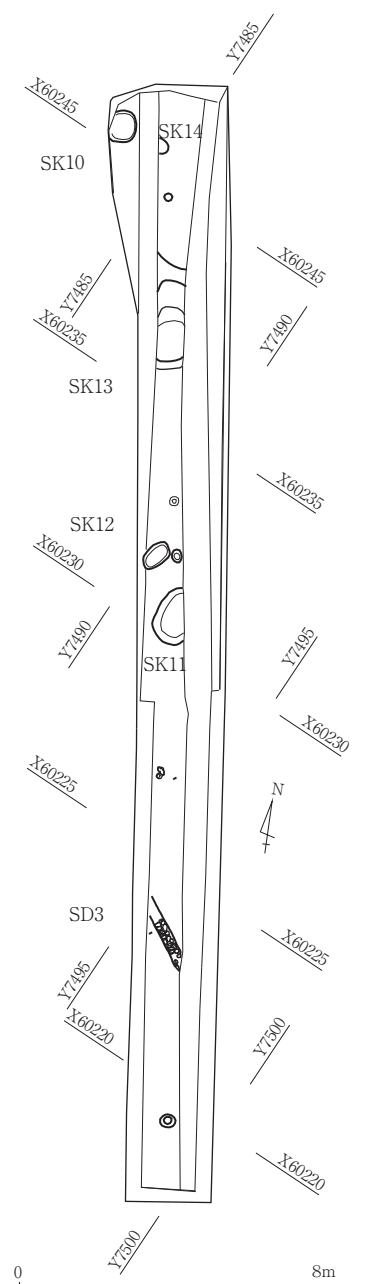


Fig.20 5区全体図・北壁土層断面図

1. 5区

旧温室とその西側の県道五台山三ツ石線と植物園敷地境界を画すフェンスとの間にある南北方向の通路部分に設定した、幅 2.5 ～ 3.0 m、長さ 30 m の調査区である。

調査区内は、温室基礎による攪乱のほか、温室に並行して水道・電気等複数の埋設管が走っていたがそれらを撤去できない状況で、かつ排土も持ち出しができないことから、5区をさらに3区画に分けての発掘となった。

土層の堆積状況をみると (Fig.20)、表土、現在の整地層・造成土 (1層) の下に、旧温室建設時の整地土下に山土を堅く叩き締めた4層がある。植物園開園時の整地層であろうか、各調査区で看取できた。その下層では、県道から温室側へ緩やかな傾斜をなす褐灰色 (5層) と淡褐灰色 (6層) のシルト層がみられた。その層中には、近世の陶磁器、瓦を多く含むが、わずかに 16 世紀前半の青磁片も出土している。基盤層は、調査区北西部が最も高く、それより東に緩やかな傾斜をなすが、調査区全体では平坦な面をなす。これは温室南側とほぼ同一のレベルの平坦面を形成する。土壌は、粘性の強い黄褐色の土層で自然の露岩を含む。

検出した遺構は、土坑 5 基、溝 1 条で、いずれも基盤層上での検出であった。遺構の配置状況や遺物の出土量は、後述する 7 区に比べ希薄である。また、幅が狭い調査区ゆえに完掘できた遺構はない。

(1) SK10

5 区の北西隅で検出した、平面形が隅丸方形で、断面が U 字状を呈する土坑である。規模は、一辺が 90cm、深さは 45cm である。埋土は、淡褐灰色シルトの単純一層であるが、土坑底には長軸 20 ～ 30cm の角礫が集積していた。

瓦片 2、陶磁器片、土師質土器細片が出土しているものの、時期など詳細は不明である。この遺構の時期は、埋土から近世と考えられる。

(2) SK11

5 区のほぼ中央で検出した、平面形が隅丸方形を呈する土坑である。残存部での長さは 120cm、

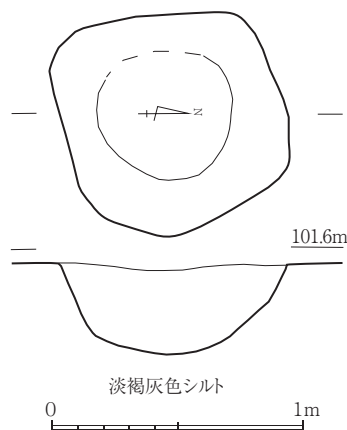


Fig.21 SK10 平・断面図

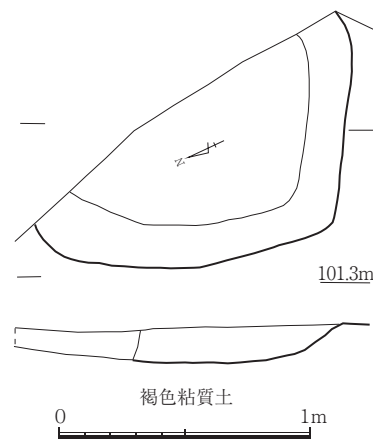


Fig.22 SK11 平・断面図

幅が100cm、深さ14cmを測る。

陶磁器片6、土師質土器細片2が出土しているものの詳細は不明である。遺構の時期は、近世と考えられる。

(3) SK12

5区のほぼ中央で検出した、平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。規模は、長径90cm、短径が43cm、深さ6cmを測る。

陶磁器片3点、土師質土器細片数点が出土しているものの詳細は不明である。遺構の時期は、近世と考えられる。

(4) SK13

5区の北で検出した土坑であるが、東西は埋設管の下となり調査が不可能であった。調査範囲では平面形が円形を呈し、断面形が逆台形状を呈する。規模は、直径が150cm、深さ140cmを測る。壁面は

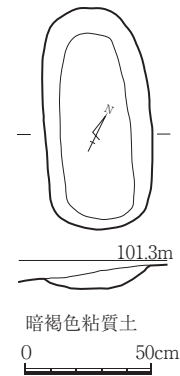


Fig.23 SK12 平・断面図

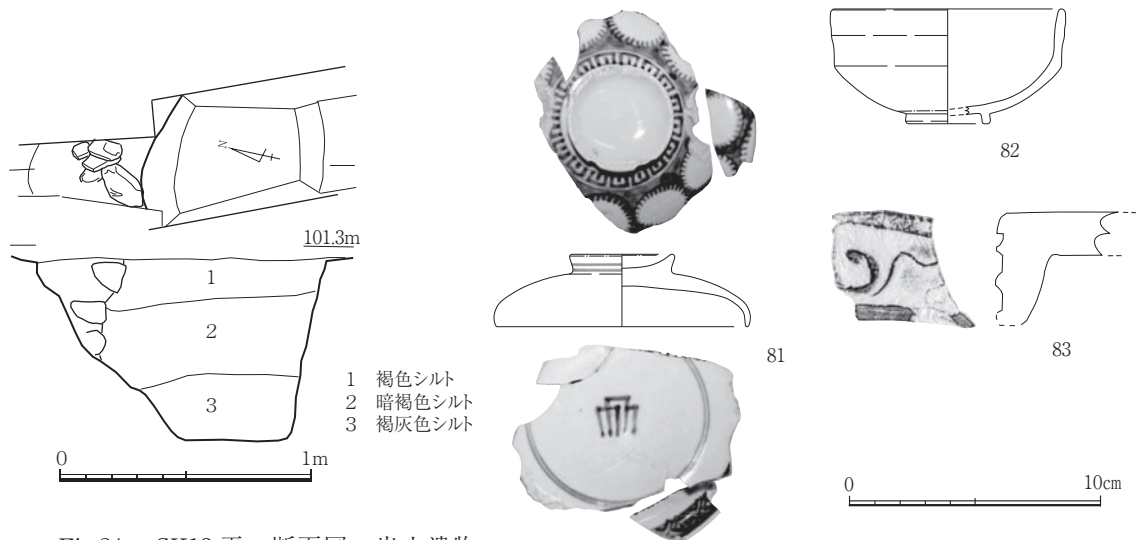


Fig.24 SK13 平・断面図，出土遺物

南がほぼ垂直に近いが、北側は緩やかな傾斜で、底面より40cm上でわずかにテラス状をなす。その直上より石積みが3段分確認できたものの、石積は土坑北壁のごく部分的にみられたのみで、用途・機能は不明である。

土坑内や掘方内より瓦や陶磁器片、土師質土器細片が出土しており、このうち図示したものに肥前産磁器碗の蓋81、京都産の陶器せんじ碗82、軒平瓦83がある。これらは18世紀後半に属し、遺構の時期を示すと考えられる。

(5) SK14

5区の北でSK10の東、SK13の北に接して検出した平面形が不定形の浅いたわみ状の土坑である。調査区北壁の5・6層が埋土と考えられ、東側に向け緩やかな傾斜でさがるが温室による攪乱で全体像はつかめなかった。

出土した遺物には、17 世紀後半代の肥前産磁器中碗 84 がある。その他に図示しえなかったが陶磁器片 7、土師質土器細片 13、備前焼 2、平瓦片 8 が出土している。遺構の時期は 17 世紀後半以降と考えられる。

(6) SD3

5 区の南で検出した、北西から南東方向 (N 33° W) にのびる溝である。長さ 1.7 m、幅が 30cm、深さ 12cm を測る。断面形が箱型を呈し、その中に長径 10 ～ 20cm ほどの扁平な河原石や亜角礫を 2

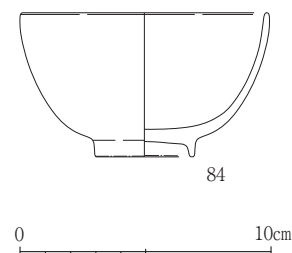


Fig.25 SK14 出土遺物

列に敷きつめていた。出土遺物には、肥前産蓋物 85 がある。赤と緑の上絵付けによる「福」字を描く。

また、この溝から 1 m 北で、平行して走る同様の石敷きがある。下部にコンクリート基礎が確認されたため、遺構として図示していないが、本来 SD3 と同じ性格の遺構ないしは一連の遺構であったものが植物園に係る工事の際に一度動かされた後、再度敷設されたとも考えられる。築地堀の雨落ち溝や道路の側溝かとみられるが、後述する 6・7 区では検出できていない。

なお、5 区ではこの溝より南はピット 1 基のみの検出であった。

2. 6 区

新温室建設箇所となる旧温室南中央の出入り口より東側で、かつ池との間に設定した長さ 26 m、幅 20 m の調査区である。

(1) SK15

6 区南隅で検出した、平面形が円形で、断面形が逆台形を呈する土坑である。南は調査区外となり北側約半分を調査したが、後述する SK19 の埋土を掘りこんでおり、時期的に後出する。土坑の規模は、長径が 87cm、深さは 30cm である。

出土遺物のうち、86 は 18 世紀後半の肥前産磁器碗の蓋である。備前焼灯明受皿 87 には灯明の油痕が残る。88 は灰釉土瓶で、尾戸ないしは京都産とみられる。出土遺物からみた遺構の時期は、18 世紀後半以降と考えられる。

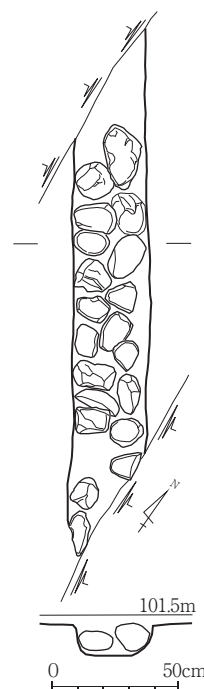
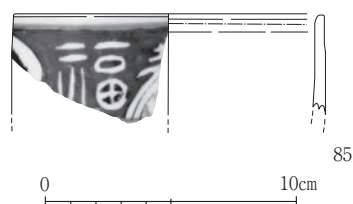


Fig.26 SD3 平・断面図, 出土遺物

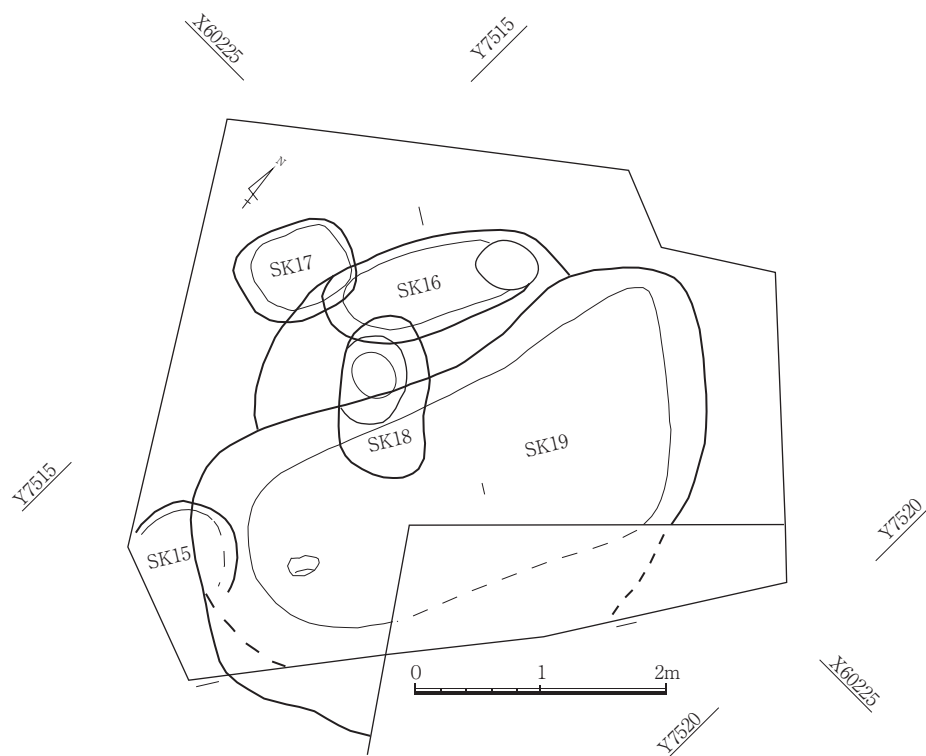


Fig.27 6区全体図

(2) SK16

6区でSK19の北に並行して検出した、平面形が隅丸長方形、断面形が逆台形状を呈する土坑である。規模は、長径170cm、短径が75cm、深さ10cmを測る。

出土遺物には、土師質土器皿片2点、瓦片1点、陶磁器片2点がみられたものの図示しうるものは無い。遺構の時期は、土層断面 (Fig.29) においてSK19を切っていることから、18世紀後半以降と考えられる。

(3) SK17

6区の北西部で検出した、平面形は隅丸方形、断面形が「浅

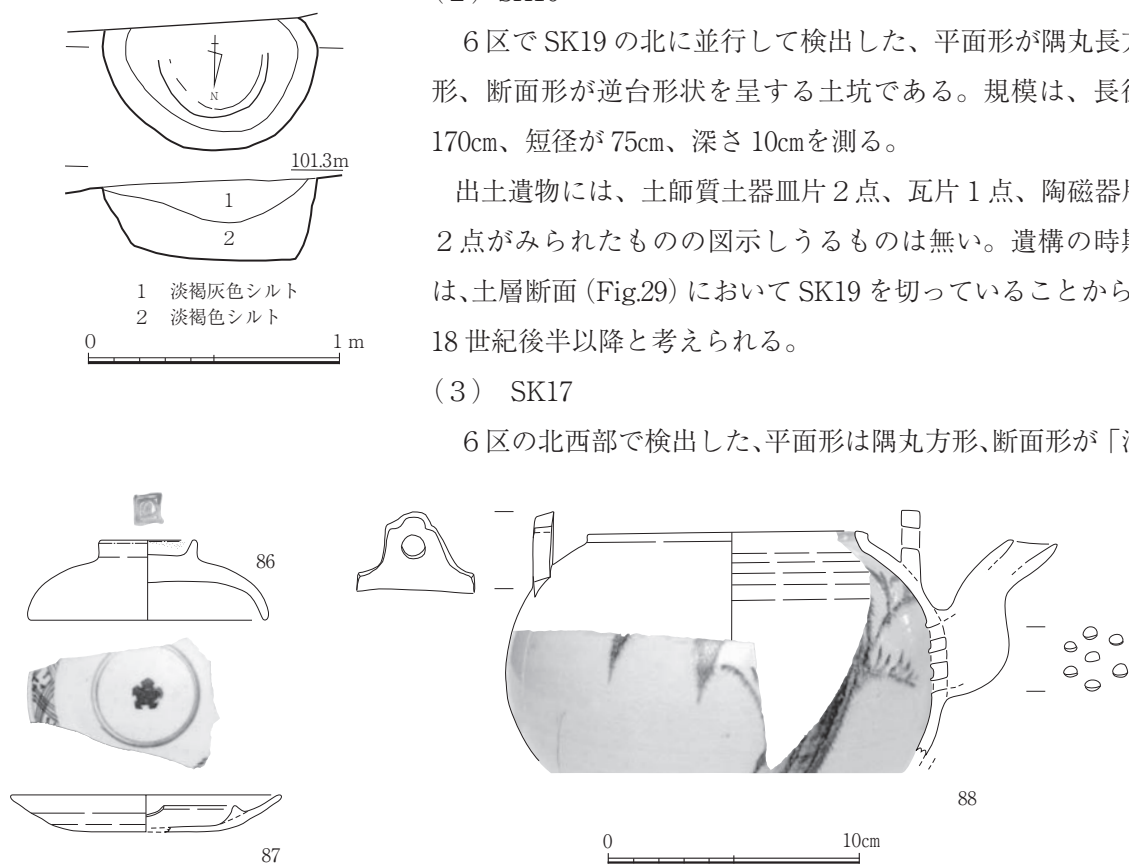


Fig.28 SK15 平・断面図, 出土遺物

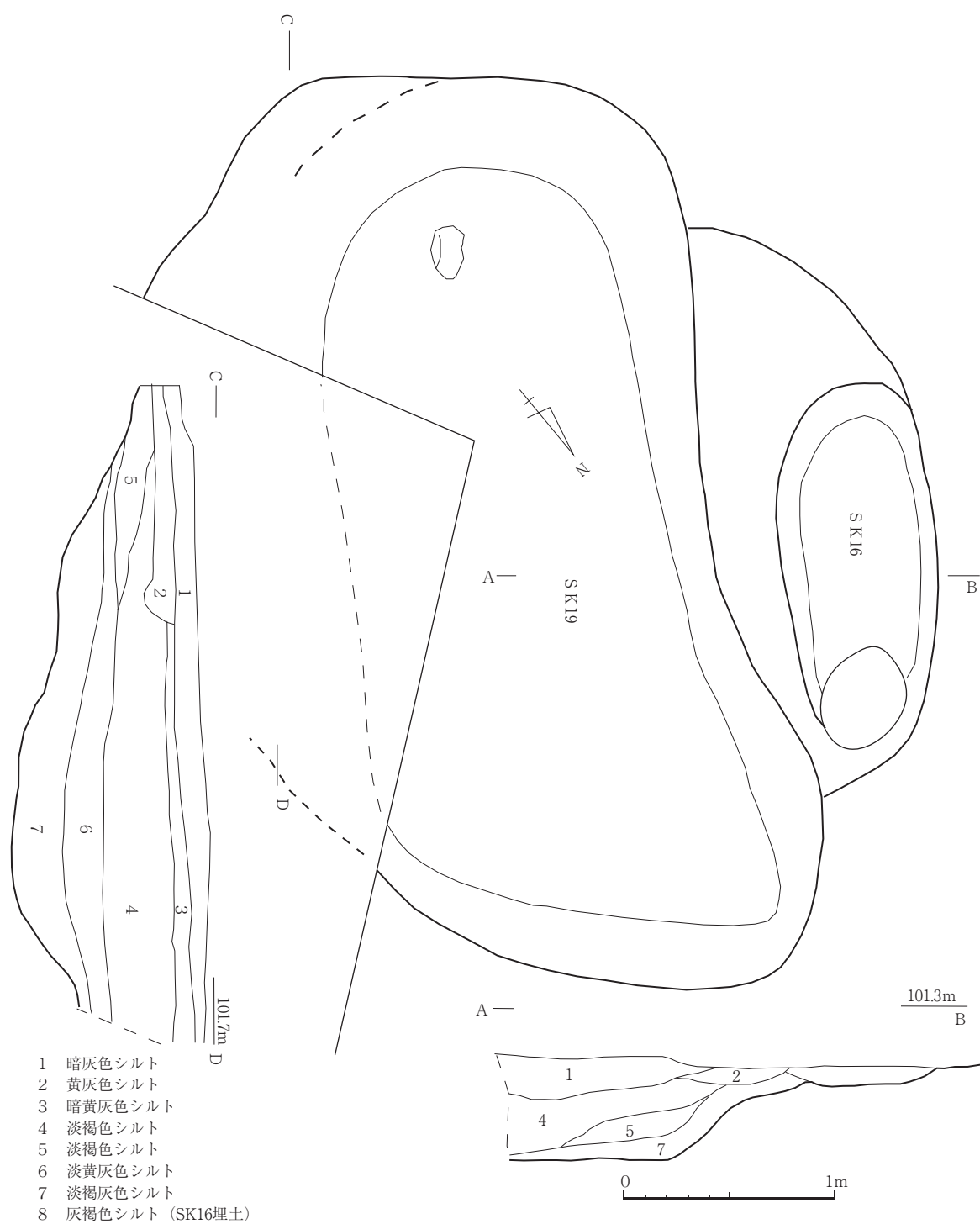


Fig.29 SK16・19 平・断面図

い皿状」を呈する土坑である。規模は、長径 80cm、短径が 75cm、深さ 15cmを測る。

出土遺物はみられなかった。

(4) SK18

6区中央で検出した、平面形がやや歪な長円形を呈する土坑で、2段に掘り込まれている。規模は、長径 130cm、短径が 70cm、深さ 27cmを測る。

出土遺物はみられなかったが、10～30cm角大の礫が散在した。SK19埋土を切っていることから、時期的に後出すると考えられる。

(5) SK19

6区の大半を占め今回調査における最大規模の土坑で、平面形が隅丸長方形をなし、土坑底は平坦で断面形は逆台形を呈する。この土坑の南に位置した池により土坑の南東部が破壊されており全容はつかみがたいものの、残存部での規模は、長径420cm、短径が260cm、深さは50cmを測る。土坑西側面沿いに、まとまりはないものの石材が散乱しており、この遺構の性格を示すものとみられる。また、平面的にはとらえられなかったが調査区東壁断面では、溝状の落ち込みがみられ、これが後述するSK34・35に続いていたとみられる。

出土遺物も多く図示したものには、土師質土器小皿89、肥前産磁器中碗90、同小碗91、肥前産で輪花形の猪口92、肥前産磁器蓋93、中国漳州窯産磁器大皿94、尾戸窯産鉢95、肥前系灰釉小皿96、灰釉陶器の土瓶97、灰釉陶器急須ないしは水注98、粘板岩製硯99などがあり、16世紀末から18世紀後半までの時期幅がみられる。89の外底面は糸切り痕が残る。94の高台外には荒砂が、96の内底には砂目痕が残る。

硯は、わずかに欠損するものの長さ13.8cm、幅4.7cm、厚さ1cmの小筆用で、材質が粘板岩である。裏面には先の細い工具により「上之寺田石」の5文字が刻まれている。「上之寺」とは竹林寺絵図において牧野植物園の温室部分に相当する「妙高寺」ないしは竹林寺そのものを指したと考えられる。「田石」は硯の所有者の名前であろうか。また表面にも、海と陸を分ける線が彫られているが、この硯の使用者によるものであろうか。

94・96といった16世紀末から17世紀前半に属する、当区では最古段階の遺物が下層より出土していることから、その時期に掘削され、18世紀後半以降に埋没するまでの長期間使用された遺構であった可能性がある。遺構の性格として、池の可能性を考えておきたい。

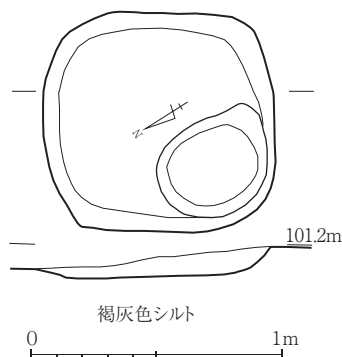


Fig.30 SK17 平・断面図

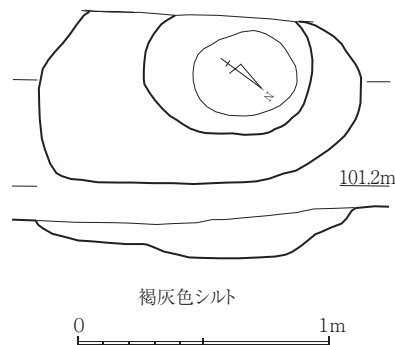


Fig.31 SK18 平・断面図

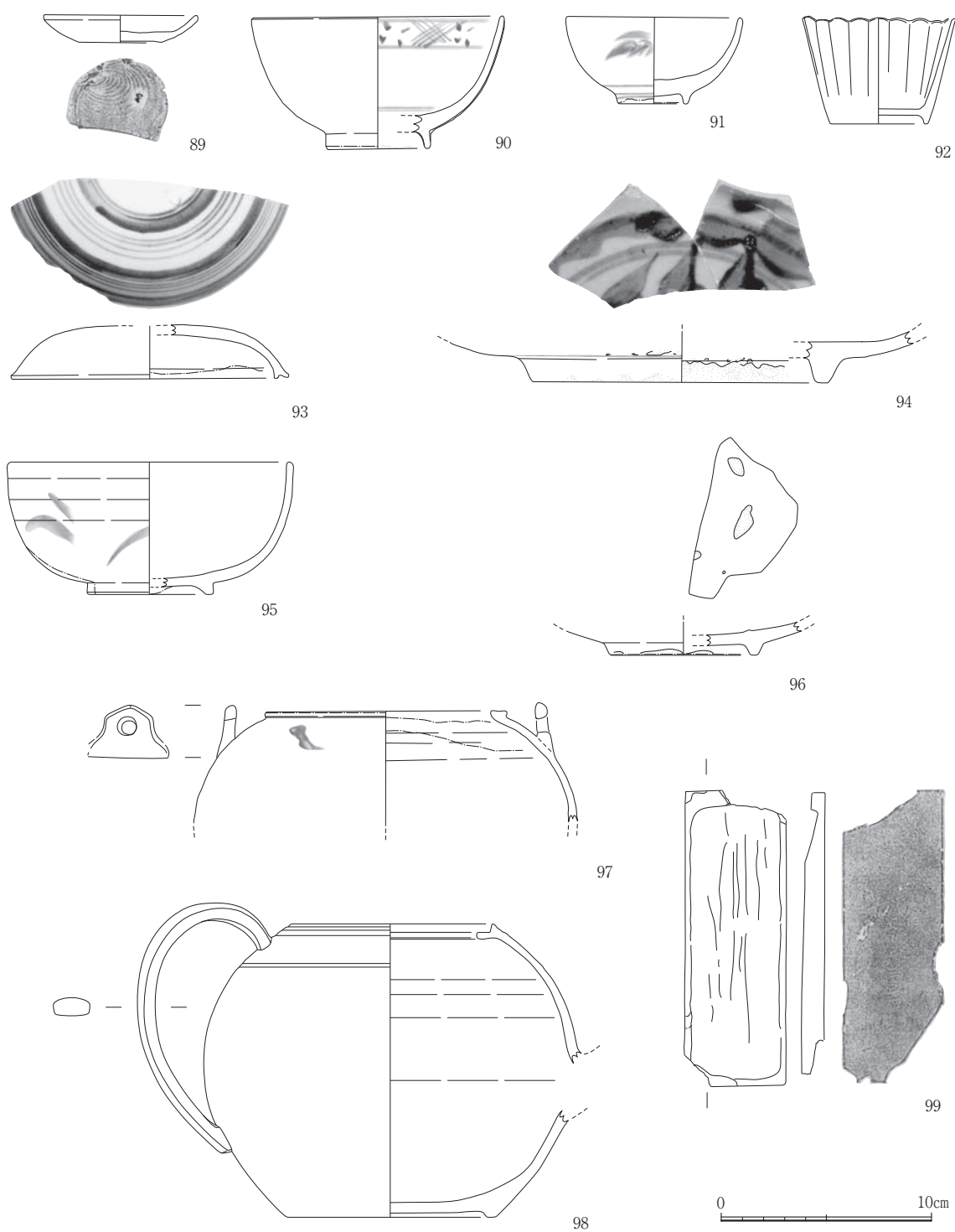


Fig.32 SK19 出土遺物

3. 7区

旧温室南出入口より南の丘陵裾までの新温室建設地に設定した、長さ13m、幅5～6mの調査区である。調査区中央部を中心に14基の土坑、溝1条、ピットが切り合いながら存在したが、建物の存在を示す礎石や柱穴などは検出できなかった。

(1) SK20

7区南東隅で検出した土坑である。図示した範囲での規模は、長軸200cm、短径が130cm、深さ45cmを測る。調査区を南に拡張した際、この南側において不定形の土坑が連続して検出された。埋土中の2層には、炭を多く含んでいた。

出土遺物には、肥前産磁器中碗100、備前焼灯明皿101、京都産灰釉陶器の灯明受皿102、瓦を

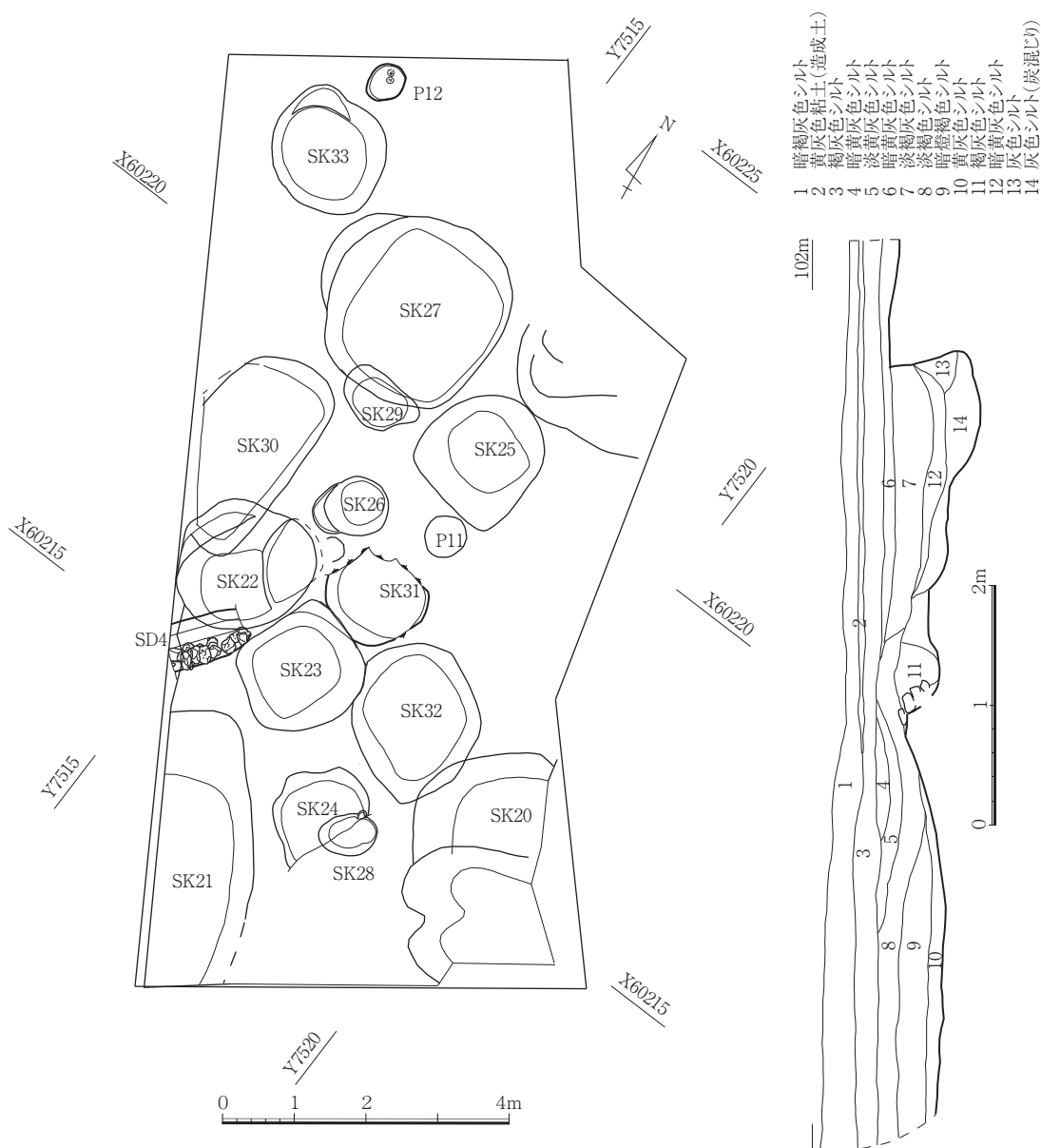


Fig.33 7区全体図・西壁土層断面図

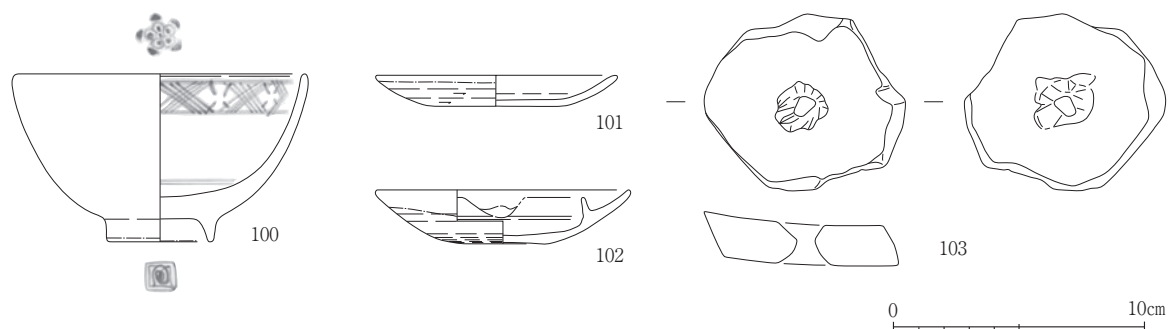
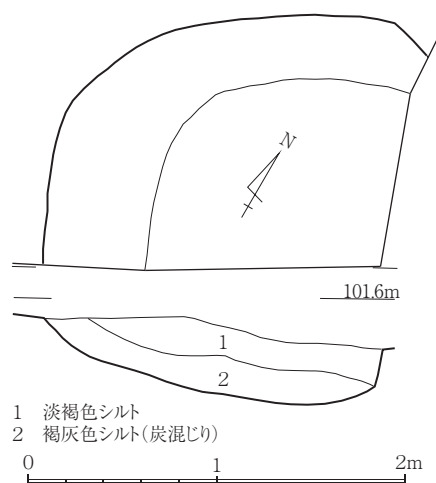


Fig.34 SK20 平・断面図, 出土遺物

転用した紡錘車103などがある。遺構の時期は、18世紀後半以降とみられる。

(2) SK21

7区南西角で検出した、平面形が隅丸長方形を呈する土坑で、調査区西側外につづく。調査範囲での規模は、長径380cm、短径が135cm、深さ50cmを測る。埋土の2層は、地山と地山に含まれる角礫で、よく締まっていたことから建物の基礎地業か、背後の丘陵が崩落、ないしは丘陵部を掘削する際に埋められたと考えられる。

出土したのは、肥前産磁器中碗104、京都産灯明受皿105、

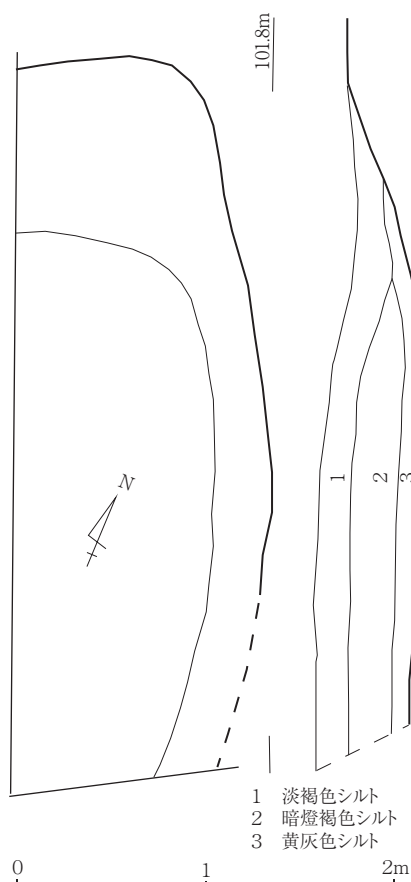


Fig.35 SK21 平・断面図

尾戸窯産小皿106、関西産播鉢107、軒平瓦108などである。106は、焼成が軟質で土師質土器に近く、色調は白色を呈す。内底面に型押しの松竹梅鶴亀文様が、外底面は回転ヘラ削りのちナデを施す。遺物からみた遺構の時期は、18世紀後半以降と考えられる。

(3) SK22

7区中央西壁沿いで検出した、平面形が円形を呈する土坑である。規模は、長径200cm、短径が180cm、深さ60cmを測る。断面は、東側が袋状を呈するのに対し、西側は土坑底から緩やかに立ち上がり、中位にテラスが存在する。土坑底も東側がわずかに低い。

出土遺物は今回の調査で最も多く、そのうち図示したものに土師質土器109・129、磁器110～118、陶器119～128、瓦131、鉄器132がある。磁器碗蓋110は能茶山産であろうか、外面の四方の区画内に「福寿」を描く。肥前系磁器碗蓋111と碗112はセットで、外面に山水紋、内面に流水紋を描く。段重113・114は、法量からセットとみられる。113は体部

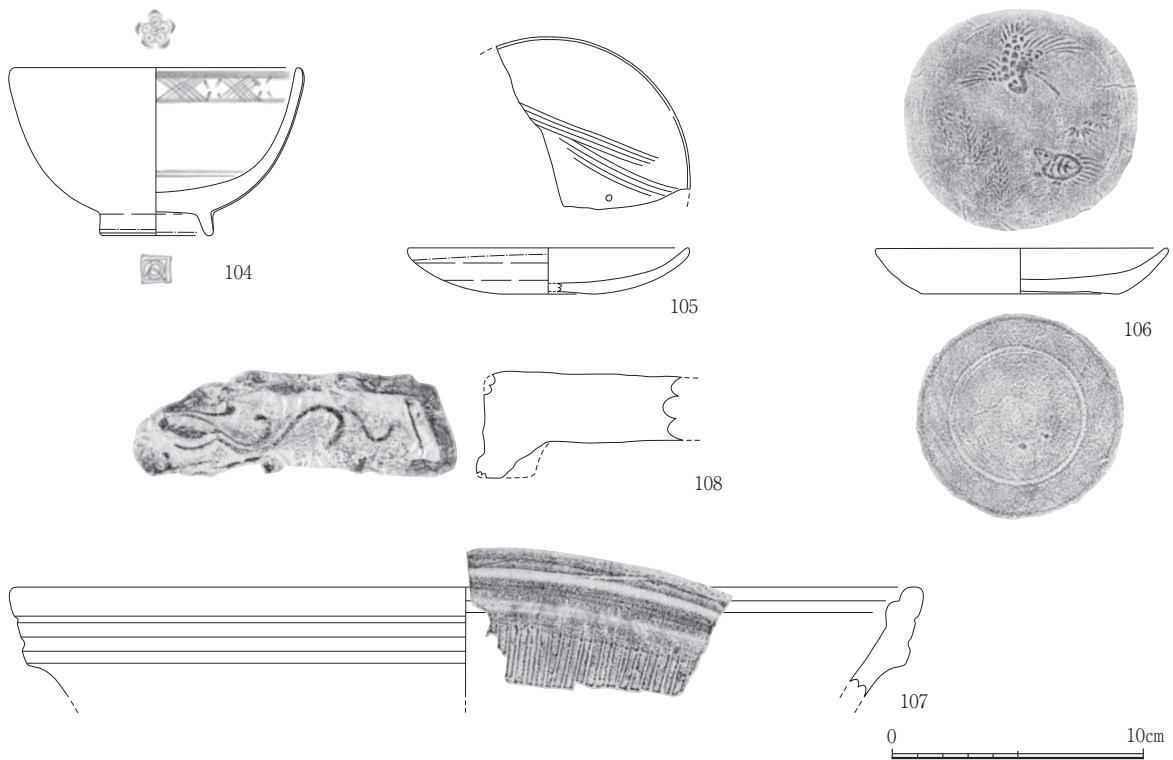


Fig.36 SK21 出土遺物

と底部の境に受け部をなし、無釉である。鉢 115、酒杯 116、仏飯器 117 は、いずれも肥前産ないし肥前系磁器である。118 は、青磁仏花瓶である。119～122 は、灰釉陶器の土瓶蓋や小碗である。123 は尾戸窯産小皿であるが、焼成は軟質で白色を呈し、土師質土器に似る。内底面には型押しによる高砂紋がみられる。灯明受皿 124 は外底面に糸切り痕が残る。褐釉陶器の捏ね鉢 125 は、内底面に目跡が残る。ともに能茶山窯産である。126 は、京都産陶器灯明受皿である。127・128 は灰釉陶器の土瓶と行平鍋である。129 は、土師質土器の焜炉である。130 は鉄釉の植木鉢、131 は軒平瓦、132 は鉄器の鎌である。131 は中心飾りが三巴で、唐草は巻き込みが大きく、文様幅も広い。左肩に棧があり、「和食」の刻印がある。高知城伝下屋敷調査発掘調査報告書（高知県埋文センター 2002）の編年案では 18 世紀中葉以降と考えられるものである。

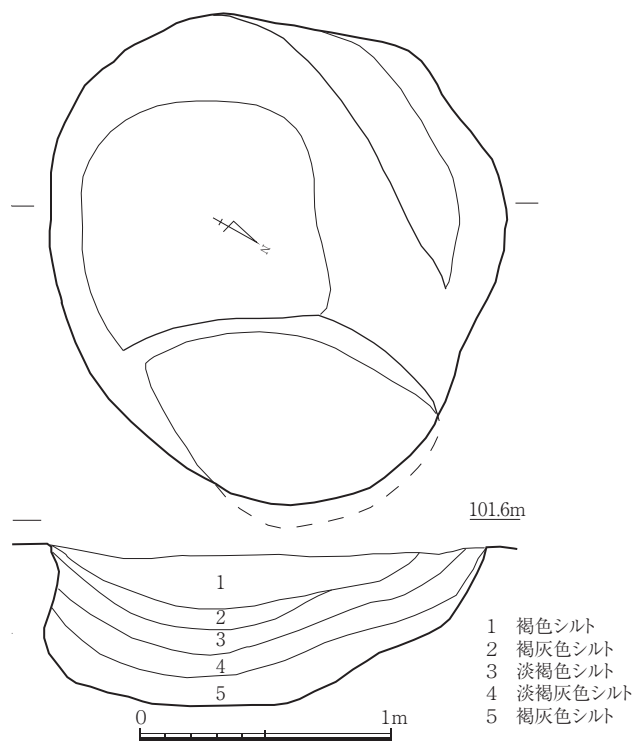


Fig.37 SK22 平・断面図

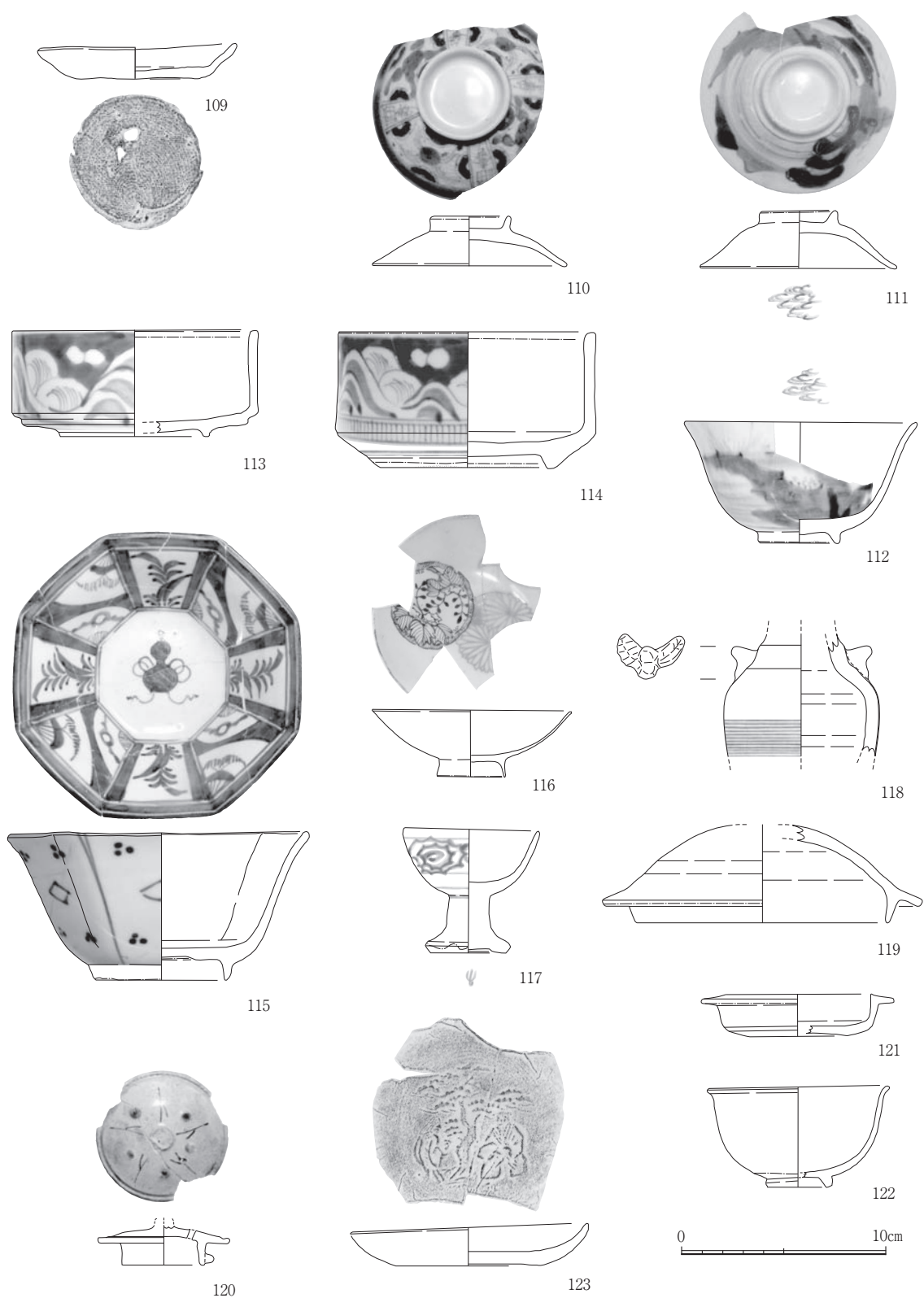


Fig.38 SK22 出土遺物 1

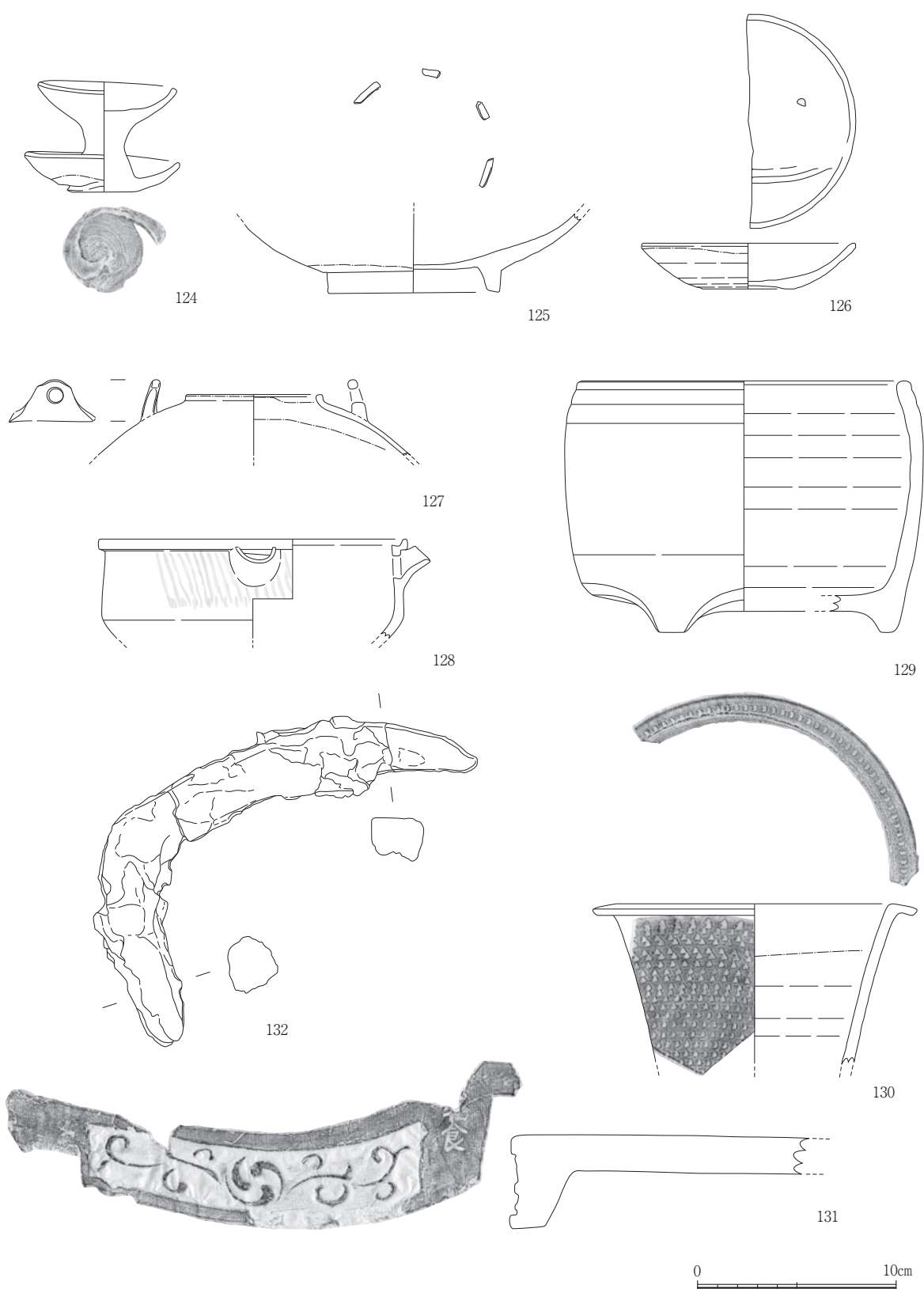
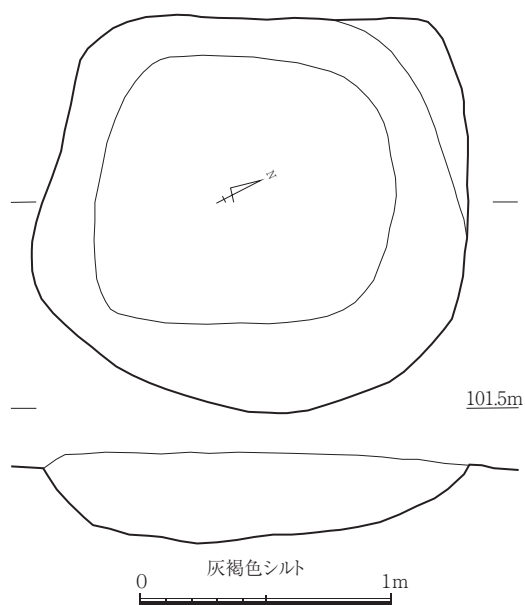


Fig.39 SK22 出土遺物 2



出土遺物は、18世紀後半から19世紀中葉までの幅があるが、今回の調査ではもっとも新しい一群の遺物を含み、土坑内に一括投棄されたとみられる。明治初年の廃仏毀釈に際し堂塔が破壊されたこととの関わりが考えられる。

この土坑本来の機能は貯蔵穴と考えられ、西側が出入り口であった可能性があろう。

(4) SK23

7区中央で検出した、平面形が隅丸方形、断面形が碗状を呈する土坑である。規模は、長径170cm、短径が160cm、深さ35cmを測る。

出土した遺物のうち、灰釉陶器瓶133は尾戸窯

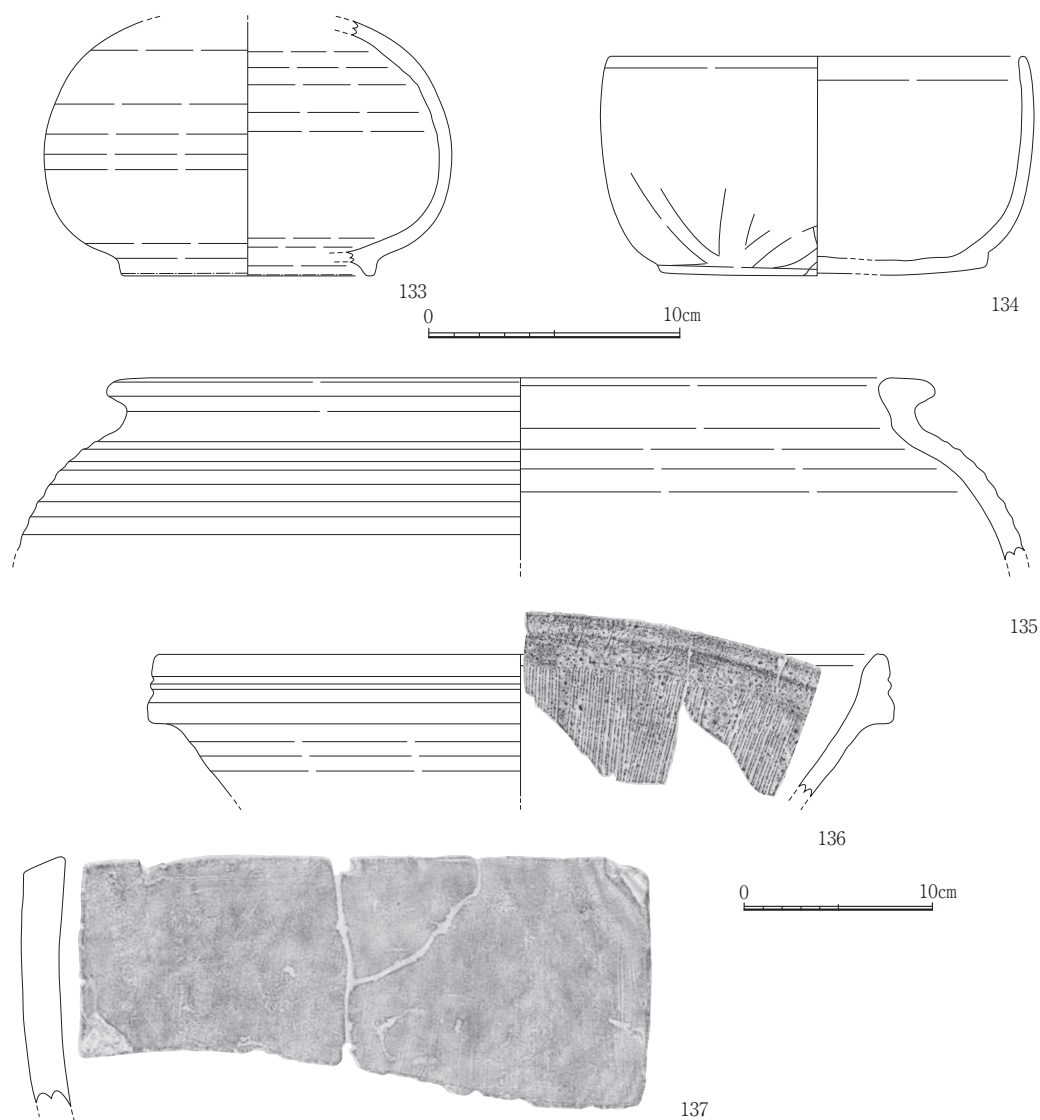


Fig.40 SK23 平・断面図, 出土遺物

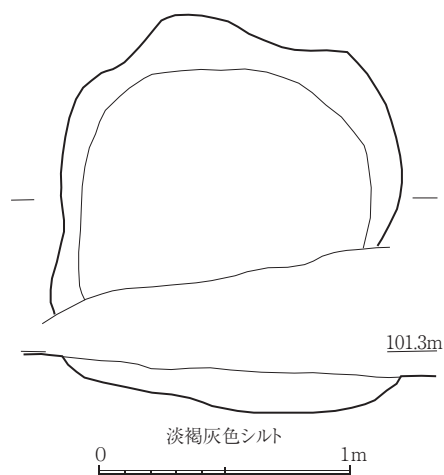


Fig.41 SK24 平・断面図

産で、内面と高台に施釉する。134 は備前焼鉢で、火
襷がみられる。水屋甕 135、播鉢 136 も備前焼で、時
期は 18 世紀前半である。その他に平瓦 137 が出土し
ている。

(5) SK24

7 区で検出した土坑である。周辺部に削平を受け、
平面形が不整形を呈する。残存部での規模は、長径
135cm、短径が 105cm、深さ 24cm を測る。

出土遺物として、磁器片 2 点、瓦片 1 点が見られた
ものの図示し得るほどではなく、詳細な時期は不明で
ある。

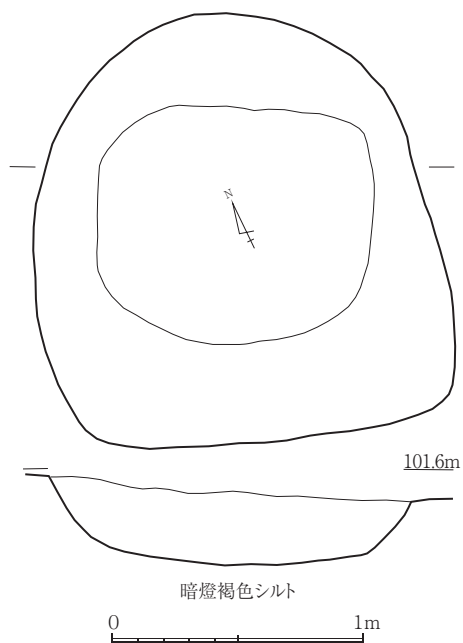
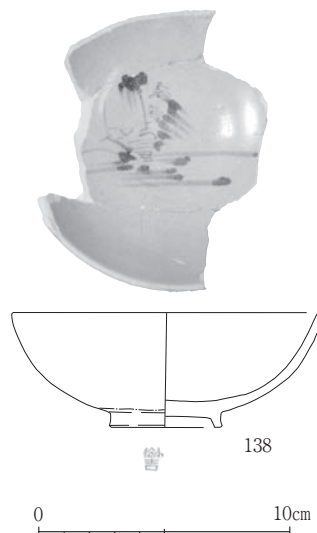


Fig.42 SK25 平・断面図, 出土遺物



(6) SK25

7 区で検出した、平面形は北半が円形、南半は隅丸方形で、
断面が皿状を呈する土坑である。長径 170cm、短径が 165cm、
深さ 30cm を測る。

出土遺物のうち図示した 138 は、肥前系灰釉陶器皿で、京
焼風の山水紋を描く。17 世紀後半とみられる。

(7) SK26

7 区中央で検出した土坑であるが、東側は攪乱によって削
られていた。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長径が 103cm、

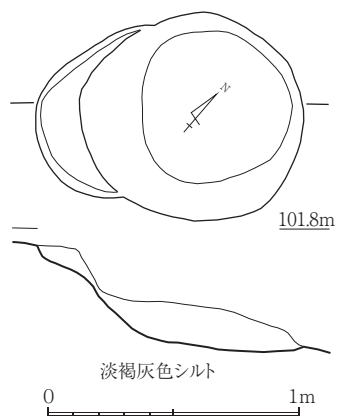


Fig.43 SK26 平・断面図

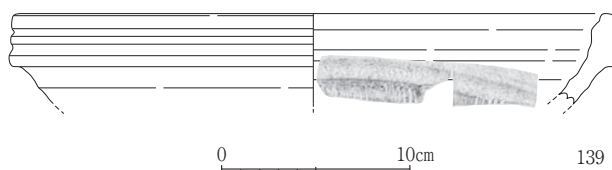
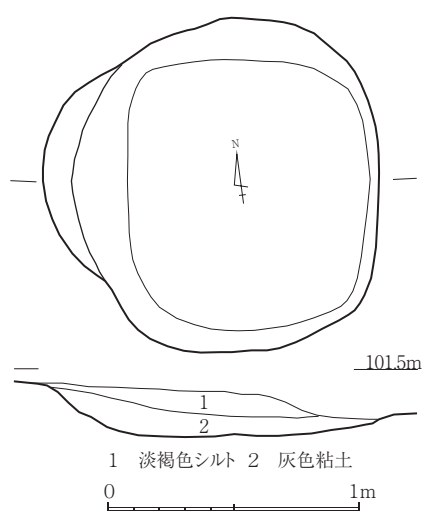


Fig.44 SK27 平・断面図，出土遺物

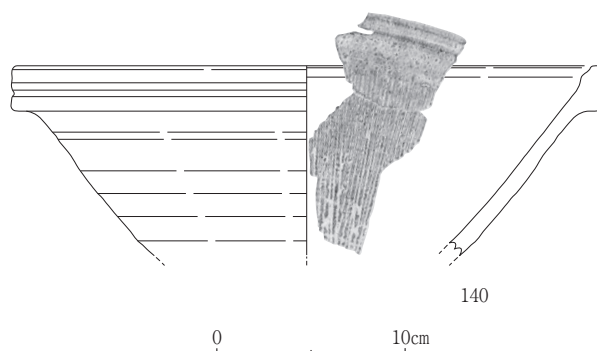
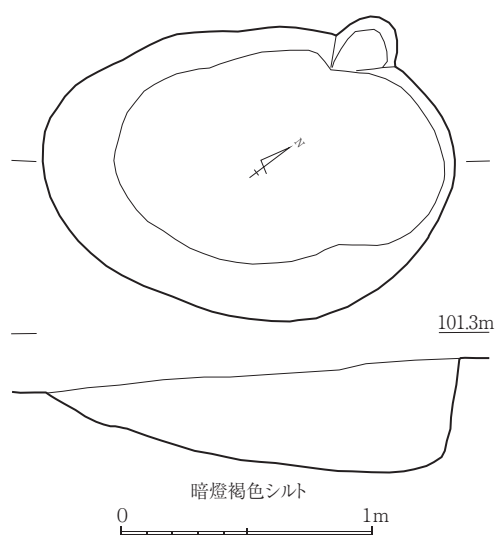


Fig.45 SK28 平・断面図，出土遺物

短径が 82cm、深さは 40cmを測る。

出土遺物としては、国産の白磁小片 1 点があるのみで、詳細な時期は不明である。

(8) SK27

7 区北で検出した、平面形が隅丸方形で、断面形が浅い皿状を呈する土坑である。規模は、長径 270cm、短径が 265cm、深さ 40cmを測る。

出土遺物 139 は、関西系の播鉢で、時期は 18 世紀後半である。

(9) SK28

2 区で検出した、平面形が隅丸方形を呈する土坑である。長径が 160cm、短径が 116cm、深さは 42cmを測る。

出土遺物 140 は、備前焼播鉢で、時期は 18 世紀前半である。

(10) SK29

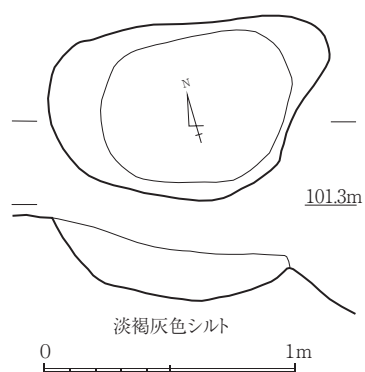


Fig.46 SK29 平・断面図

2区で検出した、平面形が楕円形、断面が碗状を呈する土坑である。規模は、長径 110cm、短径が 73cm、深さ 30cmを測る。

出土遺物は見られなかった。

(11) SK30

7区中央の西壁沿いで検出した。平成 19 年度に実施した試掘時（TP11）において土坑の大部分は調査されており、その時点では溝状遺構と認識されていたが、本調査の結果、平面形が隅丸長方形を呈する土坑で、SK22 に切られていることが明らかとなった。規模は、長径 285cm、短径が 155cm、深さ 50cmを測るが、壁面は底部に向かい垂直に近く下がり、西側側面では袋状を呈す。また、調査区西壁に接する土坑南西部では、土坑底より 25cm上がったテラス状を呈しており、この土坑への出入り口の可能性がある。隣接する SK19 と同様に貯蔵穴であった可能性がある。

TP11 試掘時の所見では、両岸（土坑「肩」付近）が 10cm前後の石灰岩礫で覆われており、埋土上層には 30cm大の石も含まれていた。また、この SK30 に近接し、後述する SD4 は、この土坑と同様の石灰岩の礫を数段積み重ねることが確認されている。本来 2つの遺構は一連のものであった可能性があるが、ともに SK22 に切られていたため断定はできない。さらに、埋土の下層には炭を多

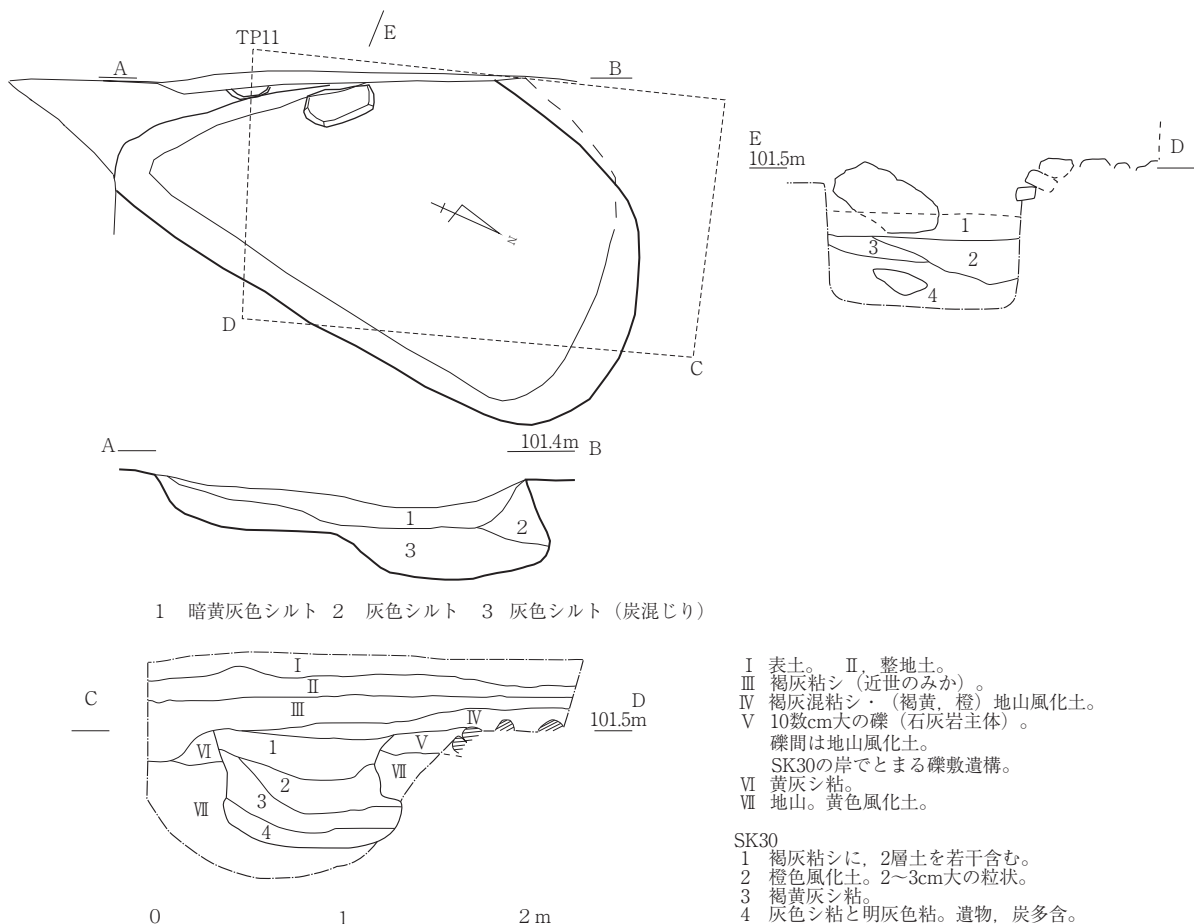


Fig.47 SK30 平・断面図

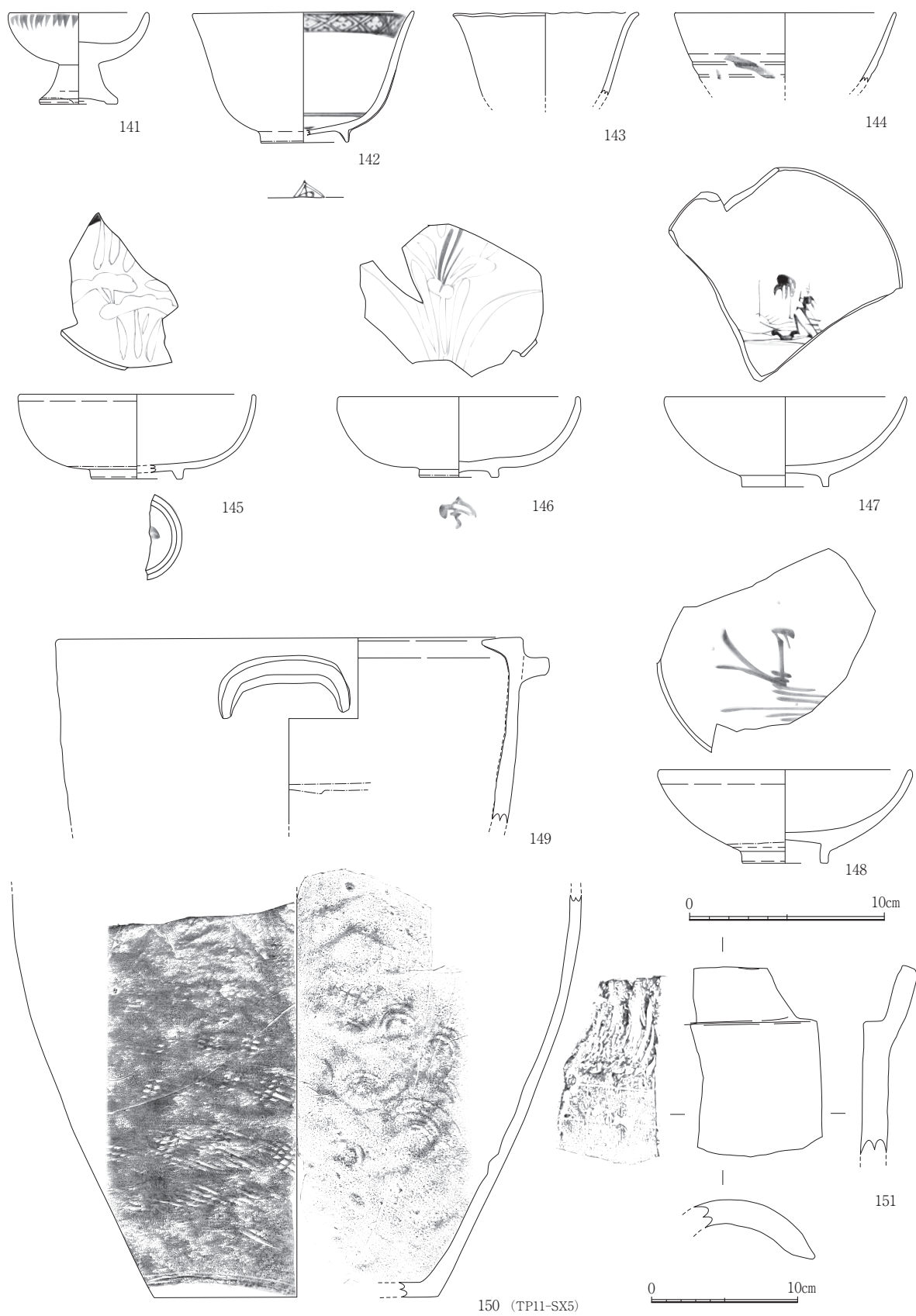


Fig.48 SK30, SX5 出土遺物

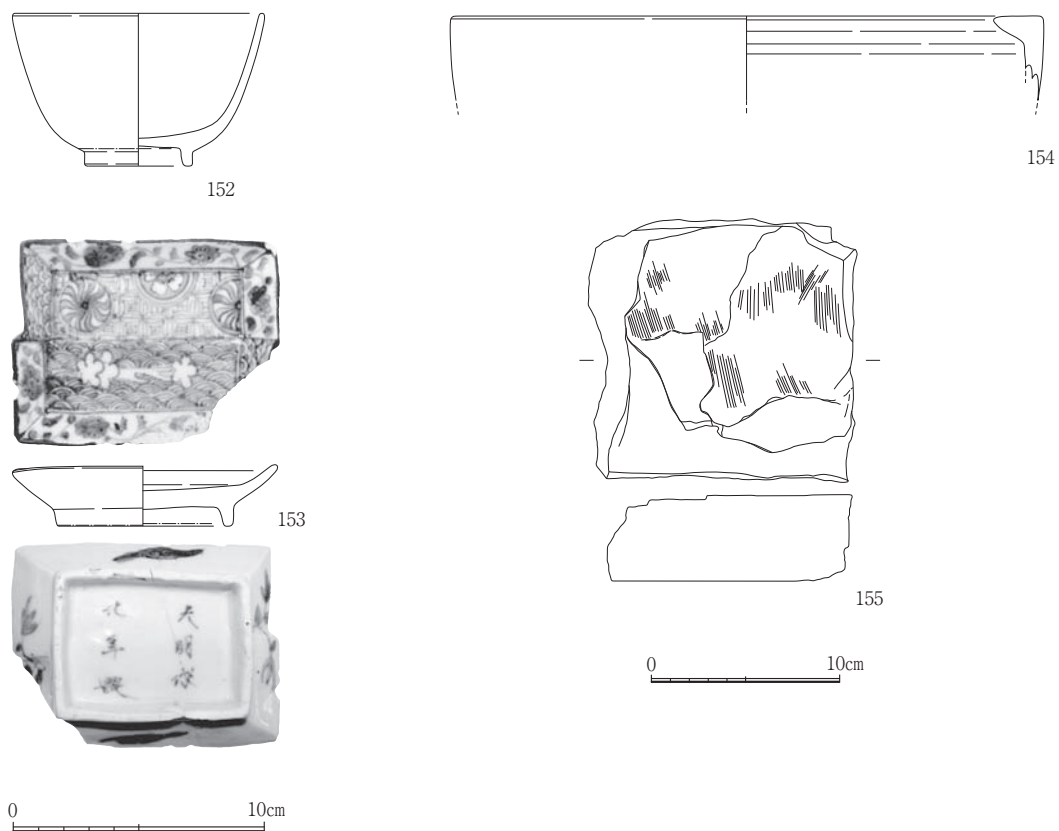


Fig.49 SK30 出土遺物

く含んでいたが、文化五（1808）年など幾度かの罹災とのかかわりも考えられる。

図示した遺物は主に TP11 における出土で、磁器 141 ～ 143、陶器 144 ～ 150、丸瓦 151（平成 19 年度調査分）、肥前系灰釉陶器の中碗 152、肥前産磁器小皿 153、砥石 155 がみられる（平成 21 年度分）。141 は仏飯器、142 は磁器碗、143 は白磁の猪口、144 は陶器碗である。145・146 は京都系陶器皿で、146 は高台内底に墨書がある。147・148 は、京焼風の肥前産陶器皿、149 は陶製火鉢ないし水鉢、150 は陶器甕の体下半部で外面に格子タタキが残り、内面には同心円紋のあて具痕をナデ消す。151 は行基式の丸瓦である。153 は、口紅の角小皿で、外面に雲・草花文、内底面に花唐草・七宝青海波・丸文が、外底面には銘「大明成化年製」がみられる。火鉢 154 は、149 と同一個体の可能性がある。これらの時期は、18 世紀前から中葉である。

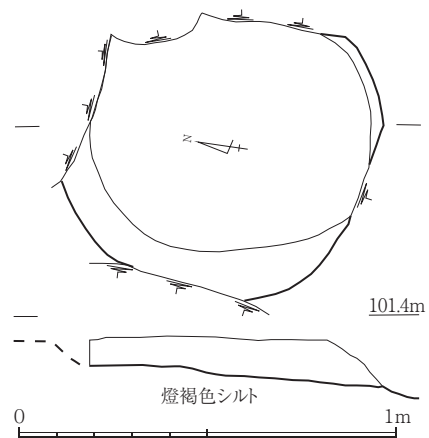


Fig.50 SK31 平・断面図

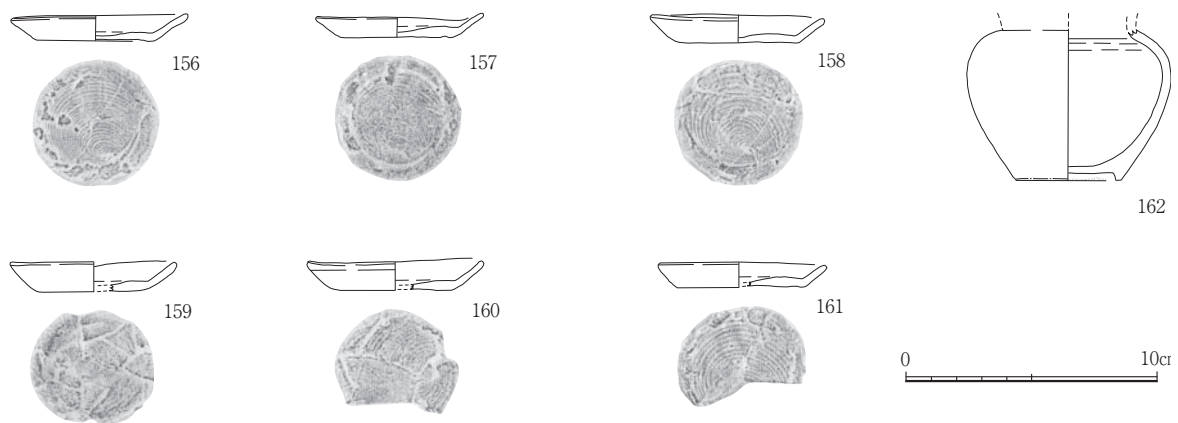


Fig.51 SK31 出土遺物

(12) SK31

7区中央で検出した、平面形が円形を呈する土坑である。SK23やピット、攪乱によって切られているが、残存部の規模は、直径260cm、深さ25cmを測る。

出土した遺物には、土師質土器小皿156～161と白磁瓶類162がある。162は内面に釉を施す。土師質小皿は、いずれも灯明皿として使われたものでその痕跡が残る。また、外底部は糸切り痕が残る。詳細な時期は不明であるが、周辺の多くの遺構に切られていることから「妙高寺」初期の遺構の1つと考えておきたい。

(13) SK32

7区北で検出した、平面形がやや不整の隅丸方形、断面が逆台形状を呈する土坑である。規模は、長径200cm、短径が175cm、深さ50cmを測る。埋土は、上層に地山由来の角礫を多く含み、非常に硬く締まっていた。

出土した遺物には、肥前系の陶磁器類や備前焼、平瓦片がある。このうち図示したものに肥前産磁器大皿163、肥前系灰釉陶器小碗164、備前焼播鉢165・166がある。163は、外面に如意頭連続唐草文、内面に松竹梅円形文を施し、高台外底には「大明成化年製」の銘がみられる。備前焼播鉢は、17世紀後半頃のものである。

この遺構の時期は、163などからみて18世紀後半以降であろう。

(14) SK33

7区北で検出した、平面形が円形、断面形が逆台形を呈する土坑である。規模は、直径は160cm、深さが50cmを測る。底面の周囲よりわずかに内側で、幅5cmほどの土色に変色した部分が観察

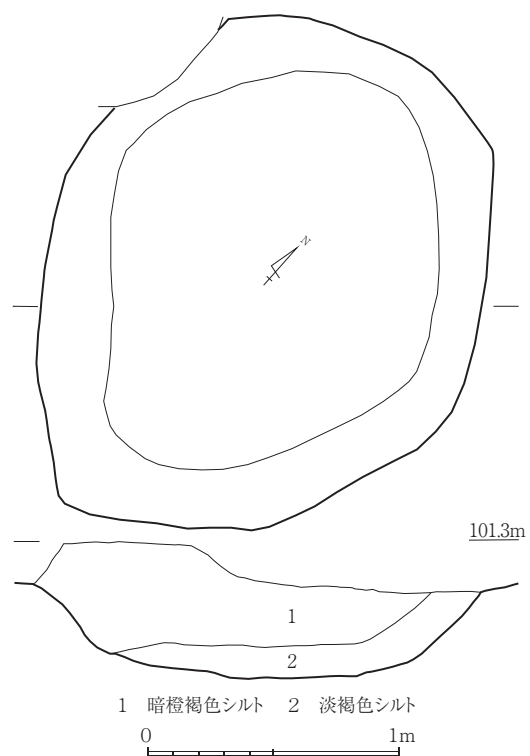


Fig.52 SK32 平・断面図

されたのは、桶の痕跡とみられる。

出土遺物には、17世紀前半に属する肥前灰釉陶器の溝縁皿 167 があり、脇坊「妙高寺」成立期の遺構の可能性がある。

また、この土坑の北 20cm で検出した P2 は、直径 50 ～ 60cm 程で深さ 5 cm ほどの浅い遺構であるが、灯明痕の残る土師質土器小皿 2 点が出土している。

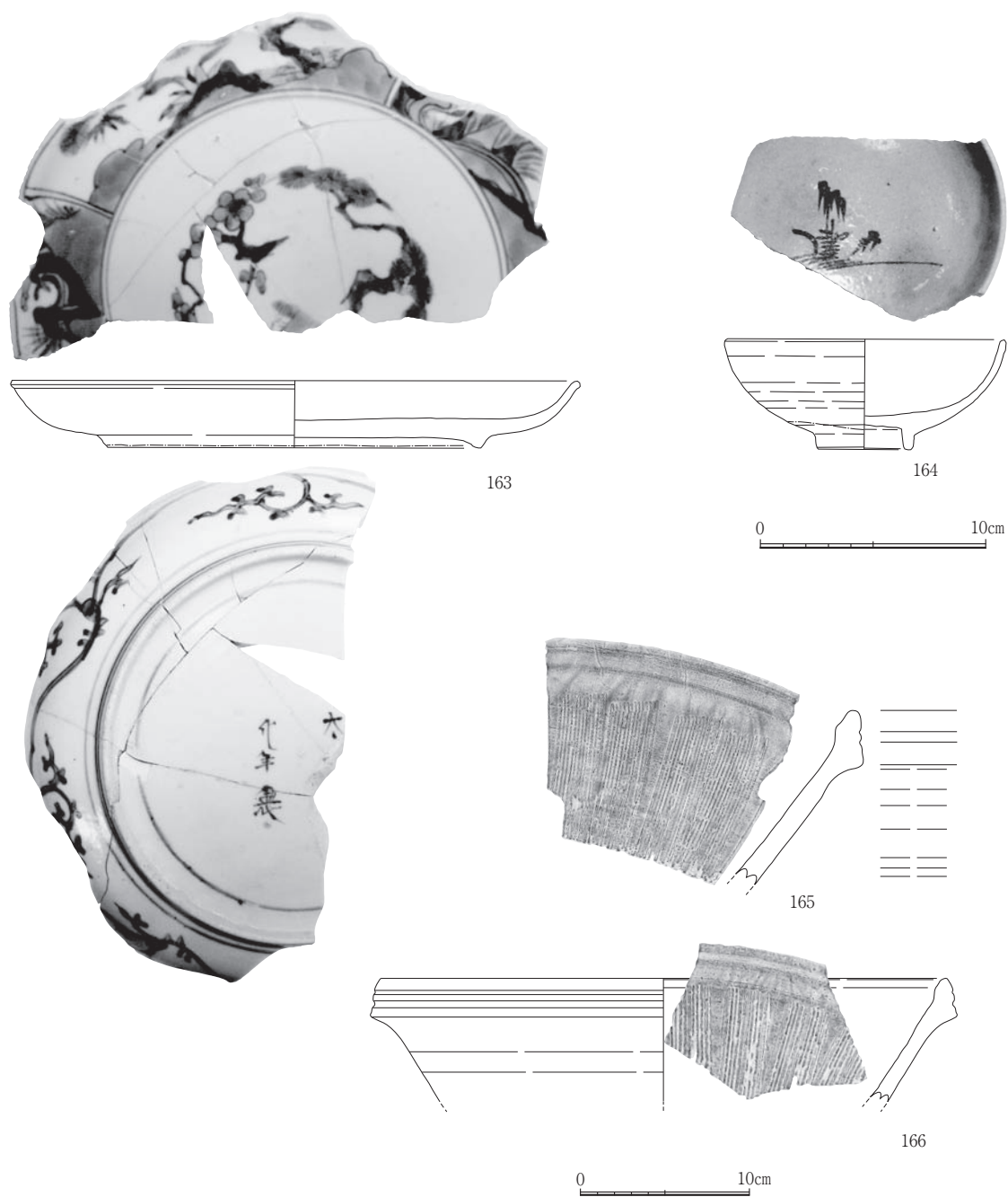


Fig.53 SK32 出土遺物

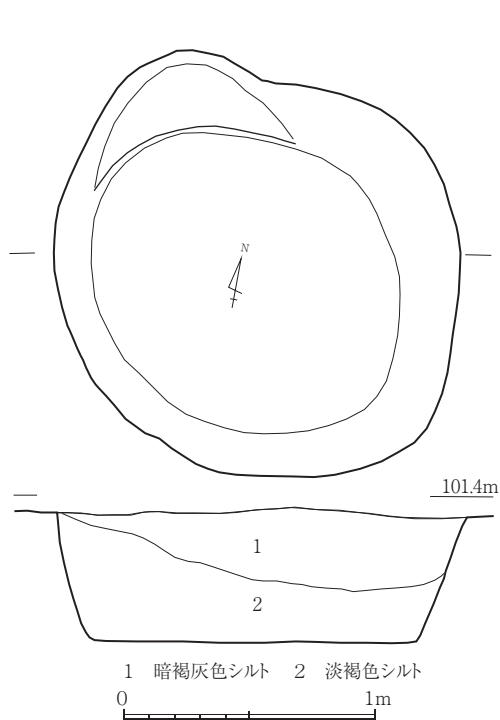


Fig.54 SK33 平・断面図, 出土遺物

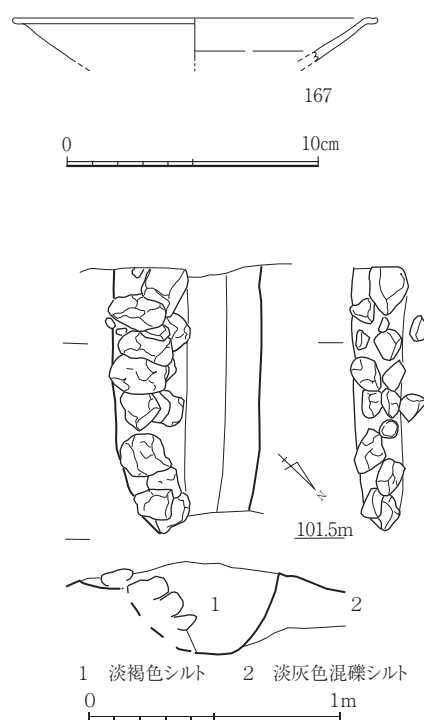


Fig.55 SD4 平・断面図

(15) SD4

2 C 区中央部に位置し、調査区西壁から北東方向に向かい長さ 2 m にわたって検出した溝で、SK22・23・31 により切られており、それより東では検出されていない。幅は 100cm、深さ 70cm 程であるが、両側壁に石を配していた。石材は、風化した石灰岩と見られる長軸 30～40cm 程の角礫である。南側の残りがよく 3 段の石積みが確認できたが、北側の遺存状態は悪く、壁際に 1 石が残る程度であった。ただし、SK30（平成 20 年度調査 TP11）においても石積みが確認されており、北側の石積みが続いているともみられる。

出土遺物はないが、SK22 などに切られていることから、初期の遺構の一つと考えられ、性格は基壇建物の石組み溝の可能性はある。

4. 8 区

温室南東隅を囲むような「L 字形」の調査区である。6 区調査時において調査区東端では、谷に向かって下がる自然地形を想定していたが、「土坑」状の落ちを検出したことからさらに東に拡張し温室東側も可能な部分の調査を実施した。

(1) SK34・35

8 区で検出した、平面形が不定形で切り合い関係のある土坑 2 基である。調査時は SK34（2 B 区）・SK35（3 区）と分けて調査を行ったが、2 基あわせて記述すると、調査区内で計測した規模は、長径 285cm、短径が 145cm、深さ 90cm である。

このうち SK34 は、幅が 60cm 前後で、深さ 30cm 程の浅い溝状を呈するが、先述した SK19 から連続していたと考えられる。

SK35 も平面形が不定形で、断面形は緩やかな U 字状を呈する土坑である。底面は、SK34 の底面より 60cm 低いが、埋土が SK34 から連続して堆積していたことから、SK34 と一連の遺構とも考えられる。また、調査区北においては、幅 100cm、深さ 105 cm、断面が「U 字状」を呈する溝状をなし、北壁断面からみてさらに調査区外に延びることが明らかとなった。しかし、3 月に実施した 3 区の北西（旧温室東側）部分における工事立会では、この溝状の遺構は確認できなかったことから、ほぼ真北方向に当たる谷部に抜けていたと考えられる。

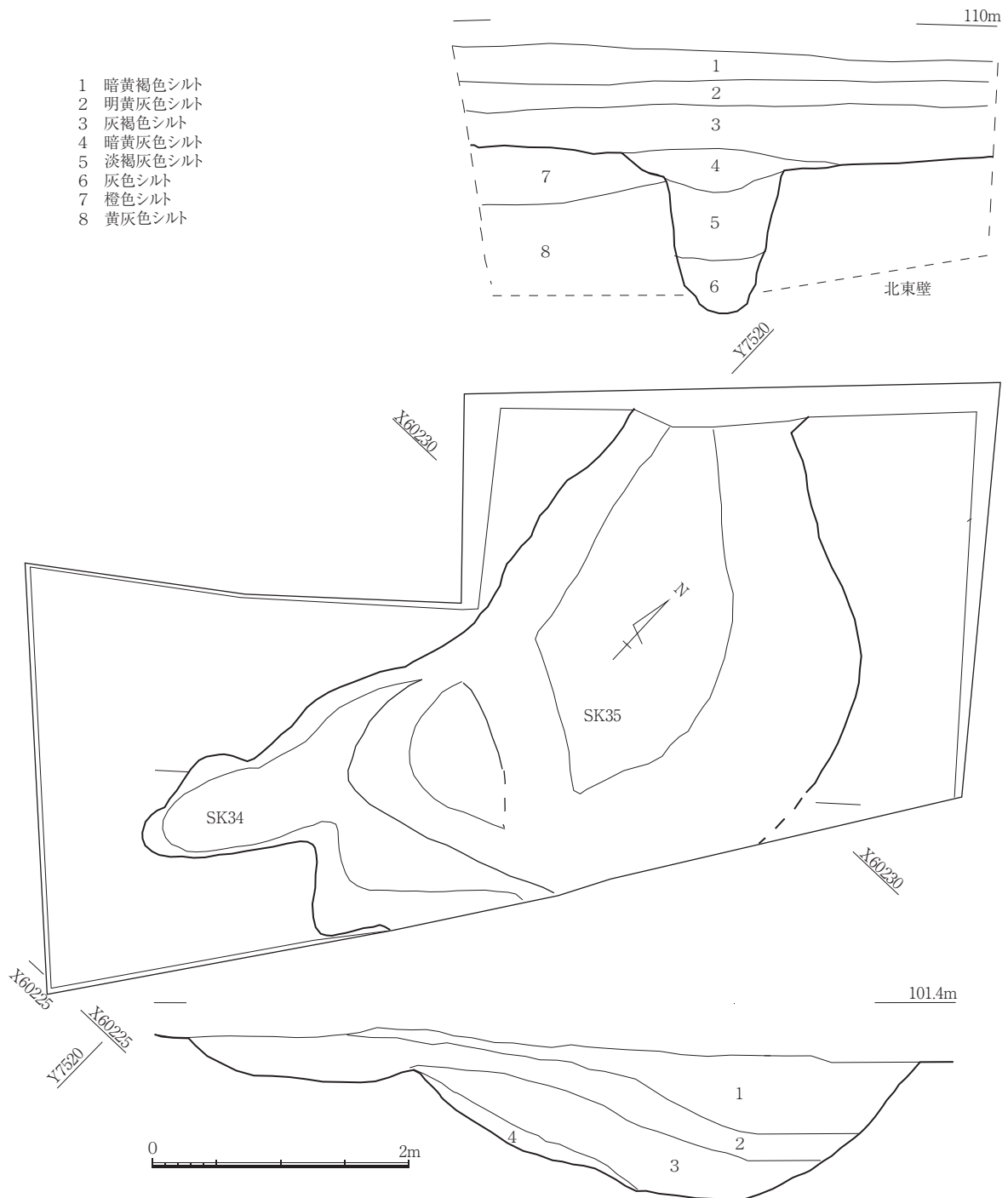


Fig.56 SK34・35 平・断面図

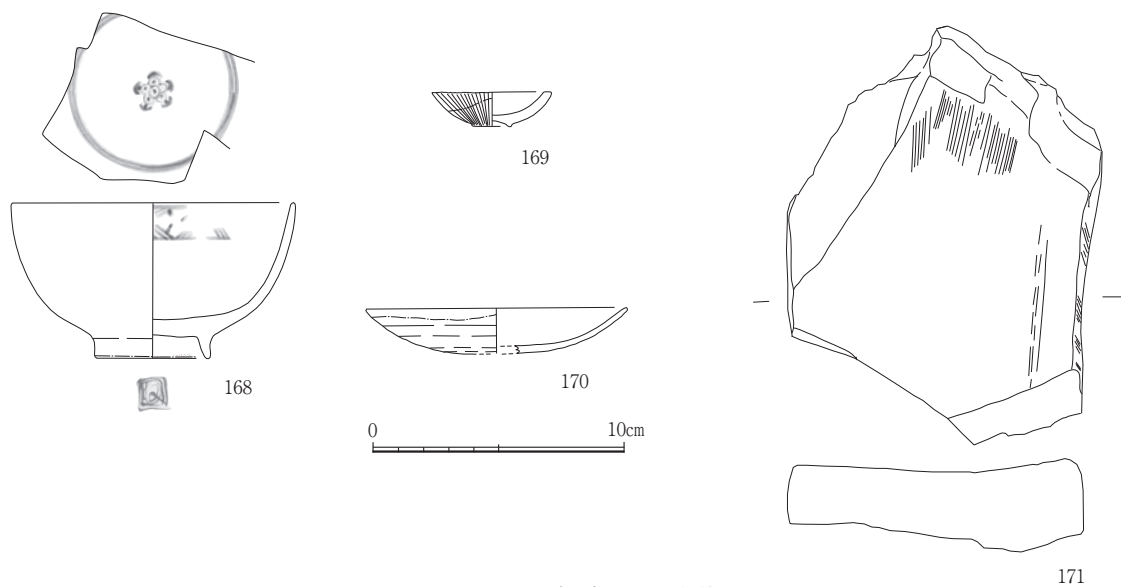


Fig.57 6区包含層の遺物

この遺構は、池状遺構 SK19 から小溝を通じて SK34 に水を流し、その水をさらに SK35 を通して下の谷へと流していた排水路であった可能性がある。

出土遺物は、近世の陶磁器片がわずかにみられるものの、時期を判別しうる資料はない。

5. 9区

温室内の中央部に設定した調査区である。植物の移植作業時の立会及び本調査時に深さ 1 ～ 1.5 m 程の掘削を行なったが、旧温室建設時の土壌の入れ替えのためか、基盤層である黄褐色の粘土層は確認できず、黄灰色の砂質土層 1 層であった。

遺物は、混入と考えられる陶磁器片が数点出土したのみであった。

6. 包含層等の遺物

(1) 6区

168 は、見込みに五弁花、裏面に「福」がみられる肥前産磁器小碗で、時期は 18 世紀後半である。169 は肥前産型押し菊文の紅皿で、外面下半は無釉である。時期は、18 世紀後半から 19 世紀中葉である。170 は備前焼灯明受皿である。171 は砥石である。

(2) 7区

172・173 は仏飯器、174 は灰釉陶器小皿で、ともに肥前産である。半球形の灰釉陶器小碗 175、灯明受皿 176 は、ともに京都系で、時期は前者が 18 世紀中葉～後葉、後者が 18 世紀後半以降である。177 は備前焼の灯明受皿で、内面に鉄釉、外底面に回転ヘラ削りを施す。179 は陶器製の植木鉢で、外面鉄釉、内面は無釉である。時期は、19 世紀の前半から中葉とみられる。SK22 出土の 130 と同一個体であろうか能茶山窯産とみられる。181・182 は、備前焼播鉢で、時期は 18 世紀前半である。

174・180～182 は、平成 20 年度の試掘時に出土した遺物であり、遺構埋土から出土している。試掘トレンチの位置から、本来 SK23 に属した可能性がある。

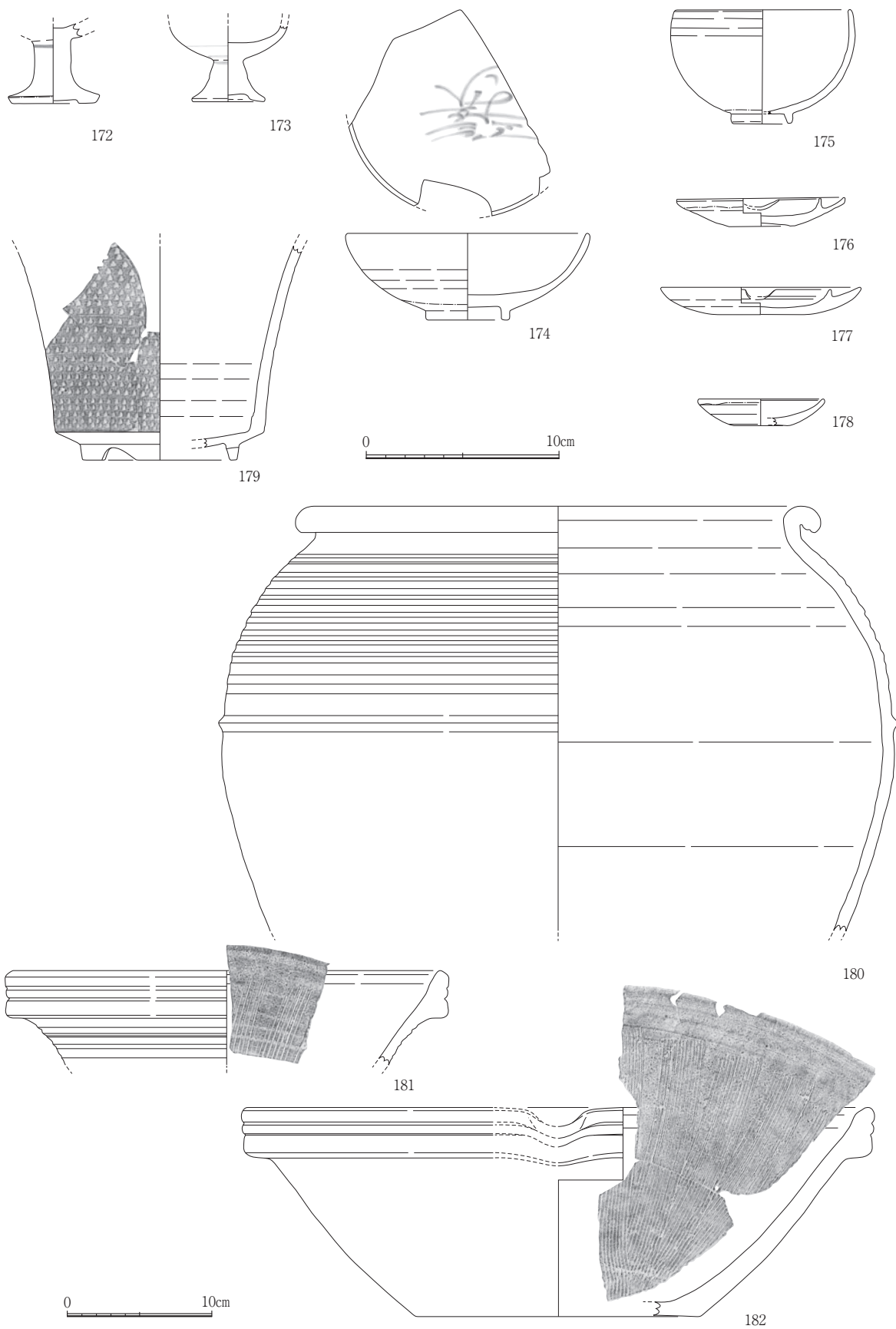


Fig.58 7区包含層の遺物

第5章 まとめ

1. 調査の成果

(1) 中世

今次調査で注目される成果の1つは中世以前の遺物・遺構の検出であり、中世前期に遡る遺物の出土、遺構の検出、中世後期まで連続する遺物群の出土をあげることができる。竹林寺については、数々の伝承のみならず、文献や蔵仏群を含む各種文化財からみて中世以前からの隆勢が周知されてきたが、考古資料はほぼ皆無であった。今回の調査は、新たな資料を提供するものといえよう。

今次調査した1区TP4のピット群は中世前期に属すると考えられ、掘立柱建物跡の一部とみられる。Tab.3の規模を県下における該期の掘立柱建物跡の事例と比較した場合、比較的しっかりした規模の掘形といえる。3区TP8のSX1も中世に属するとみられる。

中世の遺物のうち、瓦器や土師質土器は小片が多いことから、比定時期はTab.9のごとく幅を持たざるを得ない部分があるが、対象地区における寺院関連施設の初現は平安末～鎌倉時代に求められる。青磁碗56は太宰府編年では鎌倉前期に比定されるI-5類であり、常滑焼は土佐では鎌倉中期～室町前半以降にピークがあることから(池澤2005)、その後の存続も推察できる。さらに続く中世後期の遺物もTab.9のごとく出土しており、貿易陶磁器、備前焼や播磨系土器、在地の瓦質鍋や土器と多彩である。調査面積からみれば相当の点数と評価できる。出土範囲も1～4区と対象区のほぼ全域に及んでおり、この谷地形に寺院関連施設が展開していたことが想定できる。対象区内では現在の寺域により近い4区でも、中世の青磁碗・皿が出土している。

このような搬入品に関する県下の状況については、貿易陶磁器や畿内系瓦器が平安末～鎌倉初葉から遺跡数、出土量とも画期的に増大することが判っており、同時に地域の流通拠点や支配拠点、宗教拠点(寺社等)の消長にも画期がみられる(池澤2010)。該期の隔地間流通の活発化は西日本一般にみられる現象で、土佐もそれに沿った状況と解することができる。今回の調査成果は、そのような様相の中に位置付けることができる。古代末～中世の広域分布品のうち、貿易陶磁器と、普遍的に出土する畿内系瓦器、東海産の重貨である常滑焼甕等について県下の概況を示したのがTab.8である。海上交通と河川・内陸交通の要所となる港で多量に出土する他、地域支配や宗教の拠点でもまとまった量が出土している。常滑や瀬戸といった東海製品も、鎌倉期以降普及している。またこの表から、これら搬入品が概して浦戸湾沿岸以西に多い傾向を指摘できる(池澤2004)。その原因については、産地との距離や、史料で知られている航路等から説明することができず、荘園制等と絡んだ中世土佐の地域性に関わる可能性がある。

浦戸湾地域については、市街化の進行等により従前は平地部の発掘調査自体が僅少であったが、近年徐々に成果も蓄積され、Tab.8にも示されている。同地域は近世以来各所で干拓や埋立てが行われていることもあって、集落跡とその環境を大規模に明らかにすることは難しい状況だが、土佐の地勢的な中心部にあり、かつ広く複雑な内水面を擁する当地域の重要性は、土佐で比肩し得るものがあったと推察される。

	西南部														中西部						浦戸湾周辺			東部					
	土佐清水		四万		十		中土佐		須崎		佐川		土佐									香美		香南		奈半利			
	加久見遺跡群	宮本地区	坂本遺跡	アゾノ遺跡	具同中山遺跡群	船戸遺跡	坪ノ内遺跡	姫野々土居跡	飛田坂本遺跡	岩井口遺跡	上美都岐遺跡	木塚城跡	八田地区	千本杉遺跡	上ノ村遺跡	高岡地区	天崎遺跡	神田ムク入道遺跡	土佐神社西遺跡	竹林寺跡	田村遺跡群	土佐国衙跡	美良布遺跡	林田遺跡	深瀬北遺跡	口横ヶ谷遺跡	コゴロク遺跡群		
貿易陶磁器	○		◎	◎	○	●	○	○	○	○			○	◎	●	◎	○	○	○	○	○	○	◎	○	○		○		
瓦器	○		◎	◎		●	○	◎						○	●	◎	○	◎	○	○		○	○			○	○		
常滑	○	○				◎			○		◎				●	○			◎	○	○	○							
その他	瀬戸	瀬戸		○		瀬戸					瀬戸		瀬戸	瀬戸	多種														
遺跡の性格	港・館	寺		川・館	川	港	館		館		城		社	港	館			社	寺	港	拠点	川		川					

※○は一定量の出土、◎は比較的高密度、●は極めて多量であることを示し、調査面積も加味した。

「主な」遺跡を抽出し、調査面積からみて低密度な遺跡等は表示していない。

「東部」は浦戸湾より東で高知平野東部以東、「中西部」は同湾より西で高知平野西部以西とした。

「高岡地区」は光永・岡ノ下、林口遺跡、天神遺跡、野田遺跡・野田廃寺、京間遺跡。

上美都岐遺跡、岩井口遺跡は斗賀野地区、千本杉遺跡は小村神社近接。

常滑＝常滑焼で、原則的に甕。瀬戸＝いわゆる古瀬戸の段階。

港＝港湾、川＝川津、館＝居館等支配拠点、社＝神社に各々該当或いは関連

Tab.8 搬入品が出土した主な遺跡

(2) 近世

出土遺物について、時期を特定できるものは遺物観察表に記した。通観すると、17世紀代のものは温室南側の5～7区で出土しているが、少量である。17世紀後葉～18世紀初葉より同区や1区TP3で一定数が出土し、18世紀前葉以降も温室南側の4～7区を中心に19世紀前～中葉まで遺構・遺物が継続している（遺物観察表及びTab.7参照）。

幕末～明治に至って少なくとも検出遺構からみた断絶があり、遺物量も急減する。温室南側のTP13付近では近世後期の陶磁器や瓦がまとまって出土しており、その状況等より、幕末～近代初期に敷地の周縁部に該当するこの付近にまとめて廃棄された可能性がある。

観察表及びTab.7で出土器種をみると、仏飯具や灯明具が一定数存在する。少数だが硯や水滴も留意される。また、文献に尾戸の「白土器」とあるものに該当するとみられる型押し陽刻文の白いかわらけ皿106・123は、同品が高知城伝下屋敷跡や西弘小路遺跡など高知城跡直近で出土している（高知県埋文センター2002、高知市教委2010）。「紅皿」（169）も存在する。

遺構について、1区で近世の生活面を検出したTP1～3では、礫敷や石敷状の遺構或いは遺構面が検出された。同区ではまた、TP10を除く4箇所の試掘坑で近世遺構を被覆する土層から粒の揃った美しい円礫（多くは白色等のチャート）が出土しており、この敷地で一定広範囲に玉砂利を使用する状況があったと考えられる。

(3) その他

弥生土器が破片だが複数出土しており、弥生中期末葉に比定可能なものがある⁽¹⁾。須恵器甕61はタタキ痕や焼成等から、古代に属する可能性がある。瓦は各区から多数出土しており、布目や縄目、コビキ状の痕跡を残すものや須恵質のもの、近世以降には通常みられない厚さや焼成のもの等も含まれるが、詳細な時期の確定は難しい。

発掘調査成果			文 献 等	
出土遺物	時 期	遺 構	竹林寺関連文献・蔵物等	吸江庵, その他
華南産白磁群, 同安窯, 龍泉窯 劃花文碗	平安末～鎌倉初	SX1 (TP8)	木造文殊菩薩及侍者像 5 軀ほか: 平安後期	1318 年: 夢窓疎石創庵 - 義堂周信, 絶海中津 / 康永 2 (1343) 年所領寄附
瓦器	平安末～鎌倉	掘立柱建物 (TP4)		
龍泉窯鎚蓮弁文碗	鎌倉前葉		木造大威徳明王像ほか: 鎌倉	
			弘安 7 (1284) 年梵鐘	
			貞和 2 (1346) 年 足利直義制札	1318 年: 夢窓疎石創庵 - 義堂周信, 絶海中津 / 康永 2 (1343) 年所領寄附
			応仁 2 (1468) 年 細川勝元制札	
龍泉窯稜花皿, 細蓮弁文碗, 常滑甕, 瓦質鍋, 播磨系土師質釜, 備前播鉢・甕				
端反り白磁皿 (E 類)	16C.	TP1 磔敷遺構か	天正 16 (1588) 年 五台山之島地検帳 慶長 9 (1604) 年 山内一豊制札	長宗我部氏吸江寺奉行職
			寛永 20 (1643) 年罹災, 同年 2 代忠義再興開始, 参詣 貞享元 (1684) 年銘石塔「貞享元年銘法華経塔」 元禄元 (1688) 年 介良野 1 町を寄附 (山内家史料) 「四国偏札霊場記」元禄 2 (1689) 年 絵図	
	18C. 初～中	7区SK30		
	18C. 前	TP3 下層配石か		
	18C. 後～	SK20, 21, その他 5～8区	文化 5 (1808) 年罹災, 文化 13 年再建	
	19C. 前～中	SK22		
	幕末～明治初	TP13 で陶磁器, 瓦廃棄	廃仏毀釈, 寺勢一時衰退	

※貿易陶磁器や搬入品は「一産」, 「一系」を含む
参考文献は別途参照。

Tab.9 今次成果の編年的概要と文献資料等

2. 文献等史料との関係

今回の調査成果と、当地に関する文献・絵図や仏像、制札等を編年的に対照する。後者の内容は既知のものであるが、吸江庵を含む五台山を対象としてまとめたものが Tab.9 である。

竹林寺については第 2 章のような伝承があるが、中世以前の直截的な史料は乏しい。一方、湾に面した吸江庵には、夢窓疎石に始まる高僧の連綿たる関与が伝えられる。長宗我部氏も、台頭するとともに同庵(寺)への関与を強めており、中世を通じて重要な位置付けにあったとみられる。

浦戸湾に臨む当山は、地検帳では「大島」とある。浦戸湾中央部に浮かぶ当山の頂部は、湾や河川はもちろんのこと、写真図版 PL1 のごとく国府、大津方面、一宮(土佐神社)、高知城、岡豊城跡をはじめとする城跡群等、高知平野の要所と交通路を一望できる絶好の位置にある。吸江庵や竹林寺成立の背景にはこの立地が大きく関わっていると考えられ、そのような環境と、既述した土佐では中世に現出した物流状況の中で、今次調査で出土したような搬入品群も持ち込まれたものと理解できる。

中世後期になると、「長宗我部地検帳」に後述のごとく竹林寺諸堂・坊の記述がある。今次出土遺物で時期的に近いものに白磁 E 類皿 28、65 があるが、該期に遺物量の変動等は指摘できない。

山内氏入国後は、慶長 9 年の制札がある。1643 年に当寺は罹災したが、2 代忠義が直ちに再興に着手し、その後も所領が寄附されるなど、その位置付けをうかがわせる。一方、今次の調査成果は既述のとおりで 17 世紀前葉の遺物は少ない。長宗我部期の状況と併せて、文献・絵図が示す活況を積極的に指摘できないが、今次の対象区域自体が寺域全体からみれば限られた範囲であることに留意しておかねばならない。

18世紀から19世紀については、今次の調査成果は既述のごとくで幕末～近代初頭頃に画期が訪れる。廃仏毀釈と関連している可能性があり、皆山集等も寺域が一時荒廃した様子を伝えている。

建物等の具体的な施設については、今次TP4で掘立柱建物跡が検出されたが、直接関連する中世前期の史料は存在しない。長宗我部期の地検帳には「本堂 東向 文殊 仁王堂 竹林寺金色院」・「塔堂 三重」・「奉納所」・「御影堂」・「鐘楼」、続いて「坊敷」として「本堂ヨリ張道ノ北」に「本坊」・「脇坊 中之坊」・「北室坊」・「中院」・「上坊」・「東坊」、 「本堂ヨリ張道ノ南」に「大月堂 妙光寺」・「虚空蔵堂 下之坊」が記されている。元禄期の「四国徧礼霊場記」や明治期編纂の「皆山集」には当寺の絵図があり、描かれた建物群は地検帳とよく符合する(Fig.59, 巻頭図版)。今次調査区と対照すれば、1区は「中坊」・「北室」、3区付近が「南坊」、4～8区が「妙高寺」に各々該当するとみられる。1区TP1では礫敷遺構等の傍で杭が検出され、覆土は還元色を呈する。絵図の該当地点付近には水溜り状の表現(Fig.59)や柵、葦のような植物(巻頭図版)が描かれており、このような検出状況と合致している可能性がある。

3. おわりに

以上のように、今次調査は大規模なものとはいえないが、少なくとも竹林寺の一部について、中世初期からの活動を示す考古資料を得ることができた。輸入・移入品を含む出土遺物の内容は、該期の有力寺院としてふさわしいものである。建物も、比較的しっかりした柱のものが想定でき、古相の瓦も所々で出土している。存在した施設の性格について興味を持たれる。

近世においても出土遺物の年代に大きな断絶はなく、寺院が存続したと考えられる。仏飯具や灯明具が比較的多く、使用された焼物の一端が窺える。遺構は、現「遍路道」沿いの1区で礫や石、玉砂利の使用が想定され、礎石状の配石や石列も検出した。上段の温室付近では溝跡や土坑が重ねて営まれており、遺物は肥前製品や地元の尾戸焼の他、18世紀には流行した京都系の陶器皿・碗が持ち込まれている。灯明皿に備前製品が含まれるのも特徴である。時代が下って幕末～明治に至ると、当寺も時代のうねりの影響を受ける。今次対象とした谷部ではその後施設が再建されることなく、堂坊が並んだ往時の記憶は失われた。

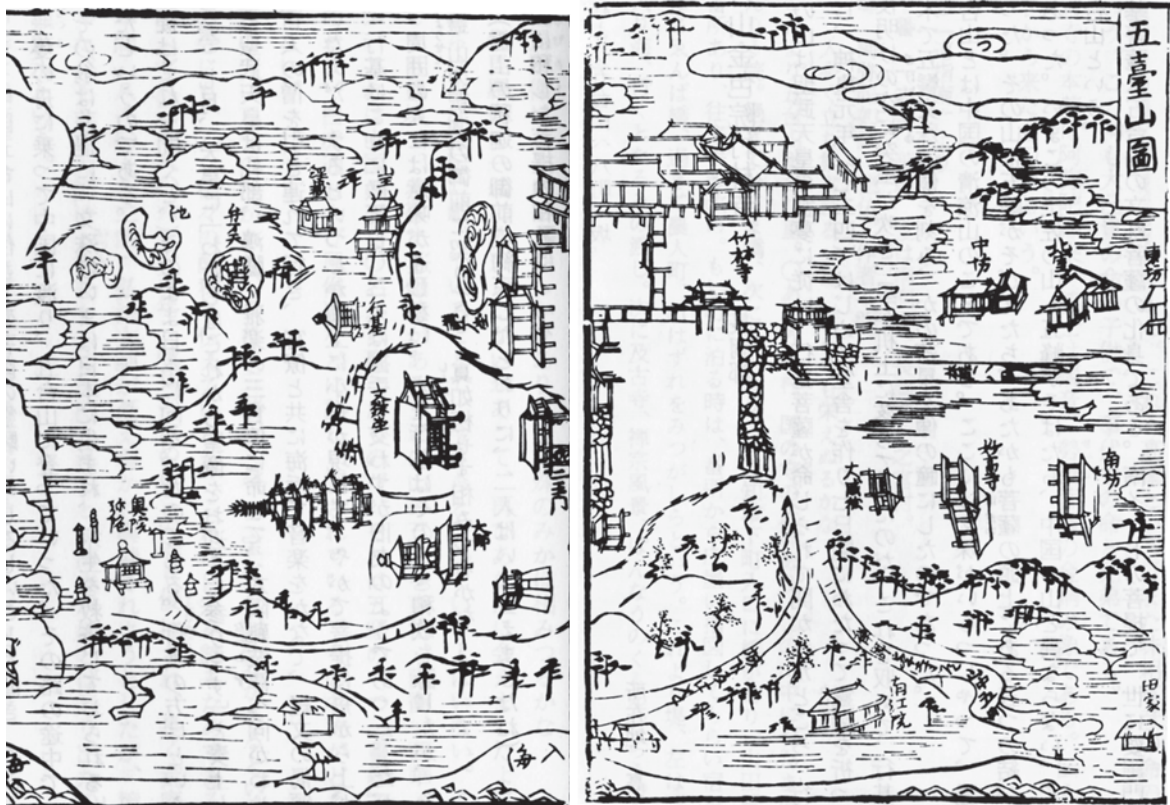


Fig.59 「五臺山圖」『四国徧礼霊場記』 村上 護1987より転載

註

1) 出原恵三氏に教示頂いた。

参考・引用文献

村上護 訳 1987「四国徧礼霊場記」教育社(寂本原著 元禄二(1699)年)

高知県立図書館 1958「長宗我部地検帳 長岡郡 上」

高知県 1971「高知県史 古代中世編」

高知市教育委員会 1979「高知市の文化財と旧跡」

山内家史料刊行委員会 1992他「山内家史料 歴代公紀」

高知県文化財団 埋蔵文化財センター 2002「高知城伝下屋敷跡」

池澤俊幸 2004「土佐における広域分布品の様相」『中世西日本の流通と交通』高志書院

同 2005「四国における搬入品と流通・交通」『中近世土器の基礎研究ⅩⅨ』日本中世土器研究会

同 2010「南四国に搬入された中世土器・陶磁器と海運」『中世土佐の世界と一条氏』市村高男編 高志書院
高知市教育委員会 2010「西弘小路遺跡」

遺物観察表

図 No.	出土位置	器種	器形	法量(cm)			色 調			文様・釉薬・胎土	特徴(成形・銘)他	産地・年代等	残存度
				口径	器高	底径							
1	TP1 掘 V層	染付	水滴		1.9		断	灰白	5Y 8/1	呉須と褐釉で彩色	型作り、陽刻文、内面布痕、外底布痕 ^ナ 消し。上面に一孔		
2	TP1	青磁	碗	14.7			内 外	ホ-グ ^ナ 灰 灰白	2.5GY 2.5Y 7/1	貫入			1/4
3	TP1 ⅦかⅧ層	陶器か	碗か	15.5			外	黄灰	2.5Y 7/2	須恵器のような素地。口縁外面自然釉か			1/10
4	TP1 掘 V層		小壺	3.0			内	浅黄	2.5Y 8/3	無釉			上部の み 1/5
5	TP1 石列直上	青磁	菊皿	9.1	2.75	4.2	内 断	明緑灰 灰白	7.5GY 2.5Y 8/2	貫入あり。素地非ガラス化		16c. 後か	1/5
6	TP1 掘 V層	金具	把手	長 1.6	厚 0.6	重 12.6g					鑄造か。両端に孔		
7	TP1 掘 V層	瓦	平瓦			厚2.1		黄灰		焼し不十分	両面 ^ナ		
8	TP2	土師質	小皿	10.5			外	橙	7.5YR 7/6	精土。軟			
9	TP1 掘 Ⅵ層	土師質 土器		12.2			外	にぶい橙	7.5YR 6/4				1/8
10	TP1 Ⅸ層	土師質 土器	杯か皿			8.7	内	橙	2.5YR 6/6	精土	内底回転 ^ナ 痕。北壁		摩
11	TP1 掘 Ⅵ層	土師質 土器	杯			5.6	内	にぶい橙	7.5YR 7/4	精土	糸切	中世	
12	TP1 掘 Ⅵ層	土師質 土器	杯			7.2	内	橙	7.5YR 7/6	精土	糸切	中世	摩 1/3
13	TP1 ⅦかⅧ層	白磁	碗	15.4			外	灰白	7.5Y 8/1		玉縁	華南 平安末	1/9
14	TP1 掘 Ⅶ層	白磁	碗	19.3			外	灰白	5Y 7/2	外面下位露胎	玉縁	華南 平安末	1/10
15	TP1 ⅦかⅧ層	白磁	碗			4.9	内	灰ホ-グ ^ナ	5Y 6/2			華南 太宰府Ⅶ類	1/2
16	TP1 か2	青磁	稜花皿				内 断	灰ホ-グ ^ナ 灰黄褐	5Y 10YR 6/2	焼やや不良		龍泉窯系	
17	TP1 排土	焼締	擂鉢			19.2	外 断	灰赤 灰白	2.5YR 5Y 7/1		擂目が僅かになるまで使用、摩減	備前	1/5
18	TP1 排土	焼締	擂鉢				外 断	にぶい赤褐 緑灰	5YR 5G 6/1		若干使用摩耗		
19	TP2 Ⅳ層以下	陶器	天目	10.2			内 断	黒 灰白	7.5YR 7.5Y 8/1	素地緻密			1/8
20	TP2 Ⅳ層-SD1 境	白磁	碗	18.5			内	灰白	2.5Y 8/2	薄い透明釉。細貫入	薄くシャープ。西壁めり込み	中国 太宰府Ⅴ類	1/7
21	TP2 SD1	陶器	壺 (小)	7.7			外 断	灰黄褐 橙褐	10YR 4/2	内面「つけ掛け」痕			1/4
22	TP2 Ⅳ層以下	白磁		5.1			内	灰白	10Y 7/1	外底露胎か			
23	TP2 Ⅳ層以下	陶器	壺か甕				外 断	灰ホ-グ ^ナ にぶい黄	5Y 2.5Y 6/3	褐色の文様。灰釉	内面当具痕	肥前	
24	TP2 Ⅳ層、SD1	焼締	擂鉢	40.8			内	灰褐	5YR 4/2		外面下位に指痕。内面の摩耗少		摩 1/4
25	TP2 Ⅴ層最下	土師質 土器	杯			7.0	内	にぶい橙	7.5YR 7/4		北壁で検出		摩 1/4
26	TP2 Ⅴ層最下	青磁	小皿	9.0			内 断	灰ホ-グ ^ナ 灰	7.5Y 5Y 6/1		内底屈曲部に凹線。外面2条線		1/7

※ 凡例

内=内面, 外=外面, 断=断面, 精土=胎土精選, 軟=軟質, 糸切=糸切痕あり, 外底=底部外面, 前=前葉, 後=後葉, 著=顕著, 摩=摩耗
法量は復元値含む。残存度は口縁や底部径に対する割合等。

図 No.	出土位置	器種	器形	法量 (cm)			色 調			文様・釉薬・胎土	特徴(成形・銘)他	産地・年代等	残存度
				口径	器高	底径							
27	TP2 Ⅷ層	土師質 土器	杯			4.4	内	にぶい黄橙	10YR 7/3				摩 1/4
28	TP2 Ⅳ層以下	白磁	皿				内 断	灰白 浅黄	7.5Y 2.5Y 8/3	やや厚い釉。 素地非ガラス化		華南 E類 16C.	
29	TP2 SD1上層	瓦	丸瓦				外	灰	N 5/		内面布痕、紐痕。 外面スリ痕		
30	TP3 Ⅳ層最下 石列直上	染付	碗	11.3			外 断	明初-グ 灰白	10Y 8/1	青磁染付。貫入			1/4
31	TP3 Ⅳ層	色絵				6.9	外 断	明緑灰 灰白	7.5GY N 8/0	内面鳥の陽刻文と赤 絵。外底露胎			1/3
32	TP3 Ⅴ層	陶器	灯明皿	9.4	1.95	4.2	内 断	灰白 灰白	5Y 7/2 5Y 7/1	灰釉。内面外目。 内底マツ	口縁部にスス	京都系	
33	TP3 Ⅷ層	白磁	仏飯具	7.8	5.2	4.2	内 断	灰白 にぶい橙	5Y 8/2 5YR 7/3		畳付削り出し。Ⅷ層め り込み		準完
34	TP3 Ⅳ層下	染付	小皿	9.4	2.1	5.7	内	灰白	7.5Y 8/2	草蝶文。釉やや白濁		肥前 18C.前	準完
35	TP3 Ⅳ層最下	陶器	土鍋	21.0			内 断	暗赤灰 灰白	10R 4/1 5Y 7/1	褐釉			1/5
36	TP3 Ⅴ層最下	焼締	擂鉢	33.7	13.4	17.5	内	赤褐	10R 5/4	微小礫含	高台付		1/5
37	TP3 Ⅴ層最下	瓦	丸瓦				内 断	黄灰 明灰			内面条痕+布痕		
38	TP3	瓦				厚1.4		暗灰			小口に刻印(摩著)		摩
39	TP3 石列	瓦器	皿	9.3			外	灰白	5Y 7/1		外面沈線状。石間より 出土		1/7
40	TP3 Ⅴ層	焼締	擂鉢				内 断	褐灰 にぶい赤褐	7.5YR 4/1 5YR 5/3			備前 室町	
41	TP4 Ⅳ下層	瓦器	皿	10.5			内 断	灰 灰白	N 5/0 N 7/0	焼成良			1/9
42	TP4 SK1	瓦器					内 断	灰 灰白	5Y 6/1 5Y 7/1		内面ミカキ		摩
43	TP2か4 排土	瓦器	碗				外	灰	N 6/		内面沈線状の条痕、そ れを切るミカキ		
44	TP4 Ⅳ下層	土師質 土器	杯			6.1	内	にぶい黄橙	10YR 7/2		糸切		1/4
45	TP4 Ⅲ層	瓦	丸瓦			厚・ ~2.2		暗灰			内面に横位の細条痕(コ ビキ状)。玉縁部内面に 布痕		
46	TP6 Ⅱ層	瓦	軒平				外 断	初-グ 灰白	7.5Y 3/1 7.5Y 8/2		瓦当。銘あり		
47	TP6 Ⅱ層	瓦	平瓦			厚2.7	外 断	初-グ 灰初-グ	7.5Y 3/1 5Y 6/2		銘あり		
48	TP6排土	土師質 土器	釜	16.5			内	にぶい橙	7.5YR 6/4		外面タタ、内面粗タ。外 面スリ著	15C.	1/8
49	TP7 Ⅴ層より下	瓦	丸瓦			厚2.3	外 断	灰 灰	N 5/0 N 5/0		外面縄状痕を擦り消 す。内面布痕。硬質。燻 しなし。須恵質。		
50	TP7 Ⅴ層より下	瓦	丸瓦			厚3.8	外 断	灰 灰	5Y 6/1 5Y 6/1		内面布痕		
51	TP7 Ⅴ層の下	瓦				厚4.4	外 断	灰 灰	5Y 6/1 5Y 6/1		片面に条痕と布痕。硬 質		摩
52	TP8 Ⅵ層	土師質 土器	杯			5.3	外	浅黄橙	10YR 8/4		摩耗により不明。軟		摩 1/4
53	TP8 SX1	土師質 土器	杯			8.0	外	浅黄橙	10YR 8/4		摩耗により不明。軟		摩 1/3

図 No.	出土位置	器種	器形	法量(cm)			色 調				文様・釉薬・胎土	特徴(成形・銘)他	産地・年代等	残存度
				口径	器高	底径								
54	TP8 Ⅵ層	白磁	碗				外断	灰白 灰白	10Y 5Y	7/1 8/1	外面下位露胎	玉縁	華南 平安末	
55	TP8 Ⅵ層	白磁	碗				外断	灰利-グ	7.5Y	6/2			中国 太宰府ⅧかⅤ	
56	TP8 Ⅵ層	青磁	碗				外断	利-グ 灰 灰白	2.5GY 5Y	6/1 7/1	鎚蓮弁文		龍泉窯 鎌倉前	
57	TP8 包含層	炆器	甕			厚1.4	外断	黄灰 灰黄褐	2.5Y 10YR	4/1 5/2		タタ痕	常滑 中世	
58	TP8 包含層	炆器	甕					黄灰 灰黄褐				タタ痕	常滑 中世	
59	TP8 SX1の上	炆器	甕			厚1.6	外断	にぶい黄橙 黄灰	10YR 2.5Y	6/3 5/1		タタ痕	常滑 中世	
60	TP8 包含層	炆器	甕				外断	灰 灰褐	5Y 5YR	4/1 4/2			備前 室町	
61	TP8 Ⅵ層	須恵器 か	甕				内外断	にぶい赤褐 利-グ 黒	2.5YR 5Y	5/3 3/1	外面タタ。胎土は完全 には焼結していない が硬質			
62	TP10	瓦質 土器	鍋				外断	灰 灰白	N 5Y	6/0 7/1		口縁外に形骸化した鐳 を貼付し、接合部を粗 くヨコテ	室町	摩
63	1区W 擁壁 採取	染付	碗	11.2	5.9	6.4	内断	灰白	5GY	8/1	見込み文様は手描			1/2
64	1区W 擁壁 採取	染付	碗	11.3	6.3	4.6	内断	灰白	10Y	8/1				
65	1区W 擁壁 採取	白磁	皿	15.8	3.6	9.0	外断	灰白 灰白	7.5Y 7.5Y	8/1 8/1		畳付のみ軸ハキ。 内底擦痕	華南 16C.	2/5
66	2区	青磁	碗	12.7			外断	灰黄	2.5Y	6/2	外面タによる文様		同安窯 平安末～鎌倉初	
67	2区	瓦						利-グ 黒				銘あり		
68	1区W 擁壁 採取	瓦	丸瓦			厚1.8	内断	灰 灰黄	N 2.5Y	5/0 7/2		内面布痕		
69	4区 SD2肩	染付	皿	21.8	2.8	10.9	内外断	灰白 灰白 灰白	10Y 10Y 10Y	8/1 8/1 8/1	口縁内外に一条圈線	畳付に砂。 内面使用擦痕		1/2
70	4区 上層か	陶器	皿			4.8	内断	灰白 にぶい黄橙	2.5Y 10YR	7/1 7/4	厚い長石釉に粗貫入。 素地は不焼結。外底露 胎	高台内墨書「竹林□」か	瀬・美 17C. 前	1/4
71	4区 SK4	陶器	碗			4.5	内断	浅黄 淡黄	2.5Y 2.5Y	7/3 8/3	異須。外底露胎	高台内円刻と刻字(図 は字のみ縮尺1/2)	肥前 17C.	底 1/1
72	4区 P8	土師質 土器	皿	12.5	2.45	8.5	内外断	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	10YR 10YR 10YR	7/4 7/4 7/4		糸切		摩 2/3
73	4区 包含層	陶器	中甕	22.5			内外断	灰利-グ 暗赤褐 灰白	5Y 5YR 5Y	5/2 3/3 7/1	外面;褐釉に黒彩。 内面;灰釉(口縁まで)	祈年遺跡に同例		1/8
74	4区 SK3	土師質 土器	焙烙	26.4			内断	にぶい 黄橙	10YR	6/4	雲母微細片	外面スサ		1/9
75	4区 SK8	青磁	碗				外断	明利-グ 灰 淡黄	2.5GY 2.5Y	7/1 8/3	細蓮弁		龍泉窯 中世後期	
76	SX10 2層上層	青磁	皿				内断	明利-グ 灰 灰白	2.5GY N	7/1 7/0	稜花。櫛描文		龍泉窯 中世後期	
77	4区 採取	弥生				厚1.3	内外断	にぶい褐 にぶい褐	7.5YR 7.5YR	5/3 5/3	チート、砂岩小礫			摩
78	1区W 擁壁 採取	炆器	甕か壺			9.7	外断	灰黄 黄灰	2.5Y 2.5Y	6/2 6/1			備前	1/9
79	4区 上層	瓦	丸瓦			厚2.6						内面条痕の後に布痕。 外面縄状痕		
80	TP8	青磁	碗					灰利-グ			劃花文		龍泉窯 平安末～鎌倉初	小片

図 No	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)			色調	特徴(成形・銘等)	産地・年代等	残存
				口径	器高	底径				
81	SK13	磁器	碗蓋	4.0			灰白N8/0	望料碗の蓋。外面雪輪、内面四方樺。	肥前産 18世紀後半	
82	SK13	陶器	小碗	9.0	4.6	3.3	灰白5Y7/1	せんじ碗。灰白色を帯びる透明の釉。高台無釉。	京都系 18世紀中葉～後葉	
83	SK13	瓦	軒平瓦	長4.85		厚4.5	灰白N4/0			
84	SK14	磁器	中碗	(9.7)	5.75	3.9	灰白N8/0		肥前産 17世紀後半	口1/8
85	SD3	磁器	蓋物	(12.3)			灰白N8/0	赤・緑の上絵付による「福」。	肥前産	
86	SK15	磁器	碗蓋			3.8	灰白N8/0	外面青磁釉。内面四方樺・二重圈線・五弁花文。摘み内渦福。	肥前産 18世紀後半	
87	SK15	備前	灯明受皿	10.7	1.5	5.5	鈍赤褐2.5YR4/3	外面下半と外底回転ケズリ。内外面に錆釉。受部に灯芯油痕。		
88	SK15	陶器	土瓶	10.6	9.1		灰白2.5Y7/1	灰釉。錆絵。	尾戸窯又は京都系	
89	SK19 下層	土師質 土器	小皿	(7.2)	1.3	3.9	鈍橙7.5YR7/4	糸切り		
90	SK19 上層	磁器	中碗	(11.8)	6.25	(4.8)	灰白10Y8/1	丸形。外面青磁釉。口縁部内面四方樺、内底二重圈線。	肥前産 18世紀後半	
91	SK19 上層	磁器	小碗	(8.2)	4.15	3.1	明オリープ灰 2.5GY7/1	丸形。外面竹文か。	肥前産	口1/8
92	SK19 上層	磁器	猪口	7.2	5.0	4.7	灰白N8/0	輪花形	肥前産 17世紀後半	3/4
93	SK19	磁器	蓋物蓋			(13.1)	灰白N8/0	外面円圈文	肥前産	
94	SK19 下層	磁器	大皿			(13.9)	明オリープ灰 5GY7/1	高台に粗砂が付着	中国漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭	
95	SK19 下層	磁器	鉢	(13.2)	6.3	(5.9)	灰白5Y7/1	変形形。灰釉。呉須による草文。高台無釉。高台内に渦状の鈿痕。	尾戸窯 18世紀以降	底1/2
96	SK19 下層	陶器	小皿			(7.0)	鈍黄橙10YR7/2	灰釉。高台施釉。内底に砂目痕。	肥前系	底1/2
97	SK19 上層	陶器	土瓶	(11.2)			浅黄橙10YR8/4	灰釉。錆絵。		底完形
98	SK19	陶器	急須か 水注	9.5	13.95	9.9	灰白2.5Y8/1	後手形。灰釉。		
99	SK19	石製品	硯	長14.0	幅4.8	厚1.1	灰N5/0	裏銘「上之寺田石」		一部欠
100	SK20 上層	磁器	中碗	11.45	6.7	4.05	灰白10Y7/1	丸形。外面青磁釉。内面四方樺・二重圈線・五弁花文。高台内渦福。	肥前産 18世紀後半	ほぼ完
101	SK20	備前	灯明皿	9.6	1.3	5.3	鈍赤褐2.5YR5/3	灯明痕。底部ヘラ切り。		1/4
102	SK20	陶器	灯明受皿	10.0	2.15	3.15	灰白7.5Y7/1	灰釉	京都系 18世紀後半以降	完形
103	SK20	瓦質	紡錘車	長7.05	幅8.0	厚2.15	灰白N5/0			完形
104	SK21 上層	磁器	中碗	(11.3)	6.7	4.4	灰白10Y7/1	丸形。外面青磁釉。内面四方樺・二重圈線・五弁花文。高台内渦福。	肥前産 18世紀後半	口1/3
105	SK21 上層	陶器	灯明受皿	(11.1)	1.85	(3.5)	灰白5Y7/2	灰釉。内面に櫛目。内底に目痕。	京都系 18世紀後半以降	
106	SK21	陶器	小皿	11.5	1.8	7.9	灰白5Y8/1	白土器。内面に型押しによる陽刻の松竹梅鶴亀文。外面回転ケズリ後ナデ。	尾戸窯	
107	SK21	関西系 陶器	搦鉢	36.0	(4.4)		灰褐5YR5/2	関西系		
108	SK21 上層	瓦	軒平瓦	長(8.2)		厚4.3	緑灰5G6/1			

図 No.	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)			色 調	特徴 (成形・銘等)	産地・年代等	残存
				口径	器高	底径				
109	SK22	土師質 土器	小皿	9.5	1.55	6.05	橙 7.5YR7/6	底部条切り		完形
110	SK22	磁器	碗蓋		2.45	9.4	灰白 N8/0	外面区画間に「福寿」、内面帯線・草文	能茶山窯か	1/3
111	SK22	磁器	碗蓋		2.85	9.5	灰白 N8/0	外面山水文、内面流水文。	肥前系	3/4
112	SK22	磁器	中碗	(11.3)	5.95	3.8	灰白 N8/0	端反形。外面山水文、見込み流水文。	肥前系	1/2
113	SK22	陶器	段重	12.0	5.2	7.4	灰白 N8/0	外面波文。114とセット。体部と底部。無釉		完形
114	SK22	磁器	段重	12.4	6.65	8.5	灰白 N8/0	外面波文	肥前産又は肥前系 19世紀か	
115	SK22	磁器	鉢	14.4	7.2	6.3	灰白 N8/0	八角形。芙蓉手。	肥前産 19世紀前半～中葉	完形
116	SK22	磁器	薄手酒杯	9.65	3.25	3.3	灰白 N8/0	木杯形。青・金の上絵付による桐文・菊花文。	肥前産 19世紀前半～中葉	
117	SK22	磁器	仏飯器	6.5	6.05	3.7	灰白 N8/0	外面蛸唐草文	肥前産	ほぼ完
118	SK22	磁器	仏花瓶				灰白 5Y7/1			
119	SK22	陶器	蓋			(12.3)	鈍橙 7.5YR6/4	灰釉		口 1/4
120	SK22	陶器	蓋	4.0	(1.9)		灰白 2.5Y8/2	灰釉。緑釉と錆絵による文様。		ほぼ完
121	SK22	陶器	小碗	(7.1)	2.05	(4.7)	灰オリーブ 5Y6/2	灰釉		1/2
122	SK22	陶器	小碗	8.75	4.95	3.15	灰白 5Y7/2	端反形。灰釉。高台無釉。	京都系	ほぼ完
123	SK22	陶器	小皿	11.45	1.85	7.0	灰白 2.5Y8/2	白土器。内面に型押しによる陽刻の高砂文。外面回転ケズリ後ナデ。	尾戸窯	口 1/2
124	SK22	陶器	灯明受皿	6.7	5.55	3.65	暗赤褐 5YR3/2	台付き。鉄釉。外底回転糸切り。	能茶山窯 1820年代～1860年代	完形
125	SK22	陶器	捏鉢		(3.9)	8.6	暗赤灰 5R3/1	褐釉。高台無釉。内底に目痕。	能茶山窯 1820年代～1860年代	底 3/4
126	SK22	陶器	灯明受皿	10.7	2.3	4.1	灰白 5Y7/2	灰釉。内面に櫛目。	京都系	
127	SK22	陶器	土瓶	(6.8)			灰オリーブ 7.5Y5/2	灰釉		
128	SK22	陶器	行平	15.8	(5.0)		灰オリーブ 5Y6/2	灰釉。外面に飛鉋。		
129	SK22	土師質 土器	焜炉	(16.0)	12.65	(14.9)	灰白 10YR8/2			
130	SK22	陶器	植木鉢	13.7	(8.0)		鈍褐 7.5YR6/3	鉄釉。外面飛鉋。	能茶山窯か	口 1/2
131	SK22	瓦	軒平瓦	長 (15.0)		厚 4.7		刻印「和食」		
132	SK22	鉄器	鎌	長 21.5	幅 3.0	厚 2.0				
133	SK23	陶器	瓶か			(9.9)	灰白 2.5Y8/2	灰釉。高台と内面施釉。	尾戸窯	
134	SK23	備前	鉢	(16.3)	8.75	12.95	灰 Y6/2			底 2/3
135	SK23	備前	水屋瓶	30.3	(7.3)		灰赤 2.5YR4/2			
136	SK23	備前焼	搦鉢	28.5	(5.7)		橙 2.5YR6/6			1/4

図 No	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)			色調	特徴(成形・銘等)	産地・年代等	残存
				口径	器高	底径				
137	SK23	瓦	平瓦	全長29.9		全厚2.4	緑灰5G6/			
138	SK25	肥前系 陶器	小皿	(12.2)	4.6	(4.3)	浅黄2.5Y7/4	京焼風陶器。灰釉。呉須による山水文。高台内に銘印。	肥前産 1660～1690年代	
139	SK27	関西系 陶器	播鉢	31.0	(4.8)		赤褐10R4/4	関西系		1/8
140	SK28	備前焼	播鉢	30.6	(10.1)		鈍赤褐5YR5/4			
141	SK30 IV層	染付	仏飯具	7	4.7	3.9	灰白N8/0 灰白N8/0	雨降文。外底露胎		2/3
142	SK30 IV層	青磁 染付	碗	11.2	6.7	4.4	明緑灰10GY7/1 2灰白.5GY8/1			1/2
143	SK30 IV層	白磁	猪口	9.4	4.2		灰白N8/	輪花		1/7
144	SK30	陶器	碗	11.3			灰白7.5Y8/1 2灰白.5Y8/2	外面鉄絵		1/8
145	SK30 IV層	陶器	皿	11.9	4.35	4.6	淡黄2.5Y8/4 淡黄2.5Y8/4	上絵付。朱色以外退色。外底露胎	京都系 18世紀中	1/2弱
146	SK30 I層	陶器	皿	12.2	4.15	4	灰白5Y7/2 灰白5Y8/1	上絵付。朱色以外は退色。高台内露胎、墨書	京都系 18世紀	底 1/1
147	SK30 IV層	陶器	皿	12.2	4.6	4.4	浅黄2.5Y7/3 灰白2.5Y8/2	外底露胎。京焼風	肥前 18世紀初頃	底 1/1
148	SK30 IV層	陶器	皿	12.9	4.8	4.3	鈍黄2.5Y6/3 灰黄2.5Y7/2	鉄絵、貫入。京焼風	肥前 18世紀前	底 1/1
149	SK30 IV層	陶器	火鉢	31.6			淡黄2.5Y8/3	厚い白濁釉。内面は剥離		1/4
150	4区TP11 SX5	陶器	甕			19.5	褐灰7.5YR4/1	薄い褐釉。外面格子タタキ。 内面同心円当具痕をナデ消す。		1/2
151	SK30 IV層	瓦	丸瓦				暗灰N3/0 灰N6/0			
152	SK30	陶器	中碗	(9.8)	6.1	4.1	浅黄2.5Y7/4	灰釉。高台無釉。	肥前産又は肥前系	1/3
153	SK30	磁器	小皿	長8.15	幅10.6	厚2.35	灰白N8/0	糸切り細工。口紅。内面花唐草文・青海波文・七宝文・丸文。外面雲・草花。高台内「大明成化年製」銘	肥前産	一部欠
154	SK30	陶器	火鉢か 水鉢	(30.8)			灰白2.5Y8/2	灰白色の釉。149と同一個体か。		
155	SK30	石製品	砥石	長14.0	幅14.2	厚4.5	緑灰5G6/			
156	SK31	土師質 土器	小皿	6.95	1.0	4.7	橙7.5YR7/6	灯明痕。底部糸切り		完形
157	SK31	土師質 土器	小皿	6.6	0.8	4.45	橙7.5YR7/6	底部糸切り		ほぼ完
158	SK30・31	土師質 土器	小皿	6.75	1.1	4.75	橙7.5YR7/6	底部糸切り		完形
159	SK31	土師質 土器	小皿	6.45	1.2	3.95	橙7.5YR7/6	灯明痕。底部糸切り		完形
160	SK31	土師質 土器	小皿	6.85	1.15	4.4	橙7.5YR7/6			2 /3
161	SK31	土師質 土器	小皿	6.55	1.0	5.05	橙7.5YR7/6	灯明痕。底部糸切り		1/2
162	SK31	磁器	瓶類			4.2	灰白N8/0	内面施釉		
163	SK32	磁器	大皿	(25.0)	3.0	16.5	灰白N8/0	外面に如意頭連続唐草文、内面に岩・植物・松竹梅円形文。高台内「大明成化年製」銘。	肥前産 18世紀後半	
164	SK32	陶器	小碗	(12.3)	4.9	4.1	灰黄2.5Y7/2	灰釉。鉄錆による山水文。	肥前産又は肥前系	1/6

図 No.	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)			色調	特徴 (成形・銘等)	産地・年代等	残存
				口径	器高	底径				
165	SK32	備前焼	播鉢	(41.6)			赤褐 10R4/4			1/4
166	SK32	備前焼	播鉢	33.2	(7.3)		赤褐 10R4/3			
167	SK33	陶器	小皿	(14.4)			灰白 5Y7/1	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。	肥前産 17世紀前半	
168	6区 包含層	磁器	中碗	(11.2)	6.2	4.5	灰白 N8/0	丸形。外面青磁釉。内面四方櫛・二重圏線・五弁花文。高台内渦「福」。	肥前産 18世紀後半	
169	6区 包含層	磁器	紅皿	4.4	1.4	1.6	灰白 N8/0	型による菊弁。外面下半無釉。	肥前産 18世紀後半～19世紀中葉	
170	6区 包含層	備前焼	灯明受皿	10.3	1.8	(4.2)	灰赤 2.5YR5/2	内面に鉄釉。外面回転ケズリ。		
171	6区 包含層	石製品	砥石	長22.6	幅16.7	厚5.0	緑灰 5G6/			
172	7区 包含層	磁器	仏飯器			4.35	灰白 N8/0	脚部外面に圏線	肥前産	
173	7区 包含層	磁器	仏飯器		(3.9)	3.8	灰白 2.5Y8/2	外面に圏線。透明釉は焼成不良気味で白濁。	肥前産	
174	7区 包含層	陶器	小皿	(12.4)	4.5	4.2	灰オリーブ 5Y6/2	灰釉。内面に呉須による略化した山水文。	肥前産	
175	7区 包含層	陶器	小碗	(9.0)	5.85	3.0	灰白 5Y8/1	半球形。灰釉。高台無釉。	京都系 18世紀中葉～後葉	
176	7区 包含層	陶器	灯明受皿	8.7	1.4	3.2	灰白 5Y7/2	灰釉。外面無釉。外底に渦状の匏痕。	京都系 18世紀後半以降	口1/8
177	7区 包含層	備前焼	灯明受皿	(10.3)	1.4	4.6	鈍赤褐 2.5YR5/3	内外面に鉄釉。外面回転ケズリ。		1/8
178	7区 包含層	陶器	植木鉢		(11.1)	8.0	鈍褐 7.5YR6/3	鉄釉。内面無釉。外面に飛匏。	能茶山窯 1820年代～1860年代	底1/2
179	7区 包含層	陶器	灯明受皿	(6.5)	1.4	(2.8)	灰白 5Y7/2	灰釉。外面無釉。外面回転ケズリ。	京都系	口1/8
180	7区 包含層	陶器	壺	33.4	(29.4)		褐 7.5YR4/3			
181	7区 包含層	備前焼	播鉢	29.3	(6.6)		灰赤 2.5YR5/2		18世紀前半	
182	7区 包含層	備前焼	播鉢	(43.2)	14.4	(19.5)	灰赤 10R4/2		18世紀前半	

付編 石垣等専門家視察時の覚え書き

第1章のごとく、専門家を現地に招聘した際の所見を記録する。

I. 2006年7月27日 視察者：帝京大学山梨文化財研究所長 萩原三雄、奈良県立橿原考古学研究所
北垣聰一郎、佐賀県立名護屋城博物館学芸課長 高瀬哲郎(いずれも当時・敬称略)

随伴：牧野植物園、自然共生課、県教委文化財課

1. 指摘・確認事項

- ・「遍路道」に伴う石垣や石段、側溝等は、近世以前のものがかなり残っているとみられる。
- ・参道の両脇或いは片脇に側溝を配する構造は、白山・平泉寺跡等でもみられる。
- ・その他の部分、各平場の端部等にある石垣も、各所に「鏡石」状の石を配する。石材はほぼチャートで統一されており、少なくとも指摘した部分については、積み方も古い様相を呈する。
- ・矢穴痕を有する築石を確認(今次対象区南東部の石垣)。
- ・各「坊」へ入る石段や、排水溝の遺構を確認。石段は状況からみて古いものとみられる。
- ・現在視野に入る広い範囲にさらに段部や石垣が展開しているようだ。「山岳寺院」の諸例を考えた場合、遺構遺存範囲は予想以上に広い可能性がある。竹林寺は中世段階からの繁栄が推測できるが、史料は乏しく、今後埋蔵文化財から姿を復元できる可能性がある。

2. まとめ

石垣等の遺構の残りは総じて良好で、近世以前(戦国～江戸時代頃か)の部分も存在するとみられる。段状に残る各小平場は寺院関連施設が建っていた坊跡等で、試掘調査を行えば遺構・遺物が検出されるであろう。

周囲の景観も往時を偲ぶことができ、秀逸な遺跡である。今後石垣調査や発掘調査によって年代等が判明すれば、重要な史跡に値すると評価できる。

II. 2007年3月22日 視察者：文化庁記念物課 本中 眞 主任調査官

随伴：牧野植物園、県教委文化財課

1. 指摘事項

総合的にみて、調査と評価によって重要な史跡となり得る遺跡であり、長期的な見通しを持った保存計画が望ましい。植物園としての文化・歴史的価値も評価できる。植物園、遺跡、名勝地といった諸要素が共存する事例といえる。

※ いずれも現地での口頭による指摘や、参加者を含めた確認事項の覚え書きで、文責は本書の編集担当者にある。



「遍路道」石垣等(調査前)。西(上方)より。右手が調査2区。

写真図版



五台山山頂より，北～北東国府方面を望む



TP1 サブトレンチ (東より)



TP1 試掘終了状態 (南より)

PL3



TP1 試掘終了状態（北より）



TP1 南壁



TP1 南壁サブトレンチ



TP2 試掘終了状態（南より）

PL5



TP2 東壁



TP2 西壁



TP3 試掘終了状態（南より）



TP3 サブトレレンチセクション（北西より）

PL7



TP3 南壁



TP4 東～南壁



TP4 ビット検出状況等（北より）



TP4 試掘終了状態（北より）

PL9



TP4 SK1



TP5 (南より)



TP5 石垣背面



TP6 (北より)

PL11



TP7 (東より)



TP8 試掘終了状態 (北より)



TP9 石垣背面



4区 TP11 手前左・SK30, 中央・SX4, 奥・SX5 (東より)

PL13



TP4 土師質土器 44 出土状況



TP1 サブトレンチ土師質土器出土状況



TP8 白磁玉縁碗 54 出土状況



TP7 瓦 50 出土状況



記者発表（2006 年度試掘）



SX8 緊急調査状況



4区 本調査完了状態（南より）

PL15



4区 本調査完了状態（北より）



4区 本調査 遺構検出状況（北東より）



4区 南壁

PL17



4区 SD2 及びセクション（北より）



4区 SD2 南端染付皿出土状態（南より）



4区 SK4 セクション



4区 SK7 (左), SK6 (右) 西より

PL19



4区 SX7 南北セクション（北東より）



4区 SX8 岩石出土状況（東より）



4区 SX8 セクション (西より)



4区 北端部遺構検出状態 (南より)

PL21



4区北端部遺構完掘状況（西より）



4区 P8石、遺物出土状態（北より）



6～8区遠景（南東から）



調査前風景（北東から）



5区全景（北から）



SK10（東から）



SK11（北西から）



SK13断面（東から）

PL23



SK13 (南から)



SD3 (南東から)



6区全景 (南西から)



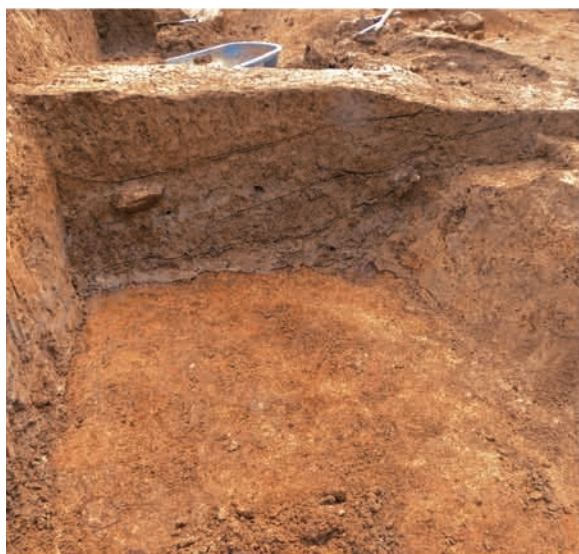
SK15断面 (北から)



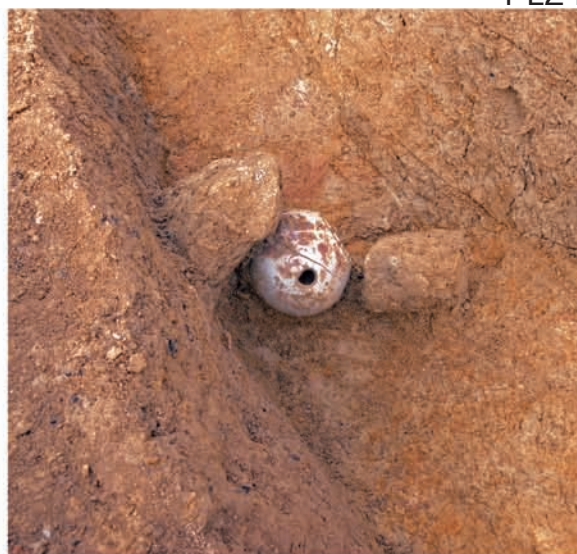
SK16断面 (北から)



SK17 (南西から)



SK19断面（北西から）



SK19遺物出土状況（南から）



7区全景（南から）



SK20（北から）



SK21（北東から）



SK22断面（北東から）

PL25



SK22 (西から)



SK23断面 (東から)



SK23 (南から)



SK25断面 (南から)



SK26断面 (南から)



SK30 (北から)



SK32断面（南から）



SK33（西から）



P12遺物出土状況（北から）



SD4検出状況（東から）



SD4石組み（北西から）



8区作業風景（南から）

PL27



SK34・35断面（北西から）



SK34・35（北東から）



8区土層断面（南から）



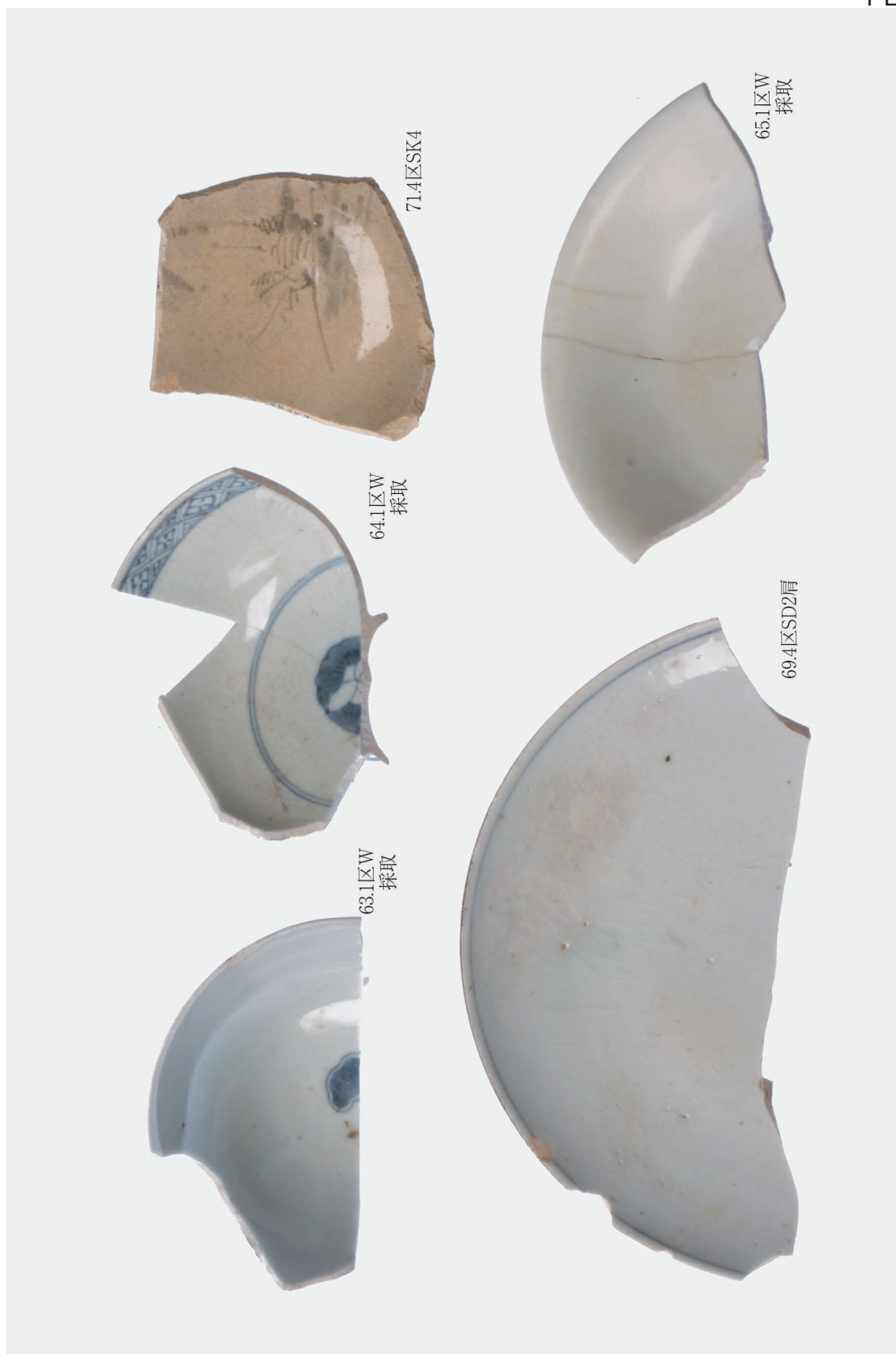
9区作業風景



9区西半（南から）



9区土層断面（北西から）



1, 4 区出土陶磁器

PL29



同前（外面）



4 区 SK4 出土陶器（刻字拡大）



TP6 出土瓦



1 区出土遺物 (70のみ4区)



同前 (外面)



1, 2, 4 区出土播鉢, 土銅, 甕, 瓦



同前 (外面)



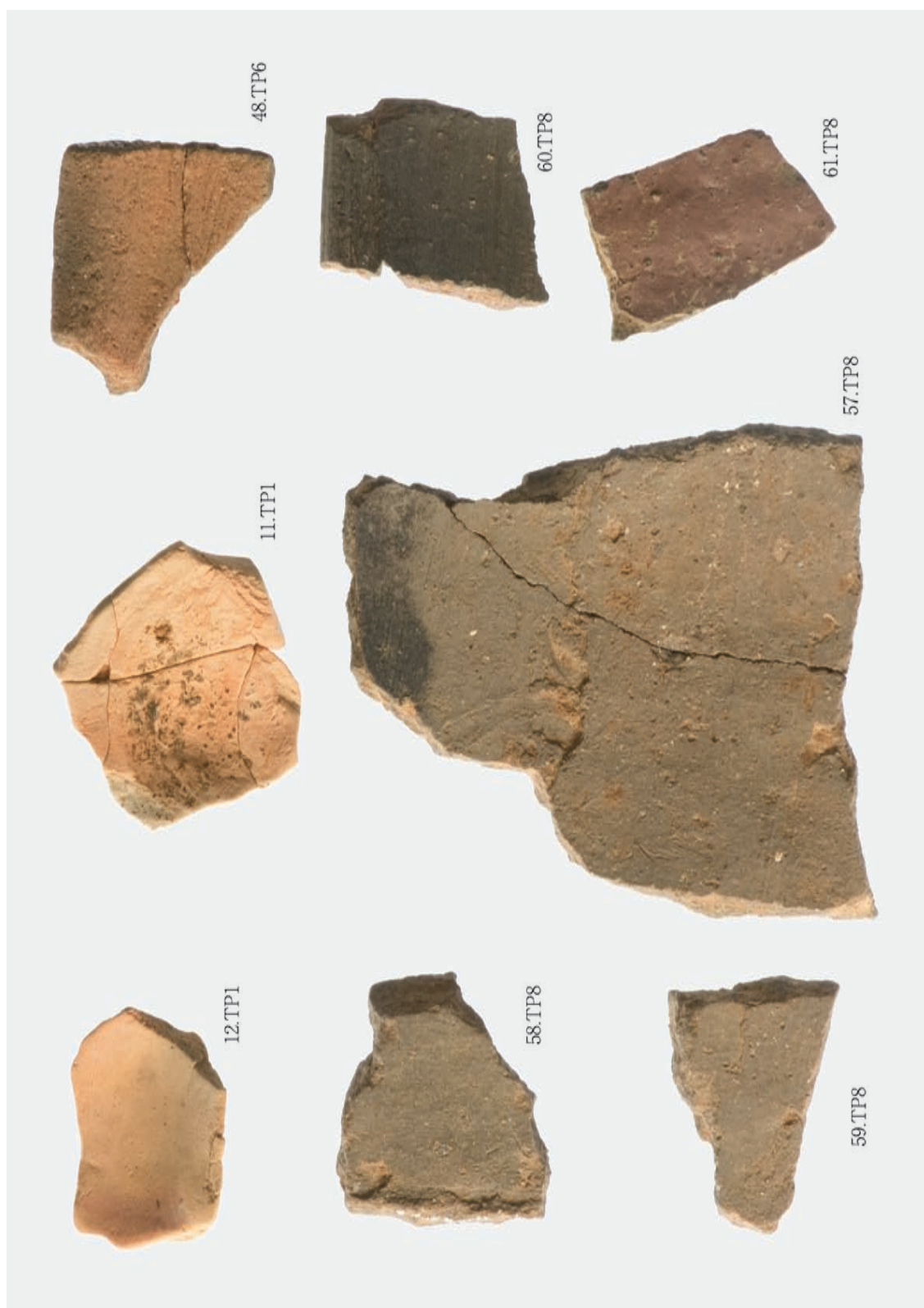
貿易陶磁器，瓦器，弥生土器（1～4区）



同前 (外面)



常滑焼，備前焼，須恵器，土師質土器（1～3区）



同前 (内面)

PL39



外面



内面

1, 2区 出土瓦



5, 6 区 出土遺物

PL41



6, 7 区 出土遺物



7 区 出土遺物

PL43



7区 出土遺物



7 区 出土遺物

PL45



2A,2B,2C,3C 区, 試掘 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちくりんじあと							
書 名	竹林寺跡							
副書名	県立牧野植物園南園再整備事業及び温室建替えに伴う 埋蔵文化財試掘・発掘調査報告書							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	池澤俊幸・弘田和司							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0003 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671 FAX 088-864-1423							
発行年月日	2010年12月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくりんじあと 竹林寺跡	こうちけんこうちしごだいさん 高知県高知市五台山 3584-イ	39201	010075	33° 32′ 49″	133° 34′ 43″	20070123 ～ 20090713	試掘調査 112 本調査 449	植物園再 整備及び 温室建替 え
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
竹林寺跡	寺院跡	弥生 中世 近世		掘立柱建物跡、 溝跡、土坑跡、 礫敷遺構、他、		弥生土器、 須恵器、 土師質土器、 貿易陶磁器、 中世陶器、 瓦器、 近世陶磁器、 近代陶磁器、 瓦、他		立地する五台山は、土佐 の要所である浦戸湾の 中心部に所在。同山にあ る吸江庵には夢窓疎石 らが関与し、宗教・文化 拠点としての位置を占 め続ける。
要 約	竹林寺は、行基や空海の伝承と平安仏が残る古刹である。今回初めての発掘調査により、文献ではほとんど実態が判明していなかった中世以前の遺構・遺物が検出され、平安末～鎌倉初期からの活動が確認された。出土遺物には貿易陶磁器をはじめとする搬入品が相当比含まれており、当寺の性格や位置付けを示唆する。近世では17世紀～幕末まで遺物が出土し、連続とした活動状況が確認できた。遺構には石を使用したものもみられる。							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第116集

竹林寺跡

県立牧野植物園南園再整備事業及び温室建替えに伴う
埋蔵文化財試掘・発掘調査報告書

編集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1
電話 088-864-0671

発行日 2010年12月24日

印刷 有限会社 片岡印刷所

